



BEA WebLogic Platform™

BEA WebLogic Platform の インストール

バージョン 7.0 (Service Pack 2)
マニュアルの日付 : 2003 年 2 月
パート番号 : 885-001001-003

著作権

Copyright © 2003 BEA Systems, Inc. All Rights Reserved.

限定的権利条項

本ソフトウェアおよびマニュアルは、BEA Systems, Inc. 又は日本ビー・イー・エー・システムズ株式会社（以下、「BEA」といいます）の使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができ、同契約の条項通りにのみ使用またはコピーすることができます。同契約で明示的に許可されている以外の方法で同ソフトウェアをコピーすることは法律に違反します。このマニュアルの一部または全部を、BEA からの書面による事前の同意なしに、複写、複製、翻訳、あるいはいかなる電子媒体または機械可読形式への変換も行うことはできません。

米国政府による使用、複製もしくは開示は、BEA の使用許諾契約、および FAR 52.227-19 の「Commercial Computer Software-Restricted Rights」条項のサブパラグラフ (c)(1)、DFARS 252.227-7013 の「Rights in Technical Data and Computer Software」条項のサブパラグラフ (c)(1)(ii)、NASA FAR 補遺 16-52.227-86 の「Commercial Computer Software--Licensing」条項のサブパラグラフ (d)、もしくはそれらと同等の条項で定める制限の対象となります。

このマニュアルに記載されている内容は予告なく変更されることがあり、また BEA による責務を意味するものではありません。本ソフトウェアおよびマニュアルは「現状のまま」提供され、商品性や特定用途への適合性を始めとする（ただし、これらには限定されない）いかなる種類の保証も与えません。さらに、BEA は、正当性、正確さ、信頼性などについて、本ソフトウェアまたはマニュアルの使用もしくは使用結果に関していかなる確約、保証、あるいは表明も行いません。

商標または登録商標

BEA、Jolt、Tuxedo、および WebLogic は、BEA Systems, Inc. の登録商標です。BEA Builder、BEA Campaign Manager for WebLogic、BEA eLink、BEA Liquid Data for WebLogic、BEA Manager、BEA WebLogic Commerce Server、BEA WebLogic Enterprise、BEA WebLogic Enterprise Platform、BEA WebLogic Express、BEA WebLogic Integration、BEA WebLogic Personalization Server、BEA WebLogic Platform、BEA WebLogic Portal、BEA WebLogic Server、BEA WebLogic Workshop、および How Business Becomes E-Business は、BEA Systems, Inc の商標です。

その他の商標はすべて、関係各社がその権利を有します。

目次

このマニュアルの内容

対象読者	x
e-docs Web サイト	x
このマニュアルの印刷方法	xi
関連情報	xi
サポート情報	xi
表記規則	xii

1. WebLogic Platform インストールの準備

BEA WebLogic Platform のインストールの概要	1-2
WebLogic Express のサポート	1-2
インストール方法	1-3
WebLogic Platform ソフトウェア コンポーネント	1-4
WebLogic Server と WebLogic Workshop	1-4
WebLogic Integration	1-5
EDI 統合	1-6
WebLogic Portal	1-7
WebLogic Platform のサンプルとユーティリティ	1-7
WebLogic Integration の補足製品	1-8
WebLogic Platform の配布方法	1-8
WebLogic Platform の Web 配布	1-9
WebLogic Platform の CD-ROM 配布	1-10
サービス パックとローリング パッチの Web 配布	1-11
BEA WebLogic JRockit 7.0 (Service Pack 2) の概要	1-11
インストールの要件	1-13
システム要件	1-13
一時ディスク スペースの要件	1-15
Administrator 特権	1-16
ライセンスおよび暗号	1-16

128ビット暗号の概要	1-17
インストールの種類選択	1-17
WebLogic Platform インストールのためのディレクトリ選択	1-18
BEA ホーム ディレクトリの選択	1-19
BEA ホーム ディレクトリの機能について	1-20
複数の BEA ホーム ディレクトリの作成	1-22
製品インストールディレクトリの選択	1-23
ユーザドメイン ディレクトリの選択	1-23
アップグレード情報および移行情報の掲示場所	1-24
Smart Update の概要	1-25

2. グラフィカル モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

作業開始前の注意	2-1
Windows プラットフォームでのグラフィカル モードのインストールプログラムの起動 2-2	
UNIX プラットフォームでのグラフィカル モードのインストールプログラムの起動	2-4
.bin インストール ファイルのためのグラフィカル モード インストールの開始	2-4
.jar インストール ファイルのためのグラフィカル モード インストールの開始	2-6
インストールプログラムの実行	2-7
コンフィグレーション ウィザードの使い方	2-12
コンフィグレーションのオプション	2-13
次に行う作業	2-14

3. コンソール モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

作業開始前の注意	3-1
Windows システムでのコンソール モード インストールの開始	3-2
UNIX システム上でのコンソール モード インストールの開始	3-4
.bin インストール ファイルのためのコンソール モード インストールの開始	3-5
.jar インストール ファイルのためのコンソール モード インストールの開始	3-6
コンソール モード インストールの実行	3-8
次に行う作業	3-15

4. サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

サイレント モード インストールの概要	4-1
作業開始前の注意.....	4-2
サイレント モード インストールの使用: 主な手順	4-2
サイレント モード インストールについての重要な注意事項.....	4-3
サイレント モード インストール用のテンプレート ファイル作成	4-4
Windows システムでのサイレント モード インストール処理の開始	4-11
UNIX システムでのサイレント モード インストール処理の開始.....	4-12
.bin インストール ファイルのためのサイレント モード インストールの開始...	4-13
.jar インストール ファイルのためのサイレント モード インストールの開始 ...	4-14
サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル	4-15
統合テンプレート ファイルのサンプル	4-16
独立した管理サーバおよび管理対象サーバを持つドメインのコンフィグレーション 用サンプルテンプレート	4-19
管理対象サーバのクラスタのコンフィグレーション用サンプルテンプレート	4-21
既存のドメインへの管理対象サーバの追加用サンプルテンプレート	4-23
次に行う作業	4-25

5. WebLogic Platform ライセンス ファイルのイン ストールおよび更新

WebLogic Platform ライセンスについて	5-1
評価ライセンス	5-2
開発者ライセンス、製品ライセンス	5-2
license.bea ファイルの更新	5-2
128 ビット暗号の有効化.....	5-4
WebLogic Platform 製品の 7.0 リリース以前のライセンスのアップグレード	5-6

6. インストール後の作業実行

QuickStart の使用	6-1
サンプルの実行	6-2
他のデータベースへの切り替え.....	6-3
使用している SDK のバージョンの確認.....	6-4
WebLogic Platform の Windows ショートカットについて	6-5

WebLogic Platform のスタート メニュー	6-6
WebLogic Platform 製品ディレクトリ構造について.....	6-8

7. サービス パックとローリング パッチのインストール

サービス パックとローリング パッチの概要	7-2
WebLogic Server 7.0 GA (7.0.0.0) の更新に関する重要な注意事項	7-3
Smart Update を使用したサービス パックとローリング パッチのインストール	7-4
ダウンロード可能なアップグレード インストーラを使用したサービス パックとローリング パッチのインストール.....	7-7
グラフィカル モードでのアップグレード インストーラの使用.....	7-8
コンソール モードでのアップグレード インストーラの使用	7-11
Smart Update を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストール.....	7-16
次に行う作業.....	7-17

8. WebLogic Platform のアンインストール

アンインストールプログラムについて	8-1
サービス パックとローリング パッチのアンインストール	8-2
グラフィカル モードでの WebLogic Platform のアンインストール.....	8-3
コンソール モードでの WebLogic Platform のアンインストール	8-5
サイレント モードでの WebLogic Platform のアンインストール	8-8
グラフィカル モードでのサービス パックまたはローリング パッチのアンインストール 8-10	
コンソール モードでのサービス パックまたはローリング パッチのアンインストール、 8-11	
WebLogic Platform の再インストール	8-11

A. BEA EDI Connect for WebLogic Integration のインストール

Power.Server! の要件	A-2
データベースの要件	A-2
セキュリティ要件	A-2
システム要件.....	A-2
Power.Enterprise! Server、Power.Server! のインストール.....	A-3

Power.Enterprise! のクライアントである Power.Map! と Power.Manager! のインストール	A-4
システム要件	A-4
インストール方法	A-4
WebLogic Integration のライセンスのための BEA EDI Connect のインストール	A-5

索引

このマニュアルの内容

このマニュアルでは、BEA WebLogic Platform™ ソフトウェアを Windows システムおよび UNIX システムにインストールする方法について説明します。

このマニュアルの内容は以下のとおりです。

- 第 1 章「WebLogic Platform インストールの準備」では、WebLogic Platform をインストールする前に知っておく必要がある基本的な情報について説明します。
- 第 2 章「グラフィカル モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」では、Java ベースのグラフィカル ユーザ インタフェース (GUI) を使用して Windows システムおよび UNIX システムに WebLogic Platform をインストールする方法について説明します。
- 第 3 章「コンソール モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」では、テキストベース インタフェースを使用して Windows システムおよび UNIX システムに WebLogic Platform をインストールする方法について説明します。
- 第 4 章「サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」では、インストールプロセスでテンプレート ファイルを使用して、ユーザの介入なしに WebLogic Platform をインストールする方法について説明します。代表的なサンプル テンプレート ファイルについても説明されています。
- 第 5 章「WebLogic Platform ライセンス ファイルのインストールおよび更新」では、WebLogic Platform のために取得可能なライセンスの種類、ライセンス ファイルを更新する方法、および 128 ビット暗号を有効化する方法について説明します。

このマニュアルの内容

- 第6章「インストール後の作業実行」では、ソフトウェアをインストールした後で行う必要がある作業について、説明します。
- 第7章「サービス パックとローリング パッチのインストール」では、**Smart Update** を使用したメンテナンス アップグレードおよびダウンロード可能なアップグレード インストーラのインストール方法について、説明します。また、**Smart Update** を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストール方法についても説明します。
- 第8章「**WebLogic Platform** のアンインストール」では、グラフィカル モード、コンソール モード、およびサイレント モードで **WebLogic Platform** をアンインストールする手順を説明します。
- 付録A「**BEA EDI Connect for WebLogic Integration** のインストール」では、データベースおよびシステムの要件、および **Power.Server!**、**Power.Manager!**、および **Power.Map** ソフトウェアのインストール方法を説明します。**BEA EDI Connect for WebLogic Integration** ソフトウェアのライセンス取得プロシージャも説明されています。

対象読者

このマニュアルは、**WebLogic Platform** をインストールするシステム管理者またはアプリケーション開発者を対象としています。**Web** 技術、および **Windows** システムと **UNIX** システムの一般的な概念について読者が精通していることを前提として書かれています。

e-docs Web サイト

BEA 製品のドキュメントは、**BEA** の **Web** サイトで入手できます。**BEA** ホーム ページから、[製品のドキュメント] をクリックするか、<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/index.html> にある「**BEA Product Documentation**」ページに直接移動します。

このマニュアルの印刷方法

Web ブラウザの [ファイル | 印刷] オプションを使用すると、Web ブラウザからこのマニュアルを一度に 1 ファイルずつ印刷できます。

このマニュアルの PDF 版は、e-docs Web サイトにある WebLogic Platform ドキュメントのホームページで入手できます (また、ドキュメント CD-ROM にも収録されています)。PDF を Adobe Acrobat Reader で開くと、マニュアルの全体 (または一部分) を書籍の形式で印刷できます。PDF を表示するには、WebLogic Platform ドキュメントのホームページを開き、[Download Docs] をクリックして、印刷するマニュアルを選択します。

Adobe Acrobat Reader がない場合は、<http://www.adobe.co.jp> にある Adobe Web サイトから無料で入手できます。

関連情報

BEA の Web サイトには、WebLogic Platform の全マニュアルがあります。WebLogic Platform ソフトウェアをインストールするときに参考となる WebLogic Platform に関する他のマニュアルは、次のとおりです。

- 『BEA WebLogic Platform の紹介』
- 『コンフィグレーション ウィザードの使い方』

サポート情報

BEA WebLogic Platform のドキュメントに関するユーザからのフィードバックは弊社にとって非常に重要です。ご質問やご意見などがあれば、電子メールで docsupport-jp@beasys.com までお送りください。寄せられたご意見については、ドキュメントを作成および改訂する BEA の専門の担当者が直に目を通します。

電子メールのメッセージには、ご使用中の WebLogic Platform ドキュメントのリリース番号を明記してください。

このマニュアルの内容

本バージョンの **BEA WebLogic Platform** について不明な点がある場合、または **BEA WebLogic Platform** のインストールおよび動作に問題がある場合は、**BEA WebSupport** (www.bea.com) を通じて **BEA カスタマサポート** までお問い合わせください。カスタマサポートへの連絡方法については、製品パッケージに同梱されているカスタマサポートカードにも記載されています。

カスタマサポートでは以下の情報をお尋ねしますので、お問い合わせの際はあらかじめご用意ください。

- お名前、電子メールアドレス、電話番号、ファクス番号
- 会社の名前と住所
- お使いの機種とコード番号
- 製品の名前とバージョン
- 問題の状況と表示されるエラーメッセージの内容

表記規則

このマニュアルでは、全体を通して以下の表記規則が使用されています。

表記法	説明
太字のテキスト	用語集で定義されている用語を示す。
[Ctrl] + [Tab]	複数のキーを同時に押す必要があることを示す。
<i>斜体</i>	強調または書籍のタイトルを示す。

表記法	説明
等幅テキスト	<p>コード サンプル、コマンドとそのオプション、Java のクラス、データ型、ディレクトリ、およびファイル名とその拡張子を示す。等幅テキストはキーボードから入力するテキストも示す。</p> <p>例:</p> <pre>import java.util.Enumeration; chmod u+w * config/examples/applications .java config.xml float</pre>
太字の等幅テキスト	<p>コード内の重要な語を示す。</p> <p>例:</p> <pre>void commit ()</pre>
斜体の等幅テキスト	<p>コード内の変数を示す。</p> <p>例:</p> <pre>String <i>CustomerName</i>;</pre>
すべて大文字のテキスト	<p>デバイス名、環境変数、および論理演算子を示す。</p> <p>例:</p> <pre>LPT1 BEA_HOME OR</pre>
{ }	<p>構文の中で複数の選択肢を示す。{ } 自体は、入力しない。</p>
[]	<p>構文の中で任意指定の項目を示す。[] 自体は、入力しない。</p> <p>例:</p> <pre>java utils.MulticastTest -n name -a address [-p portnumber] [-t timeout] [-s send]</pre>
	<p>構文の中で相互に排他的な選択肢を区切る。 自体は、入力しない。</p> <p>例:</p> <pre>java weblogic.deploy [list deploy undeploy update] password {application} {source}</pre>

表記法	説明
...	<p>コマンドラインで以下のいずれかを示す。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 引数を複数回繰り返すことができる。■ 任意指定の引数が省略されている。■ パラメータや値などの情報を追加入力できる。 <p>... 自体は、入力しない。</p> <p>例:</p> <pre>buildobjclient [-v] [-o name] [-f file-list]... [-l file-list]...</pre>
. . . .	<p>コード サンプルまたは構文で項目が省略されていることを示す。 垂直の省略記号自体は、入力しない。</p>

WebLogic Platform インストール の準備

BEA WebLogic Platform 7.0 は、世界中の何千もの顧客に使用されている BEA WebLogic Server™、BEA WebLogic Portal™、および BEA WebLogic Integration™ を含み、定評のある BEA 製品のアプリケーション インフラストラクチャで構成されています。WebLogic Server には、今回、エンタープライズ クラスの Web サービスを構築するための新しいビジュアル開発環境である BEA WebLogic Workshop™ が組み込まれました。BEA WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) では、Windows プラットフォームと Linux プラットフォームに BEA WebLogic JRockit™ SDK がバンドルされています。サーバ側のアプリケーション用に開発および最適化された WebLogic JRockit SDK は、Intel アーキテクチャをサポートしています。これらのテクノロジーを結合することで、アプリケーションの開発、デプロイ、および管理のための、単一で統一された、使いやすいインフラストラクチャプラットフォームを提供します。

次の節では、BEA WebLogic Platform ソフトウェアをインストールする前に理解する必要がある情報について説明します。

- BEA WebLogic Platform のインストールの概要
- WebLogic Platform ソフトウェア コンポーネント
- WebLogic Platform の配布方法
- BEA WebLogic JRockit 7.0 (Service Pack 2) の概要
- インストールの要件
- インストールの種類選択
- WebLogic Platform インストールのためのディレクトリ選択

- アップグレード情報および移行情報の掲示場所
- Smart Update の概要

BEA WebLogic Platform のインストールの概要

BEA WebLogic Platform は、BEA Installation and Distribution System を使用して配布およびインストールされます。BEA Installation and Distribution System は、以下を行うための完全なフレームワークを提供します。

- ネット インストーラを使用して BEA Web サイトからダウンロードするという容易な手順での BEA 製品の配布。
- WebLogic Platform 製品全体、または必要に応じて個別のコンポーネントをインストールおよびアンインストール。
- Smart Update を使用して製品アップグレードを容易に取得およびインストールするためのメカニズム。
- インストールプロセスの最後に起動できる [コンフィグレーション] ウィザードを使用した、WebLogic ドメインの作成機能。[コンフィグレーション] ウィザードを使用した手順については、『コンフィグレーション ウィザードの使い方』で説明されています。WebLogic Platform のインストールプログラムに添付されているドメイン テンプレートの詳細な解説は、『コンフィグレーション ウィザード テンプレート リファレンス』にあります。

WebLogic Express のサポート

WebLogic Platform インストールプログラムは、BEA WebLogic Express™ ソリューションをインストールする場合にも使用できます。BEA WebLogic Express は BEA が提供している初歩的な Web アプリケーション サーバです。WebLogic Express の詳細については、次の URL にある『BEA WebLogic Server 7.0 および WebLogic Express の紹介』を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/intro/index.html>

インストール方法

BEA インストールプログラムでは、BEA WebLogic Platform ソフトウェアをインストールするモードとして以下の 3 つをサポートします。

■ グラフィカル モード

グラフィカル モード インストールは、対話型の GUI を使用して WebLogic Platform をインストールする方法です。Windows システムおよび UNIX システムの両方で実行できます。インストール手順については、第 2 章「グラフィカル モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」を参照してください。

注意： グラフィカル モード インストールを実行するには、ソフトウェアをインストールするマシンに付属しているコンソールが Java ベースの GUI をサポートしている必要があります。Windows システムのコンソールはすべて、Java ベースの GUI をサポートしていますが、一部の UNIX システムのコンソールには、サポートしていないものがあります。グラフィカル表示をサポートできないシステム上で、グラフィカル モードでインストールを試みると、インストールプログラムは自動的にコンソール モード インストールを開始します。

■ コンソール モード

コンソール モード インストールは、対話的なテキストベースの表示で、コマンド ラインを使用して WebLogic Platform をインストールする方法です。Windows システムおよび UNIX システムの両方で使用できます。インストール手順については、第 3 章「コンソール モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」を参照してください。

■ サイレント モード

サイレント モード インストールでは、対話的でない方法で WebLogic Platform をインストールします。インストール オプションを選択するには、XML プロパティ ファイルを使用します。サイレント モード インストールはスクリプトの一部として実行でき、またコマンド ラインからも実行できます。サイレント モード インストールは、インストール コンフィグレーションを一度だけ設定し、その後はそれらのコンフィグレーションを使用して、インストールを多くのマシンに複製する方法です。インストール手順については、第 4 章「サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」を参照してください。

WebLogic Platform ソフトウェア コンポーネント

WebLogic Platform はシステム上にインストール可能な以下のソフトウェアで構成されています。

- WebLogic Server と WebLogic Workshop
- WebLogic Integration
- WebLogic Portal
- WebLogic Platform のサンプルとユーティリティ
- WebLogic Integration の補足製品

詳細の参照先

- WebLogic Platform コンポーネントの機能および能力については、
<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/intro/index.html> にある『*BEA WebLogic Platform の紹介*』を参照。
- WebLogic Platform コンポーネントのライセンスについては、
<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/interm/license.html> にある e-docs Web サイトの「ライセンス」ページを参照。
- WebLogic Platform のオペレーティング システムおよびハードウェアのサポートについては、<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html> にある e-docs Web サイトの『*サポート対象プラットフォーム*』を参照。

WebLogic Server と WebLogic Workshop

WebLogic Server は、e ビジネス アプリケーションをすばやく開発、デプロイ、および管理するための強力な基盤となるアプリケーション サーバです。Web Logic Server には、WebLogic Workshop が装備されています。WebLogic Workshop は、WebLogic Server の能力、信頼性、およびスケーラビリティを自動的に利用できる Web サービスを簡単に構築するための完全なフレームワークを提供します。WebLogic Server コンポーネント全体を選

扱すると、インストールプログラムにより、**WebLogic Server** プログラム ファイル、**WebLogic Workshop** プログラム ファイル、および **WebLogic Server** と **Workshop** のサンプルがインストールされます。

WebLogic Server は次のコンポーネントで構成されています。

- **Server** — このコンポーネントは、コア **Java 2 Enterprise Edition (J2EE)** の機能を持つ **WebLogic Server** プログラム ファイルで構成されています。
- **Workshop** — このコンポーネントは、ビジュアル開発環境および実行時環境などの **WebLogic Workshop** プログラム ファイルで構成されています。

注意： **WebLogic Workshop** のビジュアル開発環境および関連した **JRE** は、**Solaris** システムと **HP-UX** システムではインストールされません。

- **Server Examples** — このコンポーネントは、**WebLogic Server** のサンプル、**Pet Store** サーバおよびサンプル アプリケーション、および **WebLogic Workshop** のサンプルで構成されています。これらのサーバおよびサンプル アプリケーションによって、**WebLogic Server** を使用するさまざまな **J2EE** の機能を例示します。各サンプル アプリケーションを構築、コンフィグレーション、および実行するために、リソースが用意されています。**Workshop** のサンプルでは、**WebLogic Workshop** を使用してエンタープライズ クラスの **Web** を構築する方法が説明されています。**WebLogic Server** および **Workshop** のサンプルをインストールおよび使用するには、サーバをインストールする必要があります。

WebLogic Integration

WebLogic Integration により、**Business Process Management**、**Application Integration**、**B2B Integration**、および **Data Integration** が実行されます。また、設定によっては、電子データ交換 (**Electronic Data Interchange: EDI**) 統合機能を追加できます。**WebLogic Integration** コンポーネント全体を選択した場合は、サーバプログラム ファイル、クライアント設計開発ツール、およびサンプルがインストールされます。

WebLogic Integration は次のコンポーネントで構成されています。

- **Integration サーバ** — このコンポーネントは、**WebLogic Integration** サーバ用のプログラム ファイル、クライアント設計開発ツール、および **BEA WebLogic Adapter for Power.Enterprise! 3.1** で構成されています。

注意： **Integration** サーバをインストールするには、**WebLogic Server** が必要です。

- **Integration Examples** — このコンポーネントは、**WebLogic Integration** の全機能を説明するサンプル ファイルで構成されています。これらのサンプルにより、**WebLogic Integration** がどのように機能しているかを理解し、独自のソリューションを実装する技術について知ることができます。**Integration** サンプルをインストールおよび使用するには、**Integration** サーバをインストールする必要があります。
- **Client** のみ — このコンポーネントは、個別にインストール可能で、**WebLogic Integration Studio** および **Worklist** クライアント、**Data Integration** の **Format Builder**、**Business Process Management** のチュートリアル サンプル、およびサーバで構成されています。クライアントは、スタンドアロン コンポーネントとしてリモート マシンにインストールできます。

EDI 統合

WebLogic Integration のオプションの **EDI 統合機能**は、次のコンポーネントで構成されています。

- **BEA WebLogic Adapter for Power.Enterprise!**、**WebLogic Integration** および **BEA EDI Connect for WebLogic Integration** ソフトウェアの間のブラックボックス ゲートウェイです。このアダプタは、**WebLogic Integration** サーバソフトウェアと共にインストールされます。
- **Power.Enterprise!** とは別売の **BEA EDI Connect for WebLogic Integration**、**Power.Server!**、およびクライアント管理ツールの **Power.Map!** および **Power.Manager!** で構成されるソフトウェア スイーツです。これらの3つのコンポーネントは、**EDI** メッセージ マップを定義し、取引先関係を管理し、**EDI** メッセージの送受信に関する実行時作業を処理するために使用します。**EDI Connect for WebLogic Integration** は **BEA Systems** から別途購入できます。製品の必要条件、インストール方法、およびライセンス情報については、付録 A 「**BEA EDI Connect for WebLogic Integration** のインストール」を参照してください。

WebLogic Portal

WebLogic Portal は、社内でキャンペーン、商取引、パーソナライゼーションの機能を備えたポータルを構築するためのフレームワークを提供します。WebLogic Portal コンポーネント全体を選択した場合は、サーバプログラム ファイル、E-Business Control Center、およびサンプルがインストールされます。WebLogic Portal は次のコンポーネントで構成されています。

- **Portal Server** — このコンポーネントで、ポータル、キャンペーン、商取引、およびパーソナライゼーションのサービス機能のためのプログラム ファイルがインストールされます。
注意： Portal サーバをインストールするには、WebLogic Server が必要です。
- **Portal Examples** — このコンポーネントは、WebLogic Portal の全機能を説明するサンプルファイルで構成されています。これらのサンプルで、WebLogic Portal が機能する方法を理解でき、独自のソリューションを実装する技術が例示されます。Portal サンプルをインストールおよび使用するには、Portal サーバをインストールする必要があります。
- **EBCC** — E-Business Control Center (EBCC) は、WebLogic Portal のすべてのコンポーネントで使用されるクライアント ツールです。EBCC は、リモートマシンにスタンドアロン コンポーネントとしてインストールできます。また、プラットフォームが両方をサポートしている場合は、サーバ ソフトウェアと同じマシンにインストールできます。E-Business Control Center をスタンドアロン コンポーネントとしてインストールする場合は、サーバがインストールされているマシンにアクセスできる必要があります。

WebLogic Platform のサンプルとユーティリティ

Platform のサンプルおよびユーティリティは、WebLogic Platform のすべてのコンポーネントで利用できます。これらのコンポーネントには、WebLogic Platform コンポーネントの完全インストールが必要です。次のサンプルおよびユーティリティが使用できます。

- **QuickStart** — QuickStart アプリケーションは、WebLogic Platform を初めて評価、学習、および使用するユーザのためのガイドです。
- **Platform ツアー** — 完全に統合されたサンプルアプリケーションを起動するツアーで、WebLogic Platform の主な機能が説明されます。

WebLogic Integration の補足製品

Contivo Analyst は、直感的にわかりやすいグラフィカルツールです。このツールを使用して、ビジネスアナリストは、データ変換マップを視覚的にドキュメント化し、カスタマイズできます。マップが完成すると、**Contivo Analyst** ソフトウェアによってファイルが生成され、これが後で実行時環境でデータ変換のために使用されます。**WebLogic Integration** 内で XML から XML への変換を行うために、**Contivo Analyst** では XLSX スタイルシートマップが生成されます。これは、**WebLogic Platform** の製品 CD-ROM で配布されており、**BEA Web** サイトからダウンロードできます。

Contivo Analyst (Windows 版でのみサポート) は、**WebLogic Platform** ソフトウェアと共にインストールされません。これは、個別にインストールする必要があります。インストール方法、リリースノート、およびユーザードキュメントはインストールファイルの一部であり、インストールプログラムの実行中に抽出されます。

注意： **Contivo Analyst** ソフトウェアは、**WebLogic Integration** リポジトリと共に動作するために、コンフィグレーションする必要があります。**WebLogic Server 7.0** および **WebLogic Integration 7.0** をインストールした後で **Contivo Analyst** をインストールした場合は、**Contivo** のインストールプログラムによって **BEA** ホームディレクトリが検出され、**BEA** ソフトウェアの最新バージョンがあるディレクトリの選択が求められます。その後、**WebLogic Integration** リポジトリが正しくコンフィグレーションされます。

しかし、**WebLogic Server** および **WebLogic Integration** をインストールする前に **Contivo Analyst** をシステムにインストールした場合は、**Contivo Analyst** ソフトウェアをリポジトリと統合する必要があります。この方法は、『*Contivo-BEA Release Notes*』の「インストール」の節に記載されており、次の方法で [スタート]メニューからアクセスできます。[スタート | プログラム | **Contivo Analyst** | **Release Notes**] を起動します。

WebLogic Platform の配布方法

WebLogic Platform は、**BEA Web** サイトおよび CD-ROM の両方で配布されています。

WebLogic Platform の Web 配布

WebLogic Platform 7.0 ソフトウェアは、次の BEA Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html>

次の 2 種類の方法でダウンロードできます。

- ネット インストーラ — この方法 (推奨) では、約 20MB のセットアップ ファイルがダウンロードされます。

インストール処理中に、システムにインストールするコンポーネントを選択するよう求められます。ネット インストーラを使用する場合は、システムにインストールするために選択したコンポーネントだけがダウンロードされます。ダウンロードを開始する前に、次の情報の入力が求められます。

- ストレージ ディレクトリ — インストールするように選択した、各コンポーネントのアーカイブ ファイルがダウンロードされます。これらのアーカイブ ファイルのダウンロード先ディレクトリを指定する必要があります。これらのファイルには、システム上の任意の場所を選択できます。インストール セットアップ ファイルやインストールしたソフトウェアと同じ場所に配置する必要はありません。ディスクスペースを節約するために、インストール完了後に、ダウンロードしたファイルをシステムから削除するように指定することもできます。
- HTTP プロキシ — HTTP プロキシを使用してこれらのファイルをダウンロードする場合は、プロキシサーバのホスト アドレスおよびポート番号を指定する必要があります。

ネット インストーラでは、ダウンロードが中断した場合の再開処理を標準でサポートしています。手動の動作、または不慮のネットワーク サービス停止などのなんらかの理由のために、ダウンロードが中断した場合は、中断したところからダウンロードを再開できます。ダウンロードが完了したときは、システムにダウンロードされたアーカイブ ファイルの整合性がチェックされ、ファイルが正しくダウンロードされたことが検証されます。

- パッケージ インストーラ — この方法では、WebLogic Platform の全ソフトウェア コンポーネントがあるインストール プログラムのスタンドアロン バージョン (約 275MB) がダウンロードされます。

注意： サイレント モード インストールを使用してソフトウェアをインストールする場合は、パッケージ インストーラをダウンロードする必要があります。サイレント モード インストールは、ネット インストーラではサポートされていません。

WebLogic Platform の CD-ROM 配布

販売代理店から WebLogic Platform をお買い求めになった場合は、WebLogic Platform の製品パッケージに以下のものが入っています。

- CD-ROM 5 枚。
 - ディスク 1 は、Sun Java 2 SDK が付属した Windows 版および Solaris 版の BEA WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) 製品ソフトウェア。
 - ディスク 2 は、WebLogic JRockit Java 2 SDK が付属した Windows 版および Red Hat Linux Advanced Server 2.1 版の BEA WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) 製品ソフトウェア。
 - ディスク 3 は、Sun Java 2 SDK が付属した Red Hat Linux 7.2 版の BEA WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) 製品ソフトウェア。
 - ディスク 4 は、HP-UX 版および AIX 版の WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) 製品ソフトウェア。
 - ディスク 5 は、BEA WebLogic Platform オンラインドキュメント。
- 次の印刷物があります。
 - 『BEA WebLogic Platform のインストール』(このガイド)
 - 『BEA WebLogic Platform の紹介』
 - 『BEA Software License and Limited Warranty』(パンフレット)
 - 『Customer Support Quick Reference and Other Important Information』(カード)
 - オンラインの「リリースノート」への URL ポインタが記載された用紙

製品を購入したときは、ほとんどの場合、ライセンスカードは電子メールの添付ファイルとして送付されます。入力ライセンスファイルは、他の名前になることがあります。ほとんどのライセンスファイルの名前は、BEA 販売注文記録 (sales order record: **SOR**) で始まります。ソフトウェアを CD-ROM からインストールしたときは、評価ライセンスがインストールされます。この評価ライセンスは、第 5 章「WebLogic Platform ライセンスファイルのインストールおよび更新」で解説されているように、電子メールで受信したライセンスを使って更新できます。

サービス パックとローリング パッチの Web 配布

WebLogic Platform 7.0 の最新の配布にサービス パックとローリング パッチが組み込まれている場合は、1-9 ページの「WebLogic Platform の Web 配布」の説明に従ってこれらをダウンロードできます。WebLogic Platform 7.0 をインストールしていない場合は、この配布をインストールする必要があります。

サービス パックなしで WebLogic Platform 7.0 をすでにインストールしてあり、BEA eSupport アカウントを持っている場合は、次の方法のいずれかでソフトウェアをアップグレードできます。

- **Smart Update 機能 (推奨)** を使用して、ソフトウェア アップデートを BEA Web サイトから取得してインストールする。Smart Update で取得できるのは、対象の BEA ホーム ディレクトリに現在インストールされているコンポーネント用のアップデートだけです。
- **Service Pack Upgrade** を <http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html> にある Evaluation Center からダウンロードする。ただし、WebLogic Platform 配布全体はダウンロードしません。

WebLogic Platform のサービス パックとローリング パッチのインストール方法の詳細については、第 7 章「サービス パックとローリング パッチのインストール」を参照してください。

BEA eSupport アカウントを持っていない場合は、次の URL にアクセスして取得します。

<http://support.bea.com>

BEA WebLogic JRockit 7.0 (Service Pack 2) の概要

サーバ側のアプリケーション用に開発および最適化された BEA WebLogic JRockit™ SDK では、Intel アーキテクチャをサポートしています。BEA WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) では、WebLogic JRockit 7.0 (Service Pack 2) SDK は WebLogic Platform ソフトウェアのパッケージに含まれています。

注意： WebLogic JRockit 7.0 は、Java 2 Platform, Standard Edition (J2SE) バージョン 1.3.1 で認証されています。

WebLogic Platform および JRockit のソフトウェア パッケージは、<http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html> からダウンロードできます。また、BEA WebLogic Platform 製品パッケージの CD-ROM にも収録されています。

WebLogic Platform または JRockit のパッケージをインストールするには、次の章で説明されているインストール手順を使用できます。

- 第 2 章「グラフィカル モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」
- 第 3 章「コンソール モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」
- 第 4 章「サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」

注意： WebLogic JRockit SDK が付属した WebLogic Platform パッケージには、ネット インストーラは使用できません。

WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) または JRockit のパッケージをインストールすると、サーバ側アプリケーション用に最適化された WebLogic JRockit JVM とクライアント側アプリケーションで任意に使用できる Sun Hotspot Client JVM という 2 種類の JVM がシステムにインストールされます。WebLogic Platform に用意されているサンプルには、クライアント側 GUI や、Sun Hotspot Client JVM などのクライアント指向の JVM を利用するその他のアプリケーションを多用するものがあります。WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) では、commEnv という便利なスクリプトがインストールされています。このスクリプトは、クライアント JVM またはサーバ JVM のどちらを実行するのか決定する環境変数を定義します。詳細については、<http://e-docs.bea.com/platform/docs70/relnotes/relnotes.html> にある『*BEA WebLogic Platform リリース ノート*』の「WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) の JVM オプションを指定する」を参照してください。

Sun Java 2 SDK が付属した WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) をインストールし、WebLogic JRockit 7.0 (Service Pack 2) SDK を使用するようにそのインストールを変更する場合の手順については、『*BEA WebLogic Platform リリース ノート*』の「WebLogic JRockit SDK を使用するように WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) を変更する」を参照してください。

WebLogic JRockit の詳細については、

<http://e-docs.bea.com/wljrookit/docs70/index.html> にある JRockit のドキュメントを参照してください。

注意：『BEA WebLogic JRockit™ 7.0 SDK Installation and Migration Guide』のインストール手順では、JRockit をスタンドアロン SDK としてインストールする方法を説明しています。この手順は、WebLogic Platform および JRockit のパッケージには適用できません。

インストールの要件

次の節では、WebLogic Platform インストールのインストール要件を説明します。

- システム要件
- 一時ディスク スペースの要件
- Administrator 特権
- ライセンスおよび暗号

システム要件

表 1-1 に WebLogic Platform のシステム要件を示します。

表 1-1 システム要件

コンポーネント	要件
サポート対象プラットフォーム	BEA WebLogic Platform でサポートしているプラットフォームのコンフィグレーション。次の URL の『サポート対象プラットフォーム』ページを参照。 http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html このページでは、推奨される Java 実行時環境などの要件も解説している。

表 1-1 システム要件

コンポーネント	要件
ハード ディスク ドライブ	<p>WebLogic Platform をすべてインストールするには、約 525MB のディスクスペースが必要である。この中には、JDK のための 35MB、およびサンプルのための 142MB が含まれている。個別のコンポーネントのためのディスクドライブ要件のリストについては、次の URL にある『サポート対象プラットフォームフォーム』ページを参照。</p> <p>http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html</p>
メモリ	<p>WebLogic Platform のフル インストール — 512MB の RAM。1GB を推奨。</p> <p>WebLogic Server — 最低 256MB の RAM。512MB 以上を推奨。</p> <p>WebLogic Integration — 512MB の RAM。1GB を推奨。</p> <p>WebLogic Portal — 512MB の RAM。1GB を推奨。</p>
カラー ビット深度 ディスプレイおよび サイズ	<p>グラフィカルユーザ インタフェース (graphical user interface: GUI) モードのインストールでは、8 ビット色深度 (256 色)。</p> <p>コンソール モードおよびサイレント モードのインストールでは、カラービット深度の要件はない。</p>
Java 2 SDK	<p>WebLogic Platform インストールプログラムの実行には、Java 実行時環境 (Java run-time environment: JRE) が必要である。JRE を備えた Java 2 Software Development Kit (SDK) は、Windows インストールプログラムおよび一部の UNIX インストールプログラム (ファイル名の末尾が .bin のもの) にバンドルされている。その他の UNIX プラットフォームの WebLogic Platform インストールプログラムには、Java 2 SDK はバンドルされていない。これらのインストールプログラムのファイル名の末尾は、.jar である。.jar インストールプログラムを実行するには、適切なバージョンの Java 2 SDK がシステムにインストールされており、PATH 変数の前に SDK の bin ディレクトリが指定されている必要がある。インストールプロセスにより、JAVA_HOME および関連する変数がこのディレクトリを指すように設定されるため、SDK を使用することが重要である。プロシージャについては、次のいずれかを参照。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 2-6 ページの「.jar インストール ファイルのためのグラフィカルモード インストールの開始」 ■ 3-6 ページの「.jar インストール ファイルのためのコンソールモード インストールの開始」

一時ディスクスペースの要件

BEA インストールプログラムでは、一時ディレクトリを使用して、**WebLogic Platform** を対象のシステムにインストールするために必要なファイルを抽出します。インストール処理の中で、インストールプログラムにバンドルされている圧縮状態の **Java** 実行時環境 (**Java run-time environment: JRE**)、および一時ディレクトリに展開される無圧縮の **JRE** が入る十分なスペースがあることが、一時ディレクトリには必要です。展開されたファイルは、インストール処理の最後に一時ディレクトリから削除されます。一般的に、インストールプログラムには、インストールされたファイルが必要とする量の 2.5 倍の一時スペースが必要です。

デフォルトでは、インストールプログラムは次の一時ディレクトリを使用します。

- **Windows** プラットフォーム — **TMP** システム変数で参照されるディレクトリ
- **UNIX** プラットフォーム — システム依存の一時ディレクトリ

注意： インストールプログラムを実行するための十分な一時スペースがない場合は、別のディレクトリを指定するかインストールプログラムを終了するよう求められます。

十分な一時スペースを確保するために、インストール用の一時ディレクトリとして別のディレクトリの割り当てが必要になる場合があります。その場合は、次の表に記載されている指示を参照してください。

プラットフォーム	手順
Windows	<p>次のいずれかを実行する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 選択したディレクトリに TMP システム変数を設定する。 ■ コマンド ラインからインストールプログラムを起動する場合は、コマンド ラインに <code>-Djava.io.tmpdir=tmpdirpath</code> オプションを入力する。このオプションでは、<code>tmpdirpath</code> は、WebLogic Platform インストールプログラムが使用するファイルを一時的に保存するためのディレクトリの絶対パスである。 例： <pre>net_platformXXX_win32.exe -mode=console -Djava.io.tmpdir=d:\Temp</pre> この例では、ファイル名の <code>xxx</code> は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号である。

プラットフォーム	手順
UNIX	<p>インストールプログラムを起動するときに、次のオプションをコマンド ラインに入力する。</p> <pre>-Djava.io.tmpdir=tmpdirpath</pre> <p>ここで、<i>tmpdirpath</i> は、WebLogic Platform インストールプログラムが使用するファイルを一時的に保存するためのディレクトリの絶対パスである。</p>

Administrator 特権

ユーザドメインを作成するために、カスタム インストールの終了時に [コンフィグレーション] ウィザードを実行した場合は、サーバを Windows サービスとしてインストールするかどうかを指定するよう求められます (WLS Domain テンプレートなどの一部のテンプレートの場合)。サーバを Windows サービスとしてインストールした場合は、Windows システムを起動するたびに自動的に起動されます。サーバを Windows サービスとしてインストールするには、*Administrator* 特権を持っている必要があります。

詳細については、次の URL にある『*BEA WebLogic Server 管理者ガイド*』の「WebLogic Server の起動と停止」「WebLogic Server の Windows サービスとしての設定」を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/adminguide/startstop.html#SettingUpServerAsWindowsService>

ライセンスおよび暗号

WebLogic Platform ソフトウェアは、有効なライセンスなしでは使用できません。

WebLogic Platform をインストールすると、最大 20 のクライアントが接続可能な評価ライセンスがインストールされます。評価ライセンスは完全なライセンスであり、WebLogic Platform のすべてのコンポーネント機能が使用可能になります。

ライセンスは、WebLogic Platform 製品全体に対して購入することも、個別のコンポーネントに対して購入することもできます。WebLogic Platform で購入可能なライセンスについては、次の URL の e-docs Web サイトにある「ライセンス」ページを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/interm/license.html>

WebLogic Platform コンポーネントの 7.0 以前のバージョン用のライセンスは、WebLogic Platform 7.0 では機能しません。このライセンスは、7.0 license.bea フォーマットにアップグレードする必要があります。ライセンス ファイルをアップグレードするプロシージャ、および永続的なライセンスをインストールするプロシージャについては、第 5 章「WebLogic Platform ライセンス ファイルのインストールおよび更新」で説明されています。

128 ビット 暗号の概要

セキュア ソケット レイヤ (secure sockets layer: SSL) 暗号化ソフトウェアは、56 ビットおよび 128 ビットの両方のレベルで使用可能です。SSL の 128 ビット クライアント バージョンのライセンスは、アメリカ合衆国およびカナダで使用可能です。適切な認証があれば、アメリカ合衆国およびカナダ以外でも 128 ビット暗号で有効なライセンスを取得できます。

WebLogic Platform ライセンスは、デフォルトで 56 ビット暗号が使用可能になっています。SSL で 128 ビット暗号を使用可能にするには、WebLogic Platform ソフトウェアをインストールする前に、インストール先となる BEA ホーム ディレクトリに 128 ビット暗号のライセンス ファイル license.bea が存在する必要があります。

128 ビット暗号のライセンスをインストールする方法については、5-4 ページの「128 ビット暗号の有効化」を参照してください。

インストールの種類選択

WebLogic Platform のインストールプログラムでは、次の 2 種類のインストールができます。

■ 標準インストール

標準インストールでは、サンプルファイルを含めて、WebLogic Platform で用意されているすべてのソフトウェア コンポーネントがインストールされます。WebLogic Platform で用意されているソフトウェア コンポーネントの説明については、1-4 ページの「WebLogic Platform ソフトウェア コンポーネント」を参照してください。すべてのコンポーネントのためのサンプルドメインは、WebLogic Platform ツアーも含めて、PointBase データベースで使用できるようにコンフィグレーション済みであり、インストールが完了したら、すぐにサンプルを実行できます。

初めて使用するユーザが WebLogic Platform を評価、理解、および使用するとき役立つように、標準インストールまたは完全なカスタム インストールの終了時に

WebLogic Platform QuickStart アプリケーションが表示されます。QuickStart からは WebLogic Platform ツアーなどのサンプル、特定の開発タスクを実行するために有用なツール、およびオンラインドキュメントにすばやくアクセスできます。

注意： QuickStart アプリケーションは、グラフィカルモード インストールを使用してソフトウェアをインストールしたときにだけ、起動されます。コンソールモード インストール、またはサイレントモード インストールでは呼び出されません。

[コンフィグレーション] ウィザードは、標準インストールでは呼び出されません。

■ カスタム インストール

カスタム インストールでは、インストールするコンポーネントを細かく選択できます。上級ユーザには、このオプションをお勧めします。選択したファイルをインストールした後で、BEA WebLogic Platform の [コンフィグレーション] ウィザードを実行するオプションが表示されます。[コンフィグレーション] ウィザードでは、インストール先環境用にドメインを作成するコンフィグレーション済みのドメイン テンプレートを使用して、WebLogic ドメインをコンフィグレーションできます。[コンフィグレーション] ウィザードで使用できるテンプレートは、システムにインストールするコンポーネントに基づきます。PointBase データベースを使うようコンフィグレーションされたサンプルドメインは、インストールしたコンポーネント専用で作成されます。WebLogic Platform QuickStart を使用するには、すべてのコンポーネントをインストールする必要があります。

注意： このオプションを使用すると、クライアント ソフトウェア (E-Business Control Center および WebLogic Integration クライアント) を、スタンドアロン コンポーネントとしてインストールできます。

WebLogic Platform インストールのための ディレクトリ選択

WebLogic Platform のインストールでは、以下のディレクトリの位置を指定する必要があります。

- BEA ホーム ディレクトリ
- 製品インストール ディレクトリ
- ユーザ ドメイン ([コンフィグレーション] ウィザードを実行する場合)

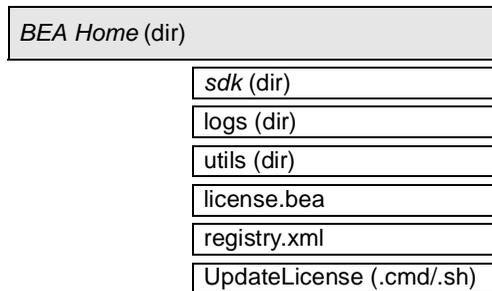
BEA ホーム ディレクトリの選択

WebLogic Platform をインストールするときは、BEA ホーム ディレクトリを指定するよう求められます。BEA ホーム ディレクトリは、同じマシンにインストールされた複数の BEA 製品が使用する共通ファイルのリポジトリです。したがって、BEA ホーム ディレクトリは、システムにインストールされた BEA 製品の *中央サポート ディレクトリ* と見なすことができます。

BEA ホーム ディレクトリの中のファイルは、BEA ソフトウェアがシステム上で正しく動作するために不可欠です。これらのファイルは、次の種類の機能を実行します。

- インストールした BEA 製品にライセンスを正しく機能させる
- インストール中に製品間の依存関係チェックを行う
- Service Pack のインストールを行う

バンドルされている SDK をインストールする WebLogic Platform インストールプログラムによって作成された、サンプルの BEA ホーム ディレクトリの構造を以下に示します。



この図には、BEA ホーム ディレクトリで必須のファイルおよびディレクトリのみを示します。デフォルトの製品インストールディレクトリを選択した場合は、BEA ホーム ディレクトリの中に `weblogic700` および `user_projects` などのディレクトリが追加されます。製品インストールディレクトリのデフォルトの場所は、BEA ホーム ディレクトリの中ですが、BEA ホーム ディレクトリ以外の別の場所も選択できます。

注意：一部の UNIX プラットフォームの WebLogic Platform のインストールプログラムでは、SDK をインストールしません。

WebLogic Platform のインストールでは、既存の BEA ホーム ディレクトリを選択するか、新規の BEA ホーム ディレクトリを作成するパスを指定するよう求められます。新規ディレクトリを作成する場合は、WebLogic Platform インストールプログラムによりディレクトリが自動的に作成されます。

注意： BEA ホーム ディレクトリでは、BEA ホーム ディレクトリ規約を使用する BEA 製品のそれぞれのバージョンについて、1 つのインスタンスだけをインストールできます。たとえば、BEA ホーム ディレクトリにインストールできる WebLogic Server 7.0 は 1 つのみですが、BEA ホーム ディレクトリには、WebLogic Server 6.1 のインスタンスも 1 つインストールできます。

BEA ホーム ディレクトリの機能について

表 1-2 で、BEA ホーム ディレクトリにあるファイルおよびディレクトリについて説明します。

表 1-2 BEA ホーム ディレクトリの説明

コンポーネント	説明
<i>sdk</i> ディレクトリ	<p>WebLogic Platform と共にインストールされた Java 2 SDK 用のソフトウェアが格納される。SDK には、Java 実行時環境 (Java run-time environment: JRE) および Java アプリケーションをコンパイルおよびデバッグする ツールが用意されている。次のオプションがある。</p> <ul style="list-style-type: none">■ <code>jdk131_XX</code> — Sun Java 2 SDK のバージョン 1.3.1。このディレクトリ名の <code>XX</code> は、システムにインストールされている Sun SDK のバージョンを示す (<code>jdk131_06</code> など)。■ <code>jrocketXXX</code> — WebLogic JRockit SDK。このディレクトリ名の <code>XXX</code> は、システムにインストールされている JRockit SDK のバージョンを示す (<code>jrocket70sp2_131</code> など)。 <p>注意： SDK オプションは、ハードウェアプラットフォームによって異なります。一部の UNIX プラットフォームでは、WebLogic Platform インストールプログラムは SDK をインストールしません。</p>

表 1-2 BEA ホーム ディレクトリの説明

コンポーネント	説明
logs ディレクトリ	BEA ホーム ディレクトリのインストールおよびアンインストールを記録する履歴ファイルが格納されている。
utils ディレクトリ	BEA WebLogic Platform の全製品のインストールをサポートするユーティリティが格納されている。 utils.jar ファイルには、UpdateLicense ユーティリティをサポートするコードが格納されている。
license.bea ファイル	システムにインストールされた BEA WebLogic の全製品のライセンス キーがある XML フォーマットのライセンス ファイル。 このライセンスのフォーマットは、WebLogic Platform 7.0 で変更されている。7.0 以前の license.bea ファイルを WebLogic Platform 7.0 の license.bea ファイルに変換する方法については、5-6 ページの「WebLogic Platform 製品の 7.0 リリース以前のライセンスのアップグレード」の手順を参照。無期限 (永続) ライセンスを追加する、または機能を追加するためにライセンス ファイルを更新するには、UpdateLicense ユーティリティを使用して license.bea ファイルを更新する必要がある。詳細については、5-2 ページの「license.bea ファイルの更新」を参照。
	注意： このファイルは直接編集しないでください。直接編集した場合は、インストールされている BEA 製品の動作に問題が発生することがあります。

表 1-2 BEA ホーム ディレクトリの説明

コンポーネント	説明
registry.xml ファイル	対象のシステムにインストールされているすべての BEA 製品に関する永続的な記録が入ったレジストリ ファイル。このレジストリには、バージョン番号、サービスパック番号、およびインストールディレクトリなどの製品に関する情報が格納されている。 注意： このファイルは直接編集しないでください。直接編集した場合は、インストールされている BEA 製品の動作に問題が発生することがあります。また、将来 BEA 製品、またはメンテナンスアップグレードをインストールするときに、インストールに関する問題が起こることがあります。
UpdateLicense (.cmd/.sh)	新規のライセンス セクションを使用して、現在の license.bea ファイルを更新するコマンド ファイル (Windows NT/2000)、またはシェル スクリプト (UNIX)。結果は、既存のライセンス セクションと新規のライセンス セクションの両方があるマージされたライセンスになる。UpdateLicense ユーティリティの使用の詳細については、5-2 ページの「license.bea ファイルの更新」を参照。

複数の BEA ホーム ディレクトリの作成

BEA ホーム ディレクトリを複数作成することはできますが、できる限り避けてください。ほとんどの場合、BEA ホーム ディレクトリは 1 つで充分です。しかし、状況によっては、開発環境と製品環境を分けておくために、それぞれに製品スタックを入れたほうがよい場合もあります。ディレクトリを 2 つ作成しておけば、生産環境を変更する準備が整うまで、それを変更することなしに開発環境を (BEA ホーム ディレクトリ内で) 更新しても、準備が整うまで製品環境を変更せずに済みます。

製品インストール ディレクトリの選択

製品インストール ディレクトリには、プログラム ファイルおよびサンプルを含めて、システムにインストールすることを選択したすべてのソフトウェア コンポーネントがあります。**WebLogic Platform** の最初のインストールでは、製品インストール ディレクトリを選択することを求められます。デフォルトを選択した場合は、**WebLogic Platform** ソフトウェアが次のディレクトリにインストールされます。

```
C:\bea\weblogic700
```

ここで `C:\bea` は **BEA** ホーム ディレクトリであり、`weblogic700` は製品インストール ディレクトリです。ただし、製品インストール ディレクトリには、任意の名前とシステム内の任意の場所を指定できます。つまり、ディレクトリを `weblogic700` としたり、**BEA** ホーム ディレクトリの下に作成する必要はありません。

インストールプログラムでは、製品インストール ディレクトリを `WL_HOME` ディレクトリとして使用し、ソフトウェア コンポーネントをこのディレクトリの下にインストールします。最初のインストールで、製品の全コンポーネントではなく、**WebLogic Platform** の個別のコンポーネントをインストールすることを選択し、その後、(同じ **BEA** ホーム ディレクトリを使用して) 追加コンポーネントをインストールする場合は、後のインストールでは、製品インストール ディレクトリの指定は求められません。インストールプログラムによって、`WL_HOME` ディレクトリが検出され、同じディレクトリの下に追加コンポーネントがインストールされます。

WebLogic Platform のディレクトリ構造の説明は、6-8 ページの「**WebLogic Platform** 製品ディレクトリ構造について」にあります。

ユーザドメイン ディレクトリの選択

WebLogic Platform コンポーネント製品の以前のリリースでは、各ドメインのアプリケーション コードを含めて、製品インストールのディレクトリ構造の中にドメインが作成されていました。**WebLogic Platform 7.0** に付属している [コンフィギュレーション] ウィザードを使用すると、ドメイン コンテナフォルダ (デフォルトでは、`user_projects`) の中の専用のディレクトリ構造の中にドメインを作成できるので、ウィザードの使用をお勧めします。ドメイン コンテナを作成すると、すべてのユーザドメイン ディレクトリを保存でき、また各ドメインを専用のドメイン コンテナの中に作成できます。ドメイン コンテナの作成位置は自由です。

この新しいディレクトリ構造によって、アプリケーション コードを保存し、サーバ システムをコンフィグレーションするときの柔軟性がさらに大きくなりました。また、アプリケーション 開発でのよりよい作業実践にもつながります。つまり、アプリケーション コードは製品ソフトウェアと共に保存するべきではありません。

注意： [コンフィグレーション] ウィザードを使用して作成したディレクトリは、ソフトウェアをアンインストールしたときに削除されず、その後のインストールでも上書きされません。これらのディレクトリを削除する場合は、手作業で削除する必要があります。

ドメイン作成の全詳細は、『*コンフィグレーションウィザードの使い方*』で説明されています。

アップグレード情報および移行情報の揭示場所

WebLogic Platform インストールを最新のサービスパックを使用してアップグレードする詳細については、第 7 章「サービス パックとローリング パッチのインストール」を参照してください。

注意： Smart Update およびアップグレード インストーラにより、Sun Java 2 SDK がシステムにインストールされます。WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) をインストールした後で、WebLogic JRockit 7.0 (Service Pack 1) SDK を使用するようにインストールを変更した場合は、インストールをアップグレードするのに Smart Update やアップグレード インストーラを使用しないでください。この場合は、プラットフォームに WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) および JRockit のパッケージ全体をインストールする必要があります。JRockit と共に動作するカスタムの Service Pack 1 ドメインを作成した場合は、このドメインを Service Pack 2 に移行する必要があります。ドメインの移行手順については、<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/relnotes/relnotes.html#migration>にある『*BEA WebLogic Platform リリース ノート*』の「コンフィグレーション ウィザードを使用して作成されたドメインを移行する」を参照してください。

WebLogic Platform コンポーネントのアップグレード情報および移行情報は、次の URL で入手できます。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/interm/migrate.html>

Smart Update の概要

WebLogic Platform 7.0 には Smart Update 機能があり、サービス パック、ローリング パッチ、および今後のソフトウェア リリースで、ソフトウェアをすばやく簡単にアップグレードできます。

Windows の [スタート] メニューまたはコマンド ラインのいずれかから、Smart Update を起動したときは、インストールされている製品 (現在の BEA ホーム ディレクトリに関連付けられている) のバージョン番号がチェックされます。そして、BEA Web サイトにアクセスして取得できるアップデートがチェックされます。Smart Update の使用方法の詳細については、第 7 章「サービス パックとローリング パッチのインストール」を参照してください。

Smart Update を使用すると、システム インストールを以前のリリース バージョンに戻すこともできます。詳細については、7-16 ページの「Smart Update を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストール」を参照してください。

グラフィカルモード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

以下の節では、Windows システムと UNIX システムの両方で、グラフィカル ユーザ インタフェース (グラフィカル) モード インストールを使用して WebLogic Platform をインストールする方法を説明します。

- 作業開始前の注意
- Windows プラットフォームでのグラフィカルモードのインストールプログラムの起動
- UNIX プラットフォームでのグラフィカルモードのインストールプログラムの起動
- インストールプログラムの実行
- コンフィグレーション ウィザードの使い方
- 次に行う作業

作業開始前の注意

WebLogic Platform インストールを開始する前に、次のことを確認してください。

- 製品のインストール先がサポートされているプラットフォームであることを確認する。サポートされているプラットフォームの詳細なリストは、次の URL にあります。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html>

- 第 1 章「WebLogic Platform インストールの準備」の全体、特に次の節を参照する。

グラフィカル モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

- 1-13 ページの「インストールの要件」
 - 1-17 ページの「インストールの種類選択」
 - 1-18 ページの「WebLogic Platform インストールのためのディレクトリ選択」
- WebLogic Platform コンポーネントを、同じコンポーネントの以前にインストールされているバージョンの上にインストールすることはできない。しかし、既存のインストールにコンポーネントを追加することはできます。たとえば、1回のインストールで WebLogic Server をインストールして、別のインストールで WebLogic Integration または WebLogic Portal をインストールできます。しかし、1つの製品コンポーネントの同じバージョンを再インストールするには、第 8 章「WebLogic Platform のアンインストール」で説明されているように、そのコンポーネントをアンインストールするか、他のロケーションにインストールする必要があります。

WebLogic Platform の既存のインストールにコンポーネントを追加する場合は、インストールを開始する前に実行中のサーバをシャットダウンする必要があります。

- BEA 製品ディレクトリ (/bea/weblogic700 など) にインストールされているすべての WebLogic Platform コンポーネントが、同じバージョン レベルである。このディレクトリにすでにインストールされているコンポーネントよりも新しいバージョンのコンポーネントを追加でインストールする場合は、インストールを続行する前に、既存のコンポーネントをアップグレードするように求められます。たとえば、WebLogic Server と WebLogic Integration 7.0 (Service Pack 1) をインストールした後で WebLogic Portal 7.0 (Service Pack 2) をインストールする場合は、WebLogic Portal をインストールする前に、その他のコンポーネントを Service Pack 2 にアップグレードする必要があります。インストールのアップグレード方法の詳細については、第 7 章「サービスパックとローリング パッチのインストール」を参照してください。

Windows プラットフォームでのグラフィカル モードのインストールプログラムの起動

Windows システムでグラフィカル モードでインストールを開始するには

1. Windows システムにログインします。
2. CD-ROM から WebLogic Platform をインストールする場合は、手順 3 に進みます。
Web ダウンロードからインストールする場合は、次の手順を実行します。

Windows プラットフォームでのグラフィカル モードの インストールプログラムの起動

- a. 1-9 ページの「WebLogic Platform の Web 配布」に従ってソフトウェアをダウンロードします。
- b. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動し、インストールファイルをダブルクリックします。

net_platformXXX_win32.exe (Sun Java 2 SDK が付属したネット インストーラファイルの場合)

platformXXX_win32.exe (Sun Java 2 SDK が付属したパッケージ インストーラの場合)

platformXXX_jrockit_win32.exe (WebLogic JRockit Java 2 SDK が付属したパッケージ インストーラの場合)

これらのファイル名の xxx はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

インストールプログラムによって、WebLogic Platform のインストールが開始されます。

- c. 2-7 ページの「インストールプログラムの実行」に進みます。

3. CD-ROM から WebLogic Platform をインストールする場合

- a. WebLogic Platform CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
- b. インストールプログラムが自動的に起動しない場合は、エクスプローラを開いて、CD-ROM のアイコンをダブルクリックします。
- c. Windows のインストールフォルダに移動し、プラットフォームに応じたインストールファイルをダブルクリックします。

platformXXX_win32.exe (Sun Java 2 SDK が付属したパッケージ インストーラの場合)

platformXXX_jrockit_win32.exe (WebLogic JRockit Java 2 SDK が付属したパッケージ インストーラの場合)

これらのファイル名の xxx はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

インストールプログラムによって、WebLogic Platform のインストールが開始されます。

4. 2-7 ページの「インストールプログラムの実行」に進みます。

UNIX プラットフォームでのグラフィカル モードのインストールプログラムの起動

WebLogic Platform インストールプログラムの実行には、Java 実行時環境 (Java run-time environment: JRE) が必要です。JRE を備えた Java 2 Software Development Kit (SDK) は、Windows インストールプログラムおよび一部の UNIX インストールプログラム (ファイル名の末尾が .bin のもの) にバンドルされています。その他の UNIX プラットフォームの WebLogic Platform インストールプログラムには、Java 2 SDK はバンドルされていません。これらのインストールプログラムのファイル名の末尾は、.jar です。.jar インストールプログラムを実行するには、適切なバージョンの Java 2 SDK がシステムにインストールされており、PATH 変数の前に SDK の bin ディレクトリが指定されている必要があります。インストールプロセスにより、JAVA_HOME および関連する変数がこのディレクトリを指すように設定されるため、SDK を使用することが重要です。

注意： グラフィカルモード インストールを実行するには、コンソールで Java ベースの GUI がサポートされている必要があります。インストールプログラムで Java ベースの GUI がサポートされていないと判断された場合は、自動的にコンソールモードでインストールプログラムが起動されます。詳細については、第 3 章「コンソールモード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール」を参照してください。

.bin インストール ファイルのためのグラフィカル モード インストールの開始

ファイル名の末尾が .bin である UNIX プラットフォーム用のインストールプログラムがある場合は、次の手順を実行してグラフィカルモードでインストールを開始します。

1. 対象の UNIX システムにログインします。
2. コマンドライン シェルを開きます。
3. CD-ROM から WebLogic Platform をインストールする場合は、手順 4 に進みます。
Web ダウンロードからインストールする場合は、次の手順を実行します。

- a. 1-9 ページの「WebLogic Platform の Web 配布」に従ってソフトウェアをダウンロードします。
- b. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力することでインストール プロシージャを呼び出します。

```
chmod a+x filename.bin
```

```
./filename.bin
```

ここで、*filename.bin* は、プラットフォームに適した WebLogic Platform インストールプログラムの名前です。

注意： ネット インストーラのファイル名は、*net_* で始まります。たとえば、*net_platformXXX_solaris.bin* のようになります。ここで、*xxx* はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

インストールプログラムによって、WebLogic Platform のインストールが開始されます。

- c. 2-7 ページの「インストールプログラムの実行」に進みます。

4. CD-ROM から WebLogic Platform をインストールする場合

- a. WebLogic Platform CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
- b. CD-ROM ディレクトリに移動し、プラットフォームに応じたインストールプログラムのフォルダに移動します。
- c. 次のコマンドを入力することで、インストールプロシージャを呼び出します。

```
./filename.bin
```

ここで、*filename.bin* は、プラットフォームに適した WebLogic Platform インストールプログラムの名前です。たとえば、*platformXXX_solaris.bin* のようになります。ここで、*xxx* はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

5. 2-7 ページの「インストールプログラムの実行」に進みます。

.jar インストール ファイルのためのグラフィカル モード インストールの開始

ファイル名の末尾が `.jar` である UNIX プラットフォーム用のインストールプログラムがある場合は、次の手順を実行してグラフィカル モードでインストールを開始します。

1. 対象の UNIX システムにログインします。
2. コマンドライン シェルを開きます。
3. 対象のシステムの `PATH` 変数の最初に、適切な SDK の `bin` ディレクトリを指定する必要があります。

例：

```
PATH=JAVA_HOME/bin:$PATH
export PATH
```

`JAVA_HOME` は、SDK ディレクトリの絶対パスです。

4. 次のいずれかを実行します。
 - 1-9 ページの「WebLogic Platform の Web 配布」に従ってソフトウェアをダウンロードする。
 - CD-ROM からインストールする場合は、WebLogic Platform CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、CD-ROM ディレクトリに移動する。
5. インストールファイルが存在するディレクトリに移動し、次の表の説明に従って、インストールプロシージャを呼び出します。

注意： CD-ROM では、インストールファイルは `weblogic_platformXXX` ディレクトリにあります。ここで、`xxx` はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

条件	入力するコマンド
AIX 以外の UNIX プラットフォームにインストールする場合	<code>java -jar filename.jar</code>
AIX プラットフォームにインストールする場合	<code>java -classpath filename.jar com.bea.installer.BEAInstallController</code>

どちらの場合も、`filename.jar` は、**WebLogic Platform** インストールファイルの名前です。たとえば、`pj_platformXXX_generic.jar` のようになります。ネット インストーラのファイル名は、`net_` で始まります。たとえば、`net_pj_platformXXX_generic.jar` のようになります。これらのファイル名の `XXX` はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

注意： プラットフォームのサポートは、サービス パックのリリースによって変わる場合があります。製品のインストール先がサポートされているプラットフォームであることを確認するには、次の URL にある『サポート対象プラットフォーム』ページを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html>

6. 2-7 ページの「インストールプログラムの実行」に進みます。

インストールプログラムの実行

システムおよびコンフィグレーションに関する特定の情報を入力するように促すプロンプトが表示されます。プロンプトに対応する方法については、次の表を参照してください。

ウィンドウ	実行するアクション
ようこそ	[Next] ボタンをクリックしてインストールを続行する。[Exit] をクリックすると、いつでもインストールをキャンセルできる。
BEA ライセンス契約	BEA ソフトウェア使用許諾契約を読み、[Yes] をクリックして、契約書の条件に同意することを示す。インストールを続行するには、使用許諾契約に同意し、[Next] をクリックする。
BEA ホーム ディレクトリを選択	対象システム上にインストールされたすべての BEA 製品の中央サポート ディレクトリとして機能する BEA ホーム ディレクトリを指定する。システム上にすでに BEA ホーム ディレクトリがすでに存在する場合は、そのディレクトリを選択するか (推奨)、または新規の BEA ホーム ディレクトリを作成する。新規ディレクトリを作成する場合は、WebLogic Platform インストールプログラムによりディレクトリが自動的に作成される。BEA ホーム ディレクトリの詳細については、1-19 ページの「BEA ホーム ディレクトリの選択」を参照。

ウィンドウ	実行するアクション
インストールの種類を選択	<p data-bbox="444 258 1110 282">実行するインストールの種類オプション ボタンを選択する。</p> <ul style="list-style-type: none"><li data-bbox="444 313 1174 496">■ 標準 — 標準インストールでは、サンプルを含む WebLogic Platform に用意されているすべてのソフトウェア コンポーネントがシステムにインストールされる。サンプルドメインは、インストール時に PointBase データベースで使用するためあらかじめコンフィグレーションされ、インストールが終了すると、サンプルを実行できる。<li data-bbox="444 524 1174 678">■ カスタム — カスタム インストールでは、インストールしたいソフトウェア コンポーネントを選択して、必要に応じて、カスタム アプリケーション ドメインを作成できる。このオプションを使用すると、スタンドアロン マシンに Integration Client または E-Business Control Center をインストールできる。 <p data-bbox="444 695 1141 751">インストール タイプの詳細については、1-17 ページの「インストールの種類選択」を参照。</p>

ウィンドウ	実行するアクション
<p>コンポーネントを選択します</p> <p>注意： このウィンドウは、[インストールタイプを選択]ウィンドウで[カスタムインストール]を選択した場合にだけ表示されます。</p>	<p>該当するチェックボックスをチェックするか、またはチェックをはずし、インストールするコンポーネントを選択する。</p> <p>このウィンドウには、インストール可能なコンポーネントすべてがツリー表示される。インストールの最初に、WebLogic Integration Client サブコンポーネントを除くコンポーネントがチェックされる。フォルダレベルでコンポーネントを選択または選択解除したときは、それに従ってすべてのサブコンポーネントが選択または選択解除される。システムにすでにインストールされているコンポーネントのチェックボックスは、灰色のチェックボックスとして表示される。</p> <p>注意： インストールするコンポーネントを選択または選択解除すると、インストールプログラムによりコンポーネント間の依存関係がチェックされ、選択されたコンポーネントのリストが自動的に修正されます。たとえば、WebLogic Server コンポーネントのチェックボックスを選択解除した場合は、WebLogic Integration サーバと WebLogic Portal サーバ、および WebLogic Integration クライアントのチェックボックスも選択解除されます。これらの実行には WebLogic Server が必要だからです。しかし、EBCC サブコンポーネントはインストールできます。これは、EBCC サブコンポーネントがクライアントコンポーネントで、サーバが同じマシンにインストールされている必要がないからです。</p> <p>システムでインストール可能なコンポーネントの詳細については、1-4 ページの「WebLogic Platform ソフトウェア コンポーネント」を参照。</p>

ウィンドウ	実行するアクション
<p>ダウンロード オプションを指定</p> <p>注意: このウィンドウは、ネット インストーラを使用する場合にだけ表示されます。</p>	<p>ソフトウェアのダウンロードのための設定を次のように指定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ストレージ ディレクトリ — ソフトウェア コンポーネントをダウンロードするストレージディレクトリを指定する。インストールするように選択した各コンポーネントのアーカイブファイルがシステムにダウンロードされる。これらのファイルには、システム上の任意の場所を選択できる。インストールセット アップ ファイルやインストールしたソフトウェアと同じ場所に配置する必要はない。 ■ インストール後にダウンロードしたファイルを削除 — インストールの完了後、ダウンロードしたファイルをインストールプログラムによって削除する場合は、このチェックボックスを選択する。このチェックボックスを選択しない場合は、ダウンロードしたファイルが指定したディレクトリに保存される。 ■ HTTP プロキシを使用 — ダウンロードで HTTP プロキシ サーバを使用する場合は、このチェックボックスを選択する。HTTP プロキシ サーバを使用するには、次の情報を指定する必要がある。 ホスト — プロキシ サーバの名前または IP アドレス。 ポート — プロキシ サーバのポート番号。
<p>ダウンロードのステータス</p> <p>注意: このウィンドウは、ネット インストーラを使用する場合にだけ表示されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ チェックボックスを選択または選択解除することで、ダウンロードが完了した後で、インストールを自動的に続行するかどうかを指定する。このチェックボックスは、デフォルトで選択されている。これを選択解除した場合は、ダウンロードが完了してからインストールを続行するときに、[Next] をクリックする必要がある。 ■ なんらかの理由でダウンロードを中断する必要がある場合は、[一時停止] をクリックする。クリックした場合は、ダウンロードが中断され、[一時停止] ボタンが[再開] ボタンに変わる。ダウンロードを続行するときは、[再開] をクリックする。
<p>アーカイブ整合性チェック</p> <p>注意: このウィンドウは、ネット インストーラを使用する場合にだけ表示されます。</p>	<p>ダウンロードの検証が完了したときは、[Next] をクリックする。</p> <p>ダウンロードしたコンポーネント アーカイブ ファイルの検証中は、このウィンドウが表示される。</p>

ウィンドウ	実行するアクション
<p>製品ディレクトリを選択します</p> <p>注意： カスタム インストールを実行し、すでにインストールされている WebLogic Platform コンポーネントが含まれる BEA_HOME ディレクトリを選択した場合、このウィンドウは表示されません。その場合は、選択したコンポーネントは、初回インストール時に指定した製品ディレクトリにインストールされます。</p>	<p>WebLogic Platform ソフトウェアをインストールするディレクトリを指定し、[Next] をクリックする。デフォルトの製品ディレクトリ (weblogic700) を受け入れるか、または新規の製品ディレクトリを作成する。</p> <p>詳細および作成されるディレクトリ構造については、1-23 ページの「製品インストールディレクトリの選択」を参照。</p> <p>新規ディレクトリの作成を選択した場合、インストールプログラムにより、自動的にディレクトリが作成される。</p> <p>[Next] をクリックすると、指定したコンポーネントのシステムへのコピーが開始される。</p>
ステータス	<p>BEA 製品とサービスに関する表示情報を確認し、システムへの指定されたファイルのコピーが完了したら [Next] をクリックする。標準インストールを実行している場合、インストールは完了。</p>
<p>コンフィグレーション ウィザードを実行</p> <p>注意： このウィンドウは、[インストールタイプを選択] ウィンドウで [カスタム インストール] を選択した場合にだけ表示されます。</p>	<p>オプションを選択することで、[コンフィグレーション] ウィザードを実行してアプリケーションドメインを作成するかどうかを指定する。</p> <p>[Yes] を選択した場合は、[コンフィグレーション] ウィザードの概要を理解するために、2-12 ページの「コンフィグレーション ウィザードの使い方」に進む。全詳細については、次の URL にあるドキュメント『コンフィグレーション ウィザードの使い方』を参照。 http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/confgwiz/index.html</p> <p>[No] を選択した場合は、後で [コンフィグレーション] ウィザードを [スタート] メニューから (Windows システムのみ) 実行したり、コマンドラインから実行することができる (UNIX および Windows システム)。</p>

ウィンドウ	実行するアクション
インストール完了	<p>[Done] をクリックしてインストールプログラムを終了する。</p> <p>標準インストールを実行した場合、または完全なカスタム インストールを実行した場合 (つまり、カスタム インストール オプションを使用して全コンポーネントをインストールした場合) は、デフォルトで WebLogic Platform QuickStart アプリケーションが表示される。QuickStart は、初心者が WebLogic Platform を評価、理解、および使用する上で役立つように設計されており、WebLogic Platform ツアーなどのサンプル、特定の開発タスクを実行するために役立つツール、およびオンラインドキュメントにすばやくアクセスできる。</p> <p>注意： QuickStart を自動的に起動しない場合は、[Run QuickStart] チェックボックスを選択解除します。</p>

コンフィグレーション ウィザードの使い方

カスタム インストールを実行している場合は、インストールプロセスの最後に [コンフィグレーション] ウィザードを実行して **WebLogic** ドメインをコンフィグレーションできます。または、カスタム インストールと標準インストールのどちらの場合でも、[スタート] メニューまたはコマンド ラインから [コンフィグレーション] ウィザードを起動できます。全詳細については、次の URL にある『**コンフィグレーション ウィザードの使い方**』を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/index.html>

[コンフィグレーション] ウィザードを使用して、カスタムの **WebLogic** ドメインを作成およびコンフィグレーションします。**WebLogic** ドメインは、相互関連して 1 つの単位として管理される **WebLogic Server** リソースのセットです。ドメインには、1 つ以上の **WebLogic Server** があり、**WebLogic Server** のクラスタが存在することもあります。

[コンフィグレーション] ウィザードでは、コンフィグレーション済みのドメイン テンプレートを使用して、対象の環境のためにドメイン作成を実行します。[コンフィグレーション] ウィザードで使用できるテンプレートは、システムにインストールするために選択したコンポーネントに基づきます。たとえば、**WebLogic Server** および **WebLogic**

Integration をインストールした場合は、両方のコンポーネントのためにコンフィグレーション済みのテンプレートは使用できますが、**WebLogic Portal** 用のテンプレートは使用できません。

コンフィグレーションのオプション

選択したコンフィグレーション済みのドメイン テンプレートに基づいて、各ドメインについて特定の種類の情報を指定するように促すプロンプトが表示されます。次のリストには、指定する必要がある情報の種類の一部が掲載されています。

注意： **WebLogic Platform** のインストールプログラムに添付されているドメイン テンプレートの詳細な解説は、次の URL にある『コンフィグレーション ウィザード テンプレート リファレンス』にあります。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/template/index.html>

- サーバの種類。単一のスタンドアロン サーバ、または管理対象サーバやクラスタ化された管理対象サーバがある管理サーバなどです。
- ディレクトリの作成場所になるドメイン ディレクトリ。デフォルトでは、このディレクトリは、*BEA_HOME/user_projects* に作成されます。ここで *BEA_HOME* は、このインストールのサポート情報がある **BEA** ホーム ディレクトリです。ディレクトリが存在しない場合は、ディレクトリが自動的に作成されます。
- サーバのコンフィグレーション情報。サーバ名、リスン アドレス、リスン ポート、および **SSL** リスン ポートなどです。ほとんどの値には、デフォルト値が指定されています。
- システムのユーザ名およびパスワード。**WebLogic Server** のユーザ名およびパスワードには、国際文字を含めて **JDK** でサポートされている文字セットが使用できます。
- サーバを **Windows** サービスとしてコンフィグレーションするかどうか。これを選択した場合は、**Windows** システムを起動するたびに、サーバが自動的に起動します。サーバを **Windows** サービスとしてインストールするには、**Administrator** 特権を持っている必要があります。詳細については、次の URL にある『**BEA WebLogic Server 管理者ガイド**』の「**WebLogic Server の起動と停止**」「**WebLogic Server の Windows サービスとしての設定**」を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/adminguide/startstop.html#SettingUpServerAsWindowsService>

注意： サーバを Windows サービスとして設定するよう求められるのは、WebLogic Server ドメインをコンフィグレーションするときだけです。WebLogic Integration ドメインおよび WebLogic Portal ドメインをコンフィグレーションするときは、プロンプトは表示されません。

- WebLogic Integration でワークフロー インスタンスに電子メールを送信するための電子メール アドレスおよび電子メール ホスト名 (このプロンプトが表示されるのは、ビジネスプロセス管理機能があるドメインをコンフィグレーションするときだけです)。

次に行う作業

WebLogic Platform をインストールすると、BEA ホーム ディレクトリに評価ライセンス ファイルがインストールされるので、すぐに製品を使い始めることができます。ソフトウェアに慣れるために **QuickStart** アプリケーションを使用することをお勧めします。また、WebLogic Platform ツアーを利用したり、付属サンプルを実行してください。詳細については、第 6 章「インストール後の作業実行」を参照してください。

コンソールモード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

次の節では、コンソールモードを使用して WebLogic Platform をインストールする方法を説明します。

- 作業開始前の注意
- Windows システムでのコンソールモード インストールの開始
- UNIX システム上でのコンソールモード インストールの開始
- コンソールモード インストールの実行
- 次に行う作業

作業開始前の注意

WebLogic Platform インストールを開始する前に、次のことを確認してください。

- 製品のインストール先がサポートされているプラットフォームであることを確認する。サポートされているプラットフォームの詳細なリストは、次の URL にあります。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html>

- 第1章「WebLogic Platform インストールの準備」の全体、特に次の節を参照する。
 - 1-13 ページの「インストールの要件」
 - 1-17 ページの「インストールの種類選択」

- 1-18 ページの「WebLogic Platform インストールのためのディレクトリ選択」
- WebLogic Platform コンポーネントを、同じコンポーネントの以前にインストールされているバージョンの上にインストールすることはできない。しかし、既存のインストールにコンポーネントを追加することはできます。たとえば、1 回のインストールで WebLogic Server をインストールして、別のインストールで WebLogic Integration または WebLogic Portal をインストールできます。しかし、1 つの製品コンポーネントの同じバージョンを再インストールするには、第 8 章「WebLogic Platform のアンインストール」で説明されているように、そのコンポーネントをアンインストールするか、他のロケーションにインストールする必要があります。

WebLogic Platform の既存のインストールにコンポーネントを追加する場合は、インストールを開始する前に実行中のサーバをシャットダウンする必要があります。

- BEA 製品ディレクトリ (/bea/weblogic700 など) にインストールされているすべての WebLogic Platform コンポーネントが、同じバージョンレベルである。このディレクトリにすでにインストールされているコンポーネントよりも新しいバージョンのコンポーネントを追加でインストールする場合は、インストールを続行する前に、既存のコンポーネントをアップグレードするように求められます。たとえば、WebLogic Server と WebLogic Integration 7.0 (Service Pack 1) をインストールした後で WebLogic Portal 7.0 (Service Pack 2) をインストールする場合は、WebLogic Portal をインストールする前に、その他のコンポーネントを Service Pack 2 にアップグレードする必要があります。インストールのアップグレード方法の詳細については、第 7 章「サービスパックとローリング パッチのインストール」を参照してください。

Windows システムでのコンソール モード インストールの開始

Windows システムでコンソール モードでインストールを開始するには

1. 対象の Windows システムにログインします。
2. MS-DOS コマンド プロンプト ウィンドウを開きます。
3. WebLogic Platform を CD-ROM からインストールする場合は、手順 4 に進みます。WebLogic Platform を Web ダウンロードからインストールする場合は、次の手順を実行します。

- a. 1-9 ページの「WebLogic Platform の Web 配布」に従ってソフトウェアをダウンロードします。
- b. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドのいずれかを入力することでインストールプロシージャを呼び出します。

```
net_platformXXX_win32.exe -mode=console (Sun Java 2 SDK が付属したネット  
インストーラ ファイルの場合)
```

```
platformXXX_win32.exe -mode=console (Sun Java 2 SDK が付属したパッケージ  
インストーラの場合)
```

```
platformXXX_jrockit_win32.exe -mode=console (WebLogic JRockit Java 2 SDK  
が付属したパッケージ インストーラの場合)
```

これらのファイル名の xxx はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

注意： インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
platformXXX_win32 -mode=console -log=D:\logs\platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するとき存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例では、ファイル名の xxx は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

インストールプログラムによって、WebLogic Platform のインストールが開始されます。

- c. 3-8 ページの「コンソール モード インストールの実行」に進みます。
- #### 4. CD-ROM から WebLogic Platform をインストールする場合
- a. WebLogic Platform CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
 - b. MS-DOS コマンド プロンプト ウィンドウを開きます。
 - c. CD-ROM ディレクトリに移動し、プラットフォームに応じたインストールプログラムのフォルダに移動します。
 - d. 次のコマンドのいずれかを入力して、インストールプロシージャを呼び出します。

`platformXXX_win32.exe -mode=console` (Sun Java 2 SDK が付属したパッケージ
インストーラの場合)

`platformXXX_jrockit_win32.exe -mode=console` (WebLogic JRockit Java 2 SDK
が付属したパッケージ インストーラの場合)

これらのファイル名の xxx はインストールしているソフトウェアのバージョン番号
です。

注意： インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで
`-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
platformXXX_win32.exe -mode=console  
-log=D:\logs\platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れる
だけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダ
だけを指定します。コマンドを実行するとき存在しないフォルダが
パスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例では、
ファイル名の xxx は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号
です。

- e. 3-8 ページの「コンソール モード インストールの実行」に進みます。

UNIX システム上でのコンソール モード インストールの開始

WebLogic Platform インストールプログラムの実行には、Java 実行時環境 (Java run-time environment: JRE) が必要です。JRE を備えた Java 2 Software Development Kit (SDK) は、Windows インストールプログラムおよび一部の UNIX インストールプログラム (ファイル名の末尾が .bin のもの) にバンドルされています。その他の UNIX プラットフォームの WebLogic Platform インストールプログラムには、Java 2 SDK はバンドルされていません。これらのインストールプログラムのファイル名の末尾は、.jar です。.jar インストールプログラムを実行するには、適切なバージョンの Java 2 SDK がシステムにインストールされており、PATH 変数の前に SDK の bin ディレクトリが指定されている必要があります。インストールプロセスにより、JAVA_HOME および関連する変数がこのディレクトリを指すように設定されるため、SDK を使用することが重要です。

.bin インストール ファイルのためのコンソール モード インストールの開始

ファイル名の末尾が `.bin` である UNIX プラットフォーム用のインストールプログラムがある場合は、次の手順を実行してコンソール モードでインストールを開始します。

1. 対象の UNIX システムにログインします。
2. コマンドライン シェルを開きます。
3. **WebLogic Platform** を CD-ROM からインストールする場合は、手順 4 に進みます。**WebLogic Platform** を Web ダウンロードからインストールする場合は、次の手順を実行します。
 - a. 1-9 ページの「**WebLogic Platform** の Web 配布」に従ってソフトウェアをダウンロードします。
 - b. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力することでインストール プロシージャを呼び出します。

```
chmod a+x filename.bin
./filename.bin -mode=console
```

ここで、`filename.bin` は、プラットフォームに適した **WebLogic Platform** インストールプログラムの名前です。

ネット インストーラのファイル名は、`net_` で始まります。たとえば、`net_platformXXX_solaris.bin` のようになります。ここで、`XXX` はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

注意： インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
platformXXX_solaris.bin -mode=console
-log=/home/logs/platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するとき存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例では、

ファイル名の xxx は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

4. CD-ROM から WebLogic Platform をインストールする場合

- a. WebLogic Platform CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
- b. CD-ROM ディレクトリに移動し、プラットフォームに応じたインストールプログラムのフォルダに移動します。
- c. 次のコマンドを入力することで、インストールプロシージャを呼び出します。

```
chmod a+x filename.bin
./filename.bin -mode=console
```

ここで、*filename.bin* は、プラットフォームに適した WebLogic Platform インストールプログラムの名前です。たとえば、*platformXXX_solaris.bin* のようになります。ここで、xxx はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

注意： インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンドラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
./platformXXX_solaris.bin -mode=console
-log=/home/logs/platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するとき存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例では、ファイル名の xxx は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

.jar インストール ファイルのためのコンソール モード インストールの開始

ファイル名の末尾が `.jar` である UNIX プラットフォーム用のインストールプログラムがある場合は、次の手順を実行してコンソール モードでインストールを開始します。

1. 対象の UNIX システムにログインします。

2. コマンドライン シェルを開きます。
3. 対象のシステムの `PATH` 変数の最初に、適切な SDK の `bin` ディレクトリを指定する必要があります。
例：

```
PATH=JAVA_HOME/bin:$PATH
export PATH
```


`JAVA_HOME` は、SDK ディレクトリの絶対パスです。
4. 次のいずれかを実行します。
 - 1-9 ページの「WebLogic Platform の Web 配布」に従ってソフトウェアをダウンロードします。
 - CD-ROM からインストールする場合は、WebLogic Platform CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、CD-ROM ディレクトリに移動します。
5. インストールファイルが存在するディレクトリに移動し、次の表の説明に従って、インストールプロシージャを呼び出します。

条件	入力するコマンド
AIX 以外の UNIX プラットフォームにインストールする場合	<pre>java -jar filename.jar -mode=console</pre>
AIX プラットフォームにインストールする場合	<pre>java -classpath filename.jar com.bea.installer.BEAInstallController -mode=console</pre>

どちらの場合も、`filename.jar` は、WebLogic Platform インストールファイルの名前です。たとえば、`pj_platformXXX_generic.jar` のようになります。ネット インストーラのファイル名は、`net_` で始まります。たとえば、`net_pj_platformXXX_generic.jar` のようになります。これらのファイル名の `XXX` はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

プラットフォームのサポートは、サービス パックのリリースによって変わる場合があります。製品のインストール先がサポートされているプラットフォームであることを確認するには、次の URL にある『サポート対象プラットフォーム』ページを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html>

注意： インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
java -jar pj_platformXXX_generic.jar -mode=console  
-log=/home/logs/platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するとき存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例では、ファイル名の `xxx` は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

6. 3-8 ページの「コンソール モード インストールの実行」に進みます。

コンソール モード インストールの実行

コンソール モード インストール プロセスを完了するには、選択する項目の番号を入力するか、または [Enter] を押してデフォルトを受け付け、プロンプトに応答します。インストール プロセスを終了するには、プロンプトへの応答として `exit` を入力します。選択した内容を確認または変更するには、プロンプトに対して `previous` を入力します。

注意： サンプルのコンソール テキスト およびディレクトリのパス名では、UNIX の規約 (スラッシュ) を使用しています。たとえば `/home1/boa/weblogic700` と表記しています。Windows システムでパス名を入力するときは、パス名に Windows の規約 (バックスラッシュ) を使用します。たとえば `C:\boa\weblogic700` と入力します。

以下の説明では、インストール プログラムの手順を示します。前の節の説明に従って、コンソール モードでインストール プログラムを起動した後で、この手順を使用します。

1. [ようこそ] プロンプトで `next` を入力するか、[Enter] を押してインストール プロセスを続行します。

[BEA Systems ライセンス契約] プロンプトが表示されます。

2. **BEA** ソフトウェア使用許諾契約を読んで、プロンプトに **yes** または **no** を入力することで、契約の条件を同意または拒否することを示します。契約書全体を確認するには、**[Enter]** を数回押すか、**more** を入力します。**no** と入力した場合は、インストールプロセスは中止されます。インストールを続行するには、**yes** と入力してライセンス契約の条件に合意したことを示します。

[**BEA** ホーム ディレクトリの選択]プロンプトが表示されます。

3. 対象システム上にインストールされたすべての **BEA** 製品の中央サポート ディレクトリとして機能する **BEA** ホーム ディレクトリを指定します。**BEA** ホーム ディレクトリの詳細については、1-19 ページの「**BEA** ホーム ディレクトリの選択」を参照してください。

インストールプログラムには次のプロンプトが表示されます。

BEA ホーム ディレクトリの選択：

- 1 - 新しい **BEA** ホームを作成する
- 2 - 既存の **BEA** ホームを使用する [/home/bea]

選択するインデックス番号を入力してください OR **[Exit][Previous][Next]>**

次のいずれかを実行します。

- 既存の **BEA** ホーム ディレクトリを使用するには、2 または **next** と入力するか、**[Enter]** を押す。システムに複数の **BEA** ホーム ディレクトリがある場合は、ディレクトリを表示する追加のプロンプトが表示されます。選択する **BEA** ホーム ディレクトリに関連付けられた番号を入力します。
- 新規の **BEA** ホーム ディレクトリを作成するには、プロンプトに 1 を入力して、**BEA** ホーム ディレクトリの絶対パスを入力する。たとえば、/home/beahome2 のように入力します。存在しないディレクトリを指定した場合は、そのディレクトリが自動的に作成されます。

既存の **BEA** ホーム ディレクトリを使用する場合にも、新規の **BEA** ホーム ディレクトリを作成する場合にも、次のサンプルで示されているように、選択を確認するよう促すプロンプトが表示されます。

BEA ホーム ディレクトリの選択：

- ```
->1 - はい、この BEA ディレクトリを使用します [/home/bea]
 2 - いいえ、BEA ホーム ディレクトリの選択に戻ります
```

選択するインデックス番号を入力してください OR **[Exit][Previous][Next]>**

## コンソール モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

選択を確認するには、コマンドラインで 1 を入力するか [Enter] を押します。また、入力を変更するために、[BEA ホーム ディレクトリ] パネルに戻るには、2 を入力します。

BEA ホーム ディレクトリを選択し、選択を確認した後は、[Choose Install Type] プロンプトが表示されます。

4. 次のテキストで示されているようにインストールの種類に関連付けられた番号を入力することで、実行するインストールの種類を指定します。

インストールの種類を選択：

```
->1| 標準インストール (プログラム ファイルおよびサンプルを含む、
すべてのソフトウェア コンポーネントをインストールします)
```

```
2| カスタム インストール (インストールするソフトウェア コンポーネントを選択し、
オプションとしてカスタム アプリケーション ドメインを作成します。
詳しい知識があるユーザにお勧めします)
```

=> 選択するインデックス番号を入力してください OR [Exit][Previous][Next]>

次のいずれかを実行します。

- 1 を入力するか、[Enter] を押すと、標準インストールを選択できる。

ネット インストーラ (ファイル名の先頭が net\_ になっています) を使用する場合は、[ダウンロード オプションを指定] プロンプトが表示されます。手順 6 に進みます。

CD-ROM からインストールする場合、またはパッケージ インストーラを使用する場合は、[製品のインストールディレクトリを選択] プロンプトが表示されます。手順 7 に進みます。

- 2 を入力すると、カスタム インストールを選択できる。[コンポーネントを選択] プロンプトが表示されます。

標準インストールおよびカスタム インストールの詳細については、1-17 ページの「インストールの種類選択」を参照してください。

5. インストールするコンポーネントを選択します。削除できるコンポーネントが次のように表示されます。

コンポーネントを選択：

```
Release 7.0.X.0
|-----WebLogic Server [0] x
| |-----Server [0.0] x
| |-----Workshop [0.1] x
```

```

| |-----Server Examples [0.2] x
|-----WebLogic Integration [1] x
| |-----Integration Server [1.0] x
| |-----Integration Examples [1.1] x
| |-----Client only [1.2]
|-----WebLogic Portal [2] x
| |-----Portal Server [2.0] x
| |-----Portal Examples [2.1] x
| |-----EBCC [2.2] x
|-----Platform Samples and Utilities [3] x
| |-----QuickStart [3.0] x
| |-----Platform Tour [3.1] x

```

=> 選択内容を切り替えるには、括弧内に表示される数字を正確に入力してください  
OR [Exit][Previous][Next]>

デフォルトでは、[WebLogic Integration Client] 以外の全コンポーネントが選択されています。これは、UNIX システムでは行末の x で示され、Windows システムではチェック マークで示されます。コンポーネントを選択解除するには、括弧内に表示されているとおりに正確に、コマンドラインにコンポーネントの数値コードを入力します。たとえば、WebLogic Server の [サーバ サンプル] をインストールしない場合は、コマンド ラインに 0.2 を入力します。

**注意：** システムにすでにインストールしているコンポーネントについては、括弧内に Installed という単語が表示されます。

コンポーネントの選択が終了したら、[Enter] を押すか next と入力します。選択を確認するように促すプロンプトが表示されます。選択を確認するには、コマンドラインで 1 を入力するか [Enter] を押します。また、選択を変更するために、[コンポーネントを選択] パネルに戻るには、2 を入力します。

**注意：** インストールするコンポーネントを選択または選択解除すると、インストールプログラムによりコンポーネント間の依存関係がチェックされ、選択されたコンポーネントのリストが自動的に修正されます。たとえば、WebLogic Server コンポーネントのチェック ボックスを選択解除した場合は、WebLogic Integration サーバおよびサンプルと WebLogic Portal サーバおよびサンプル、および WebLogic Integration Client のチェック ボックスも選択解除されます。これらの実行には WebLogic Server が必要なためです。しかし、EBCC サブコンポーネントはインストールできます。これは、EBCC サブコンポーネントがクライアント コンポーネントで、サーバが同じマシンにインストールされている必要がないためです。

CD-ROM からインストールしている場合、またはスタンドアロン版のインストールプログラムを使用している場合 (パッケージ インストーラ方法) は、[製品ディレクトリを選択]プロンプトが表示されます。手順 7 に進みます。

ネット インストーラ (インストールプログラムのファイル名の先頭が `net_` になっています) を使用する場合は、[ダウンロード オプションを指定]プロンプトが表示されます。

6. ソフトウェアをダウンロードするための設定を指定します。次のオプションが表示されます。

ダウンロード オプションを指定

- 1- Modify Storage directory (none)
- 2- Modify Remove download files after installation (No)
- 3- Modify Proxy Host (none)
- 4- Modify Proxy Port (none)

選択するインデックス番号を入力してください or [Exit][Previous][Next]>

**WebLogic Platform** を以前にインストールしており、インストールプロセスの中でストレージディレクトリを指定している場合は、そのディレクトリの絶対パスがデフォルトとして表示されます。表示されたデフォルト値を使用するには、`next` と入力するか [Enter] を押します。以前のダウンロードでダウンロード ストレージディレクトリを指定しておらず、今回ダウンロード ファイルを保存する場合は、インストールを続行する前にディレクトリを指定する必要があります。ストレージディレクトリを指定したり、その他のオプションを変更したりするには、次の作業を実行します。

- 1 を入力すると、ソフトウェア コンポーネントをダウンロードするストレージディレクトリを指定できる。プロンプトが表示されたら、指定するディレクトリの絶対パス名を入力します。ディレクトリが存在しない場合は、そのディレクトリが自動的に作成されます。
- インストールが完了した後でダウンロードしたファイルを削除する場合は、2 と入力する。こうすると、ダウンロード オプションが再び表示され、`Modify Remove download files after installation` オプションが `Yes` に設定されます。このオプションでデフォルト値 (`No`) を使用する場合、ダウンロードしたファイルは、指定したストレージディレクトリに保存されます。
- 次のように `Modify Host` オプションおよび `Modify Port` オプションに値を指定することで、ダウンロードで `HTTP` プロキシサーバを使用するかどうかを指定する。  
ホストを指定するには、3 を入力します。プロンプトでプロキシサーバの名前または IP アドレスを入力します。

ポートを指定するには、4 を入力します。プロンプトに、プロキシサーバのポート番号を入力します。

ソフトウェアのダウンロードの詳細については、1-9 ページの「WebLogic Platform の Web 配布」を参照してください。

設定を指定すると、指定したストレージディレクトリへのファイルのダウンロードが開始します。ダウンロードが完了すると、ダウンロードしたコンポーネントアーカイブファイルが検証されます。ダウンロードファイルの整合性を検証できない場合は、次のメッセージが表示されます。

```
The required installation files could not be verified.You
may download them from BEA or select different components.
```

検証が完了すると、[製品ディレクトリを選択]プロンプトが表示されます。

7. **WebLogic Platform** ソフトウェアをインストールするディレクトリを指定します。デフォルトの製品ディレクトリ (`bea_home/weblogic700`) を選択するか、新規の製品ディレクトリを作成します。新規ディレクトリを指定した場合は、インストールプログラムでディレクトリが自動的に作成されます。

このセクションで表示される選択肢は次のとおりです。

製品ディレクトリを選択 :

```
Product Directory= [/home/bea/weblogic700]
```

オプション選択 :

- 1 - Input new Product Directory
- 2 - デフォルトにリセット

選択するインデックス番号を入力してください OR [Exit][Previous][Next]>

次のいずれかを実行します。

- 現在の選択項目を使用する場合は、[Enter] を押すか、2 または next を入力する。最初のプロンプトで 2 を入力した場合は、デフォルトの製品ディレクトリ (この例では、`/home/bea/weblogic700`) が使用されます。
- 新規の製品インストールディレクトリを入力するには、1 を入力する。次のテキストが表示されます。

製品ディレクトリを選択 :

```
Product Directory = [/home1/beahome2/weblogic700]
```

新規入力製品ディレクトリ OR [Exit][Previous][Next]>

**WebLogic Platform** ソフトウェアをインストールするディレクトリの 絶対パスを入力します。

## コンソール モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

例 :

```
/home3/weblogic700
```

[Enter] を押したときに、入力したパス名が製品ディレクトリとして表示されます。

[Enter] を押すか `next` と入力します。次のテキストが表示されます。

製品ディレクトリを選択 :

- >1| はい、この製品ディレクトリを使用します。 [/home3/weblogic700]
- 2| いいえ、別の製品ディレクトリを選択します

選択するインデックス番号を入力してください OR [Exit][Previous][Next]>

入力が正しいことを確認して、1 を入力するか、[Enter] を押してインストールを続行します。また、入力を変更するために、[製品ディレクトリを選択] パネルに戻るには、2 を押します。

この時点で、指定したディレクトリにファイルがインストールされます。

**注意：** インストールプログラムが、かなり長時間停止しているように見える場合がありますが、異常ではありません。これは特にインストールの最後に起こります。この場合にも、インストールプログラムは動作していません。

標準インストールを実行している場合は、これでインストールは完了します。[Enter] を押して、インストールプログラムを終了します。カスタム インストールを実行している場合は、[コンフィグレーションウィザードを実行] プロンプトが表示されます。

8. オプションを選択することで、[コンフィグレーション] ウィザードを実行してアプリケーションドメインを作成するかどうかを指定します。コンソールには、次のオプションが表示されます。

コンフィグレーション ウィザードを実行

- >1 - はい、コンフィグレーション ウィザードを実行してアプリケーションドメインを作成します。
- 2 - いいえ、コンフィグレーション ウィザードをスキップします。

選択するインデックス番号を入力してください OR [Exit][Previous][Next]>

[コンフィグレーション] ウィザードを起動するには、[Enter] を押すか 1 を入力します。[コンフィグレーション] ウィザードをスキップするには、2 または `next` を入力します。インストール終了後に再び起動することができます。

[コンフィグレーション] ウィザードを使用すると、カスタムの **WebLogic** ドメインを作成およびコンフィグレーションできます。**WebLogic** ドメインは、相互関連して 1 つの単

位として管理される **WebLogic Server** リソースのセットです。ドメインには、1つ以上の **WebLogic Server** があり、**WebLogic Server** のクラスタが存在することもあります。

[ **コンフィグレーション** ] ウィザードの詳細については、2-12 ページの「**コンフィグレーション ウィザードの使い方**」を参照してください。詳細は、次の URL にある『**コンフィグレーション ウィザードの使い方**』で説明されています。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/index.html>

ドメインを作成した後、または [ **コンフィグレーション** ] ウィザードをスキップするために 2 を入力すると、インストールが完了します。

9. [Enter] を押して、インストールプログラムを終了します。

## 次に行う作業

**WebLogic Platform** をインストールすると、**BEA** ホーム ディレクトリに評価ライセンス ファイルがインストールされるので、すぐに製品を使い始めることができます。ソフトウェアに慣れるために **QuickStart** アプリケーションを使用することをお勧めします。また、**WebLogic Platform** ツアーを利用したり、付属サンプルを実行してください。詳細については、第 6 章「インストール後の作業実行」を参照してください。



# サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

次の節では、Windows システムと UNIX システムの両方で、サイレント モードでインストールプログラムを使用して WebLogic Platform をインストールする方法を説明します。

- サイレント モード インストールの概要
- 作業開始前の注意
- サイレント モード インストールの使用：主な手順
- サイレント モード インストール用のテンプレート ファイル作成
- Windows システムでのサイレント モード インストール処理の開始
- UNIX システムでのサイレント モード インストール処理の開始
- サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル
- 次に行う作業

## サイレント モード インストールの概要

サイレント モード インストールは、インストール コンフィグレーションを一度だけ設定し、その後はそれらのコンフィグレーションを使用して、インストールを多くのマシンに複製する方法です。サイレント モードのインストールでは、インストール開始前に作成した XML ファイルからコンフィグレーション用の設定が読み込まれます。インストールプ

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

ログラムからは、インストール処理中にコンフィグレーション オプションは何も表示されません。サイレント モード インストールは、Windows システムと UNIX システムの両方で機能します。

**注意：** サイレント モード インストールを使用することで、BEA ライセンス契約に同意したと見なされます。ユーザは、BEA ソフトウェア ライセンス契約書も見なければ、契約書の条件を受諾する方法也没有ありません。

この節の指示では、CD-ROM で、または Web からインストールプログラムを取得していることを想定しています。詳細については、1-8 ページの「WebLogic Platform の配布方法」を参照してください。

## 作業開始前の注意

WebLogic Platform インストールを開始する前に、使用しているプラットフォームがサポートされていることを確認してください。サポートされているプラットフォームの完全なリストについては、次の URL にある『サポート対象プラットフォーム』を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html>

Chapter 1, “WebLogic Platform インストールの準備.” も参照してください。

**注意：** WebLogic Platform を前の WebLogic Platform インストールの上に再インストールすることはできません。第 8 章「WebLogic Platform のアンインストール」で解説されているように、まず WebLogic Platform をアンインストールするか、別のロケーションにインストールする必要があります。

## サイレント モード インストールの使用： 主な手順

サイレント モード インストール処理には、次の 2 つのタスクがあります。

1. グラフィカル モード インストールやコンソール モード インストールなどの対話的なインストールプロセス中にユーザが通常入力するコンフィグレーション設定を定義するテンプレート ファイルを作成します。たとえば、BEA ホーム ディレクトリ、製品ディレクトリ、および [コンフィグレーション] ウィザードのオプションの値は、サイレント モードのテンプレート ファイルに設定します。

詳細な手順については、4-4 ページの「サイレント モード インストール用のテンプレート ファイル作成」を参照してください。サンプルテンプレート ファイルについては、4-15 ページの「サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル」を参照してください。

2. 手順 1 で作成したテンプレート ファイルを使用してサイレント モード インストールを起動します。

詳細な手順については、4-11 ページの「Windows システムでのサイレント モード インストール処理の開始」または 4-12 ページの「UNIX システムでのサイレント モード インストール処理の開始」を参照してください。

## サイレント モード インストールについての重要な注意事項

サイレント モード インストールを実行する場合は、次の点に留意する必要があります。

- サイレント モード インストールにはパッケージ インストーラを使用する必要があります。サイレント モード インストールは、ネット インストーラではサポートされていません。ネット インストーラ バージョンのインストールプログラムのファイル名は、`net_` で始まります。たとえば、`net_platformXXX_solaris.bin` のようになります。ここで、`xxx` はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です。サイレントモード インストールでは、ファイル名が `net_` で始まるインストールプログラムを使用しないでください。
- サイレント モード インストールでは、標準インストールだけがサポートされている。**WebLogic Platform** のコンポーネントをすべてインストールする必要があります。標準インストールでインストールされるコンポーネントについては、1-17 ページの「インストールの種類選択」を参照してください。
- サイレント モード インストールには通常のインストールの場合と同じ大きさの一時ディスク スペースが必要であり、通常のインストールの場合と同じ一時ストレージディレクトリを使用する。詳細については、1-15 ページの「一時ディスク スペースの

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

要件」を参照してください。一時ディレクトリに十分なスペースがない場合でも、インストールプログラムから指示されることはありません。

- サイレント モード インストールの所要時間は、通常のインストールの所要時間と同じである。サイレント モード インストールを開始すると、インストールプログラムの開始ウィンドウまたはメッセージが短時間表示されて、インストールが開始したことが示されます。インストールが進行中であることや、正しく完了したことを示すメッセージは表示されません。
- `sileInt.xml` ファイルのエントリが不正である場合は、インストール エラーが発生するおそれがある。エラー原因を容易に特定できるように、インストールを開始するときにログ ファイルを作成することをお勧めします。
- XML 定義(`<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>`) は `silent.xml` テンプレート ファイルの最初に指定しておく必要がある。XML 定義の前にスペースや改行を入れることはできません。

# サイレント モード インストール用のテンプレート ファイル作成

サイレント モードで WebLogic Platform をインストールする場合は、リアルタイムでインストールプログラムから情報を指定するように要求されることはありません。代わりに、`silent.xml` という XML ファイルが検索され、実装するインストール オプションおよび必要なコンフィグレーション設定に使用する値が決定されます。したがって、インストールプログラムをサイレント モードで実行する前に、起動するインストール オプションを指定する `silent.xml` ファイルを最初に作成することが必要です。

**注意：** `sileInt.xml` ファイルのエントリが不正である場合は、インストール エラーが発生するおそれがあります。エラー原因を容易に特定できるように、インストールを開始するときにログ ファイルを作成することをお勧めします。

サイレント モード インストール処理で使用するためにテンプレート ファイルを作成するには、次の手順を実行します。

1. サポートされているブラウザで、サンプルのサイレント モード インストール テンプレート ファイルを表示します。コンフィグレーションに応じて、次のサンプル テンプレートがあります。

## サイレント モード インストール用のテンプレート ファイル作成

- 統合テンプレート ファイルのサンプル
- 独立した管理サーバおよび管理対象サーバを持つドメインのコンフィグレーション用サンプル テンプレート
- 管理対象サーバのクラスタのコンフィグレーション用サンプル テンプレート
- 既存のドメインへの管理対象サーバの追加用サンプル テンプレート

統合テンプレートでは、WebLogic Platform の全コンポーネント (WebLogic Server、WebLogic Workshop、WebLogic Integration、および WebLogic Portal) の機能に対応したドメインをコンフィグレーションする方法を説明します。その他の 3 つのテンプレートは、そのタイトルが示すとおり、対象範囲が絞られています。この 4 つのテンプレートはすべて、次のロケーションにあります。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/install/silent.html#template>

これらのテンプレートは、この章の後半にも記載されています。4-15 ページの「サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル」を参照してください。

2. テンプレート ファイルの内容をコピーして、`silent.xml` という名前のテキスト ファイルとして WebLogic Platform のインストールプログラムがあるディレクトリに保存します。

**注意：** XML 定義 (`<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>`) はテンプレート ファイルの最初に指定しておく必要があります。XML 定義の前にスペースや改行を入れることはできません。

3. `silent.xml` ファイルで、次の表に示すデータと値名に値を割り当てることにより、必要なコンフィグレーションを作成します。

**注意：** 値を変更するときは、文字について XML ガイドラインに従う必要があります。つまり、`<`、`>`、`[` および `]` という XML で予約済みの文字は使用できません。

**表 4-1 サイレント モード インストール テンプレートの値**

| データと値名                                                | 入力する値                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| BEAHOME                                               | <p>選択したBEA ホーム ディレクトリの絶対パス名。BEA ホーム ディレクトリの詳細については、1-19 ページの「BEA ホーム ディレクトリの選択」を参照。</p> <p><b>注意：</b> サイレント モード インストールの場合に限り、ソフトウェアをインストールしないと、この値に指定したBEA ホーム ディレクトリは作成されません。</p>                                                                                                                                                                                           |
| USER_INSTALL_DIR                                      | <p>WebLogic Platform ソフトウェアをインストールするディレクトリの絶対パス名。詳細については、1-23 ページの「製品インストール ディレクトリの選択」を参照。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| RUN_DOMAIN_WIZARD                                     | <p>true に設定すると、[ コンフィグレーション ] ウィザードを実行してインストールの一部としてドメインを作成する。false に設定すると、これをスキップする。[ コンフィグレーション ] ウィザードを実行する場合は、このテーブルの次の行にリストされているように、適切なデータと値を指定する必要がある。詳細については、次の URL にある『コンフィグレーションウィザードの使い方』を参照。</p> <p><a href="http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/index.html">http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/index.html</a></p> |
| <p><i>残りの値は、[ コンフィグレーション ] ウィザードのオプションに適用される。</i></p> |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| domain.directory                                      | <p>ドメイン ディレクトリの絶対パス。ドメイン ディレクトリの名前はドメイン名と一致する必要がある。</p> <p><b>注意：</b> UNIX システムでは、ドメイン ディレクトリのパスでスペースを使用しないでください。</p>                                                                                                                                                                                                                                                        |
| C_domainName                                          | <p>作成されるドメインの名前。名前は、domain.directory に指定されたディレクトリ名と一致する必要がある。</p> <p><b>注意：</b> UNIX システムでは、ドメイン名でスペースを使用しないでください。</p>                                                                                                                                                                                                                                                       |

表 4-1 サイレント モード インストール テンプレートの値

| データと値名                 | 入力する値                                                                                                                                                                                     |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| C_serverName           | <p>コンフィグレーションされるサーバ名。スタンドアロン サーバのサーバ名として、および管理対象サーバとクラスタ化されたサーバがあるドメインの管理サーバのサーバ名として使用される。</p> <p><b>注意：</b> サーバ名にはスペースを使用しないでください。</p>                                                   |
| C_username             | <p>サーバを起動し、管理コンソールにアクセスする際の管理ユーザ名。管理ユーザ名には、スペースまたは XML の予約済み文字を使用してはならない。</p>                                                                                                             |
| C_password             | <p>管理ユーザのパスワード。8 文字以上で 20 文字以下の管理ユーザのパスワード。スペースまたは XML の予約済み文字を使用してはならない。</p>                                                                                                             |
| C_serverListenAddress  | <p>サーバのシステム IP アドレスまたは DNS 名。<br/>localhost とサーバの IP アドレスを使用してサーバおよび管理コンソールにアクセスする場合は、これを空白のままにできる。</p>                                                                                   |
| C_serverListenPort=    | <p>管理サーバ専用の TCP/IP ポート番号。この番号によって、サーバが接続をリスンするポートが指定される。ポート番号には、1 から 65535 の間の任意の整数を指定できる。</p>                                                                                            |
| C_serverSSLListenPort= | <p>管理サーバ専用のセキュア リスン ポート番号。セキュア リスン ポート番号は、セキュア ソケットレイヤ (secure sockets layer: SSL) プロトコルに基づくセキュアな Web 接続のために使用される。ポート番号には 1 から 65535 の間の任意の整数を指定できるが、C_serverListenPort と同じポートにはできない。</p> |
| ClusterName            | <p>作成されるクラスタの名前。このデータ値は、クラスタを作成している場合에만適用できる。</p> <p><b>注意：</b> クラスタ名にはスペースを使用しないでください。</p>                                                                                               |

**表 4-1 サイレント モード インストール テンプレートの値**

| データと値名                                      | 入力する値                                                                                                                                                                                                                                        |
|---------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ClusterPort                                 | クラスタ化されたサーバと通信するために管理サーバが使用するマルチキャスト ポート。一般的に 7777。このデータ値は、クラスタを作成している場合にも適用できる。                                                                                                                                                             |
| ClusterMCAddr                               | クラスタ化されたサーバと通信するために管理サーバが使用するクラスタ マルチキャスト IP アドレス。一般的に 237.0.0.1。有効なマルチキャスト アドレスの先頭は、237、238、または 239。このデータ値は、クラスタを作成している場合にも適用できる。                                                                                                           |
| ADMIN_HOST_NAME_OR_IP                       | 管理サーバ名または IP アドレス。管理対象サーバをコンフィグレーションするときに使用する。                                                                                                                                                                                               |
| ADMIN_LISTEN_PORT                           | 管理サーバがリスンするポート。管理対象サーバをコンフィグレーションするときに使用する。                                                                                                                                                                                                  |
| MANAGED_SERVER_<br>REGISTERED_NAME_IN_ADMIN | 管理サーバに登録されたマシン名またはサーバ名。管理対象サーバをコンフィグレーションするときに使用する。                                                                                                                                                                                          |
| SERVER-RUN-AS                               | [ コンフィグレーション ] ウィザードで作成されるサーバ コンフィグレーションのタイプ。コンフィグレーションは、Single Server (Standalone Sever)、Admin Server with Managed Server(s)、Admin Server with Clustered Managed Server(s)、または Managed Server (with owning Admin Server configuration) である。 |
| selectedJar                                 | ドメインを作成し、サーバをコンフィグレーションするために [ コンフィグレーション ] ウィザードが使用するテンプレート JAR ファイルの絶対パス。                                                                                                                                                                  |

表 4-1 サイレント モード インストール テンプレートの値

| データと値名                                    | 入力する値                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|-------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| INSTALL_NT_SERVICE<br>(Windows システムの場合のみ) | <p>yes を指定すると、コンフィグレーションされたサーバを <b>Windows</b> サービスとしてインストールする。また no を指定すると、コンフィグレーションされたサーバを <b>Windows</b> サービスとしてインストールする作業をスキップする。</p> <p><b>注意：</b> このデータと値のペアは、選択したテンプレートでサーバを <b>Windows</b> サービスとしてインストールする作業がサポートされている場合にだけ使用されます。それ以外の場合は、この値は無視されます。</p> <p>この値は、UNIX システムでは無視されます。</p> |
| INSTALL_WINDOWS_STARTUP_MENU              | <p>yes を指定すると、サーバを起動するためのオプションが <b>Windows</b> の [ スタート ] メニューに追加される。また no (デフォルト値) を指定すると [ スタート ] メニュー オプションがスキップされる。</p> <p><b>注意：</b> このデータと値のペアは、選択したテンプレートで [ スタート ] メニュー オプションのインストールがサポートされている場合にだけ使用されます。それ以外の場合は、無視されます。</p> <p>この値は、UNIX システムでは無視されます。</p>                              |
| DB_EMAIL_HOST                             | <p>デフォルトの電子メールサーバまたは <b>SMTP</b> サーバ。</p> <p><b>注意：</b> このデータと値のペアは、選択したテンプレートで <b>WebLogic Integration</b> 機能がサポートされている場合にだけ使用されます。それ以外の場合は、この値は無視されます。</p>                                                                                                                                       |

**表 4-1 サイレント モード インストール テンプレートの値**

| データと値名                   | 入力する値                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| DB_EMAIL_ADDRESS         | <p>WebLogic Itegration 中のワークフロー インスタンスが電子メールの送信元として使用できるアドレス。</p> <p><b>注意：</b> このデータと値のペアは、選択したテンプレートで <b>WebLogic Integration</b> 機能がサポートされている場合にだけ使用されます。それ以外の場合は、この値は無視されます。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| managedServers (データグループ) | <p>ドメイン内にある管理対象サーバのグループのコンフィグレーションタイプ。このデータグループは、SERVER-RUN-AS の値として「<b>Admin Server with Managed Server(s)</b>」を選択したときにだけ適用される。コンフィグレーションの中の管理対象サーバについて、次の値を指定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ managedServerRegName — 管理サーバに登録されているサーバの名前。英数文字だけを使用する。スペースは使用できない。</li> <li>■ managedServerHostIP — サーバがインストールされているマシンの IP アドレスまたは DNS 名。</li> <li>■ managedServerListenPort — サーバのリッスンポート。</li> <li>■ managedServerSSLListenPort — サーバのセキュア リッスン ポート。</li> </ul> |

表 4-1 サイレント モード インストール テンプレートの値

| データと値名                    | 入力する値                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|---------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| clusterServers (データ グループ) | <p>ドメイン内にあるクラスタ化された管理対象サーバのグループのコンフィグレーション タイプ。このデータ グループは、SERVER-RUN-AS の値として「Admin Server with Clustered Managed Server(s)」を選択したときにだけ適用される。</p> <p>クラスタ内の各サーバについて、次の値を指定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ clusterServerRegName — 管理サーバに登録されているサーバの名前。英数文字だけを使用する。スペースは使用できない。</li> <li>■ clusterServerHostIP — サーバがインストールされているマシンの IP アドレスまたは DNS 名。</li> <li>■ clusterServerListenPort — サーバのリッスンポート。</li> <li>■ clusterServerSSLListenPort — サーバのセキュア リッスン ポート。</li> </ul> |

[ コンフィグレーション ] ウィザードおよび選択可能なオプションの詳細については、次の URL にある『コンフィグレーション ウィザードの使い方』を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/index.html>

## Windows システムでのサイレント モード インストール処理の開始

Windows システムでサイレント モード インストールを開始するには、次の手順を実行します。

### 1. Windows システムにログインします。

WebLogic Platform を Windows サービスとしてインストールする場合は、Administrator 特権が必要です。WebLogic Platform を Windows サービスとしてインストールする方法については、次の URL にある『BEA WebLogic Server 管理者ガイド』の中の「WebLogic Server の Windows サービスとしての設定」を参照してください。

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/adminguide/startstop.html#SettingUpServerAsWindowsService>

2. MS-DOS コマンド プロンプト ウィンドウを開く。
3. インストール ファイルがあるディレクトリに移動し、次のコマンドを入力してインストール プロシージャを開始します。必ず、次のように `silent.xml` テンプレート ファイルの *絶対パス* を指定します。

```
filename.exe -mode=silent -silent_xml=path_to_silent.xml
```

ここで、`filename.exe` は WebLogic Platform のインストール ファイル名であり、`path_to_silent.xml` は `silent.xml` テンプレート ファイルの *絶対パス* です。

**注意：** インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
platformXXX_win32.exe -mode=silent -silent_xml=D:\silent.xml
-log=D:\logs\platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するとき存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例では、ファイル名の `xxx` は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

## UNIX システムでのサイレント モード インストール処理の開始

WebLogic Platform インストール プログラムの実行には、Java 実行時環境 (Java run-time environment: JRE) が必要です。JRE を備えた Java 2 Software Development Kit (SDK) は、Windows インストール プログラムおよび一部の UNIX インストール プログラム (ファイル名の末尾が `.bin` のもの) にバンドルされています。その他の UNIX プラットフォームの WebLogic Platform インストール プログラムには、Java 2 SDK はバンドルされていません。これらのインストール プログラムのファイル名の末尾は、`.jar` です。`.jar` インストール プログラムを実行するには、適切なバージョンの Java 2 SDK がシステムにインストールさ

れており、PATH 変数の前に SDK の bin ディレクトリが指定されている必要があります。インストールプロセスにより、JAVA\_HOME および関連する変数がこのディレクトリを指すように設定されるため、SDK を使用することが重要です。

## .bin インストール ファイルのためのサイレント モード インストールの開始

**注意：** `silent.xml` ファイルのエントリが不正である場合は、インストール エラーが発生するおそれがあります。エラー原因を容易に特定できるように、インストールを開始するときにログ ファイルを作成することをお勧めします。

末尾が `.bin` であるインストール ファイルを使用してサイレント モード インストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. 対象の UNIX システムにログインします。
2. コマンドライン シェルを開きます。
3. インストール ファイルがあるディレクトリに移動し、次のコマンドを入力してインストール プロシージャを開始します。必ず、次のように `silent.xml` テンプレート ファイルの *絶対パス名* を指定します。

```
chmod a+x filename
```

```
./filename.bin -mode=silent -silent_xml=/path_to_silent.xml
```

ここで、`filename.bin` は WebLogic Platform のインストール ファイル名であり、`path_to_silent.xml` は `silent.xml` テンプレート ファイルの *絶対パス* です。

**注意：** インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
platformXXX_solaris.bin -mode=silent -silent_xml=/home/silent.xml
-log=/home/logs/platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するときに存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例で使用されているファイル名 `xxx` は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

## .jar インストール ファイルのためのサイレント モード インストールの開始

**注意：** `silent.xml` ファイルのエントリが不正である場合は、インストール エラーが発生するおそれがあります。エラー原因を容易に特定できるように、インストールを開始するときにログ ファイルを作成することをお勧めします。

末尾が `.jar` であるインストールファイルのためにサイレント モード インストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. 対象の UNIX システムにログインします。
2. コマンドライン シェルを開きます。
3. 対象のシステムの `PATH` 変数の最初に、適切な SDK の `bin` ディレクトリを指定する必要があります。

例：

```
PATH=JAVA_HOME/bin:$PATH
export PATH
```

ここで、`JAVA_HOME` は、SDK ディレクトリの絶対パスです。

4. インストールファイルがあるディレクトリに移動し、次の表の説明に従って、インストールプロシージャを開始します。その際、必ず `silent.xml` テンプレート ファイルの絶対パス名を指定します。

| 条件                                   | 入力するコマンド                                                                                                                    |
|--------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| AIX 以外の UNIX プラット<br>フォームにインストールする場合 | <pre>java -jar filename.jar -mode=silent -silent_xml=/path_to_silent.xml</pre>                                              |
| AIX プラットフォームにインス<br>トールする場合          | <pre>java -classpath filename.jar com.bea.installer.BEAInstallController -mode=silent -silent_xml=/path_to_silent.xml</pre> |

どちらの場合も、`filename.jar` は WebLogic Platform インストール ファイルの名前です (`pj_platformXXX_generic.jar` など。ここで、`XXX` はインストールしているソフトウェアのバージョン番号です)。また、`path_to_silent.xml` は `silent.xml` テンプレート ファイルの絶対パスです。

## サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル

プラットフォームのサポートは、サービス パックのリリースによって変わる場合があります。製品のインストール先がサポートされているプラットフォームであることを確認するには、次の URL にある『サポート対象プラットフォーム』ページを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html>

**注意：** インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
pj_platformXXX_generic.jar -mode=silent
-silent_xml=/home/silent.xml -log=/home/logs/platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するときに存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。この例では、ファイル名の xxx は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

# サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル

この節では、サイレント インストールできさまざまなタイプのドメイン コンフィグレーションに使用できるテンプレート ファイルのサンプルを紹介します。

- 統合テンプレート ファイルのサンプル
- 独立した管理サーバおよび管理対象サーバを持つドメインのコンフィグレーション用サンプル テンプレート
- 管理対象サーバのクラスタのコンフィグレーション用サンプル テンプレート
- 既存のドメインへの管理対象サーバの追加用サンプル テンプレート

この節のファイルをコピーして独自のニーズに合わせて修正することができます。また、最初の 1 つを除いた残り 3 つのテンプレートの相違点 (太字表記部分) を調べ、どのパラメータ設定がコンフィグレーションのどの部分に影響するのかを学習することができます。

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

[ コンフィグレーション ] ウィザードを使用したドメインのコンフィグレーション プロセスの詳細については、次の URL にある「新しい WebLogic ドメインの作成」を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/creatdom.html>

## 統合テンプレート ファイルのサンプル

リスト 4-1 に示すサンプルのテンプレート ファイルでは、すべてのコンポーネント、WebLogic Server、WebLogic Workshop、WebLogic Integration、および WebLogic Portal の機能を備えた、幅広い WebLogic Platform ドメインをコンフィグレーションする方法を示します。

テンプレート ファイルを構造化する方法に加えて、固有のテンプレート ファイルをまとめる簡単な方法についても説明します。このファイルをコピーし、表 4-1 に合わせて修正してから `silent.xml` というファイル名で保存できます。その後、WebLogic Platform 7.0 をサイレント モードでインストールするときに `silent.xml` をテンプレート ファイルとして使用できます。

### リスト 4-1 統合テンプレート ファイルのサンプル

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<domain-template-descriptor>

<input-fields>
 <data-value name="BEAHOME" value="C:\bea" />
 <data-value name="USER_INSTALL_DIR" value="C:\bea\weblogic700" />
 <data-value name="RUN_DOMAIN_WIZARD" value="false" />

<!-- 次の値は、[コンフィグレーション] ウィザードによって、ドメインをコンフィグレーションする
 ために使用されます。 -->

 <data-value name="domain.directory" value="C:\bea\user_domains\mydomain" />
 <data-value name="C_domainName" value="mydomain" />
 <data-value name="C_serverName" value="myserver" />
 <data-value name="C_username" value="system" />
 <data-value name="C_password" value="weblogic" />
 <data-value name="C_serverListenAddress" value="" />
 <data-value name="C_serverListenPort" value="7001" />
 <data-value name="C_serverSSLListenPort" value="7002" />
```

## サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル

```
<data-value name="ClusterName" value="mycluster" />
<data-value name="ClusterPort" value="7777" />

<!-- 次の値、ClusterMCAddr は、クラス D の IP アドレスである必要があります。 -->
<data-value name="ClusterMCAddr" value="237.0.0.1" />
<data-value name="ADMIN_HOST_NAME_OR_IP" value="adminserver" />
<data-value name="ADMIN_LISTEN_PORT" value="7001" />
<data-value name="MANAGED_SERVER_REGISTERED_NAME_IN_ADMIN" value="ms1" />

<!--SERVER-RUN-AS の値によって、[コンフィグレーション] ウィザードが作成するサーバ コン
フィグレーションが決定されます。次の行で示されているように、オプションが 4 つあります。使用し
ない 3 つのオプションは、コメントアウトします。 -->

 <data-value name="SERVER-RUN-AS" value="Single Server (Standalone
Server)" />
<!-- <data-value name="SERVER-RUN-AS" value="Admin Server with Managed
Server(s)" /> -->
<!-- <data-value name="SERVER-RUN-AS" value="Admin Server with Clustered
Managed Server(s)" /> -->
<!-- <data-value name="SERVER-RUN-AS" value="Managed Server (with owning Admin
Server configuration)" /> -->

<!--SelectedJar の値によって、[コンフィグレーション] ウィザードがドメインを作成しサーバを
コンフィグレーションするテンプレートが決定されます。 -->

 <data-value name="selectedJar"
value="C:\bea\weblogic700\common\templates\domains\wls.jar" />

<!-- 次の 4 つのデータは、上で指定した [コンフィグレーション] ウィザードのテンプレートで選択
したオプションによって変わります。関連するオプションがテンプレートで選択されていない場合は、次
の 4 つのデータと値のペアは無視されます。 -->

 <data-value name="INSTALL_NT_SERVICE" value="no" />
 <data-value name="INSTALL_WINDOWS_STARTUP_MENU" value="no" />
 <data-value name="DB_EMAIL_HOST" value="myserver" />
 <data-value name="DB_EMAIL_ADDRESS" value="name@bea.com" />

<!--managedServers データ グループによって、ドメイン内の管理対象サーバのグループのコンフィ
グレーションが決定されます。このデータ グループは、SERVER-RUN-AS の値として「Admin Server
with Managed Server(s)」を選択したときにだけ適用されます。このデータ グループを使用するに
は、適切な行すべてでコメントアウトを解除します。 -->

<!-- <data-group name="managedServers"> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="managedServerRegName" value="managed1" /> -->
<!-- 次の値には、IP アドレスまたは DNS 名を指定できます。 -->
<!-- <data-value name="managedServerHostIP" value="host1" /> -->
```

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

```
<!-- <data-value name="managedServerListenPort" value="1001" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="1002" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="managedServerRegName" value="managed2" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerHostIP" value="host2" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerListenPort" value="2001" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="2002" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="managedServerRegName" value="managed3" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerHostIP" value="host3" /> -->

<!-- <data-value name="managedServerListenPort" value="3001" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="3002" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="managedServerRegName" value="managed4" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerHostIP" value="host4" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerListenPort" value="4001" /> -->
<!-- <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="4002" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- </data-group> -->
```

<!--clusterServers データ グループによって、ドメイン内のクラスタ化された管理対象サーバのグループのコンフィグレーションが決定されます。このデータ グループは、SERVER-RUN-AS の値として「Admin Server with Clustered Server(s)」を選択したときにだけ適用されます。このデータ グループを使用するには、すべての適切な行でコメントアウトを解除します。-->

```
<!-- <data-group name="clusterServers"> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="clusterServerRegName" value="cluster1" /> -->
<!-- 次の値には、IP アドレスまたは DNS 名を指定できます。 -->
<!-- <data-value name="clusterServerHostIP" value="host1" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerListenPort" value="1001" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerSSLListenPort" value="1002" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="clusterServerRegName" value="cluster2" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerHostIP" value="host2" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerListenPort" value="2002" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerSSLListenPort" value="2003" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="clusterServerRegName" value="cluster3" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerHostIP" value="host3" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerListenPort" value="3003" /> -->
```

## サイレント モード インストール用のテンプレート ファイルのサンプル

```
<!-- <data-value name="clusterServerSSLListenPort" value="3004" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- <data-element> -->
<!-- <data-value name="clusterServerRegName" value="cluster4" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerHostIP" value="host4" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerListenPort" value="4004" /> -->
<!-- <data-value name="clusterServerSSLListenPort" value="4005" /> -->
<!-- </data-element> -->
<!-- </data-group> -->

 </input-fields>

</domain-template-descriptor>
```

---

## 独立した管理サーバおよび管理対象サーバを持つドメインのコンフィグレーション用サンプルテンプレート

次のサンプルテンプレートは、サイレント インストール中に、1 台の管理サーバと任意の数の管理対象サーバで構成されるドメインをコンフィグレーションするのに使用できます。太字表記された文字列は、コンフィグレーションの定義で重要な箇所です。これらの文字列の設定をその他のサンプル テンプレート ファイルの対応する文字列の設定と比較してください。

インストールプロセスを進めるには、表 4-1 に従って次のテンプレートを変更し、`silent.xml` という名前のファイルとして保存します。この新しいファイルは、**WebLogic Platform 7.0** をサイレント モードでインストールする場合にテンプレートとして使用できます。

1 台の管理サーバと任意の数の管理対象サーバを持つドメインをコンフィグレーションする方法の詳細については、次の URL にある『*コンフィグレーションウィザードの使い方*』の「管理サーバおよび管理対象サーバを持つドメインの作成」を参照してください。  
<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/creatdom.html>

### リスト 4-2 独立した管理サーバと管理対象サーバを持つドメインのコンフィグレーション

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<domain-template-descriptor>
```

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

```
<input-fields>
 <data-value name="BEAHOME" value="C:\bea\user_domains\mydomain" />
 <data-value name="USER_INSTALL_DIR"
value="C:\bea\user_domains\mydomain\weblogic700" />
 <data-value name="RUN_DOMAIN_WIZARD" value="true" />
```

<!-- 次の値は、[ コンフィグレーション ] ウィザードによって、ドメインをコンフィグレーションするために使用されます。-->

```
 <data-value name="domain.directory"
value="C:\bea\user_domains\mydomain\user_domains\d1" />
 <data-value name="C_domainName" value="d1" />
 <data-value name="C_serverName" value="admin" />
 <data-value name="C_username" value="system" />
 <data-value name="C_password" value="weblogic" />
 <data-value name="C_serverListenAddress" value="" />
 <data-value name="C_serverListenPort" value="8001" />
 <data-value name="C_serverSSLListenPort" value="8002" />
```

<!-- 次の値、ClusterMCAddr は、クラス D の IP アドレスである必要があります。-->

```
 <data-value name="ClusterMCAddr" value="237.0.0.1" />
 <data-value name="ADMIN_HOST_NAME_OR_IP" value="adminserver" />
 <data-value name="ADMIN_LISTEN_PORT" value="9999" />
 <data-value name="MANAGED_SERVER_REGISTERED_NAME_IN_ADMIN" value="mmss1" />
 <data-value name="MANAGED_SERVER_REGISTERED_NAME_IN_ADMIN" value="mmss2" />
```

<!--SERVER-RUN-AS の値によって、[ コンフィグレーション ] ウィザードが作成するサーバ コンフィグレーションが決定されます。次の行で示されているように、オプションが 4 つあります。使用しない 3 つのオプションは、コメントアウトします。-->

```
<data-value name="SERVER-RUN-AS" value="Admin Server with Managed Server(s)" />
 <data-group name="managedServers">
 <data-element>
 <data-value name="managedServerRegName" value="ms1" />
 <data-value name="managedServerHostIP" value="host1" />
 <data-value name="managedServerListenPort" value="1001" />
 <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="1002" />
 </data-element>
 <data-element>
 <data-value name="managedServerRegName" value="ms2" />
 <data-value name="managedServerHostIP" value="host2" />
 <data-value name="managedServerListenPort" value="2001" />
 <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="2002" />
 </data-element>
 </data-group>
```

```
<!--SelectedJar の値によって、[コンフィグレーション] ウィザードがドメインを作成しサーバを
コンフィグレーションするテンプレートが決定されます。-->
 <data-value name="selectedJar" value="C:\bea\user_domains\mydomain\
 weblogic700\common\templates\domains\wls.jar" />
</input-fields>

</domain-template-descriptor>
```

---

## 管理対象サーバのクラスタのコンフィグレーション 用サンプル テンプレート

次のサンプル テンプレートは、サイレント インストール中に、1 台の管理サーバと管理対象サーバのクラスタで構成されるドメインをコンフィグレーションするのに使用できます。太字表記された文字列は、コンフィグレーションの定義で重要な箇所です。これらの文字列の設定をその他のサンプル テンプレート ファイルの対応する文字列の設定と比較してください。

インストールプロセスを進めるには、表 4-1 に従って次のテンプレートを変更し、`silent.xml` という名前のファイルとして保存します。この新しいファイルは、**WebLogic Platform 7.0** をサイレント モードでインストールする場合にテンプレートとして使用できます。

管理サーバを持つドメインを管理対象サーバのクラスタ用にコンフィグレーションする方法の詳細については、次の URL にある『**コンフィグレーション ウィザードの使い方**』の「管理サーバおよびクラスタを持つドメインの作成」を参照してください。  
<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/creatdom.html>

### リスト 4-3 管理サーバとクラスタ化された管理対象サーバを持つドメインのコンフィグレーション

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<domain-template-descriptor>

<input-fields>
 <data-value name="BEAHOME" value="C:\bea\user_domains\mydomain" />
 <data-value name="USER_INSTALL_DIR"
value="C:\bea\user_domains\mydomain\weblogic700" />
 <data-value name="RUN_DOMAIN_WIZARD" value="true" />
```

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

<!-- 次の値は、[ コンフィグレーション ] ウィザードによって、ドメインをコンフィグレーションするために使用されます。 -->

```
<data-value name="domain.directory"
value="C:\bea\user_domains\mydomain\user_domains\myCluster" />
 <data-value name="C_domainName" value="myCluster" />
 <data-value name="C_serverName" value="admin" />
 <data-value name="C_username" value="system" />
 <data-value name="C_password" value="weblogic" />
 <data-value name="C_serverListenAddress" value="localhost" />
 <data-value name="C_serverListenPort" value="8001" />
 <data-value name="C_serverSSLListenPort" value="8002" />
 <data-value name="ClusterName" value="mycluster" />
 <data-value name="ClusterPort" value="7777" />
```

<!-- 次の値、ClusterMCAddr は、クラス D の IP アドレスであることが必要です。 -->

```
<data-value name="ClusterMCAddr" value="237.0.0.1" />
 <data-value name="ADMIN_HOST_NAME_OR_IP" value="admin" />
 <data-value name="ADMIN_LISTEN_PORT" value="8001" />
 <data-value name="MANAGED_SERVER_REGISTERED_NAME_IN_ADMIN" value="cs1" />
 <data-value name="MANAGED_SERVER_REGISTERED_NAME_IN_ADMIN" value="cs2" />
```

<!--SERVER-RUN-AS の値によって、[ コンフィグレーション ] ウィザードが作成するサーバ コンフィグレーションが決定されます。次の行で示されているように、オプションが 4 つあります。使用しない 3 つのオプションは、コメントアウトします。 -->

```
<data-value name="SERVER-RUN-AS" value="Admin Server with Clustered
Managed Server(s)" />
```

```
<data-group name="clusterServers"
 <data-element>
 <data-value name="clusterServerRegName" value="cs1" />
 <data-value name="clusterServerHostIP" value="host1" />
 <data-value name="clusterServerListenPort" value="1001" />
 <data-value name="clusterServerSSLListenPort" value="1002" />
 </data-element>
 <data-element>
 <data-value name="clusterServerRegName" value="cs2" />
 <data-value name="clusterServerHostIP" value="host2" />
 <data-value name="clusterServerListenPort" value="2001" />
 <data-value name="clusterServerSSLListenPort" value="2002" />
 </data-element>
</data-group>
```

- <!--SelectedJar の値によって、[ コンフィグレーション ] ウィザードがドメインを作成しサーバをコンフィグレーションするテンプレートが決定されます。 -->

```
<data-value name="selectedJar"
value="C:\bea\user_domains\mydomain\weblogic700\common\
```

```
templates\domains\wls.jar" />
</input-fields>

</domain-template-descriptor>
```

---

## 既存のドメインへの管理対象サーバの追加用 サンプル テンプレート

次のサンプル テンプレートは、管理対象サーバを既存のドメインに追加するのに使用できません。太字表記された文字列は、コンフィグレーションの定義で重要な箇所です。これらの文字列の設定をその他のサンプルテンプレート ファイルの対応する文字列の設定と比較してください。

インストールプロセスを進めるには、表 4-1 に従って次のテンプレートを変更し、`silent.xml` という名前のファイルとして保存します。この新しいファイルは、**WebLogic Platform 7.0** をサイレント モードでインストールする場合にテンプレートとして使用できません。

管理対象サーバを既存のドメインに追加する方法の詳細については、次の URL にある「既存の WebLogic ドメインの拡張」を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/creatdom.html>

### リスト 4-4 既存のドメインへの管理対象サーバの追加用テンプレート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

<domain-template-descriptor>

<input-fields>
 <data-value name="BEAHOME" value="C:\bea\user_domains\mydomain" />
 <data-value name="USER_INSTALL_DIR"
value="C:\bea\user_domains\mydomain\weblogic700" />
 <data-value name="RUN_DOMAIN_WIZARD" value="true" />

<!-- 次の値は、[コンフィグレーション] ウィザードによって、ドメインをコンフィグレーションする
ために使用されます。-->
 <data-value name="domain.directory"
value="C:\bea\user_domains\mydomain\user_domains\d2" />
 <data-value name="C_domainName" value="d2" />
```

## サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

```
<data-value name="C_serverName" value="admin" />
<data-value name="C_username" value="system" />
<data-value name="C_password" value="weblogic" />
<data-value name="C_serverListenAddress" value="" />
<data-value name="C_serverListenPort" value="8001" />
<data-value name="C_serverSSLListenPort" value="8002" />

<!-- 次の値、ClusterMCAddr は、クラス D の IP アドレスである必要があります。-->
<data-value name="ClusterMCAddr" value="237.0.0.1" />
<data-value name="ADMIN_HOST_NAME_OR_IP" value="adminserver" />
<data-value name="ADMIN_LISTEN_PORT" value="9999" />
<data-value name="MANAGED_SERVER_REGISTERED_NAME_IN_ADMIN"
value="mmss1" />
<data-value name="MANAGED_SERVER_REGISTERED_NAME_IN_ADMIN"
value="mmss2" />

<!--SERVER-RUN-AS の値によって、[コンフィグレーション] ウィザードが作成するサーバ コン
フィグレーションが決定されます。次の行で示されているように、オプションが 4 つあります。使用し
ない 3 つのオプションは、コメントアウトします。-->

<data-value name="SERVER-RUN-AS" value="Managed Server (with owning
Admin Server
configuration)" />

<data-group name="managedServers">
 <data-element>
 <data-value name="managedServerRegName" value="ms1" />
 <data-value name="managedServerHostIP" value="host1" />
 <data-value name="managedServerListenPort" value="1001" />
 <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="1002" />
 </data-element>

 <data-element>
 <data-value name="managedServerRegName" value="ms2" />
 <data-value name="managedServerHostIP" value="host2" />
 <data-value name="managedServerListenPort" value="2001" />
 <data-value name="managedServerSSLListenPort" value="2002" />
 </data-element>
</data-group>

<!--SelectedJar の値によって、[コンフィグレーション] ウィザードがドメインを作成しサーバを
コンフィグレーションするテンプレートが決定されます。-->
<data-value name="selectedJar" value="C:\bea\user_domains\mydomain
\weblogic700\common\templates\domains\wls.jar" />
</input-fields>
</domain-template-descriptor>
```

## 次に行う作業

WebLogic Platform をインストールすると、評価ライセンス ファイルもインストール中に作成した BEA ホーム ディレクトリにインストールされるので、すぐに製品を使い始めることができます。ソフトウェアに慣れるために **QuickStart** アプリケーションを使用することをお勧めします。また、WebLogic Platform ツアーを利用したり、付属サンプルを実行してください。詳細については、Chapter 6, “インストール後の作業実行.”を参照してください。

サイレント モード インストールを使用した WebLogic Platform のインストール

# WebLogic Platform ライセンス ファイルのインストールおよび更新

WebLogic Platform の配布ファイルを実行するには、有効な製品ライセンスが必要です。次の節では、WebLogic Platform ライセンスを取得、インストール、更新する方法を説明します。

- WebLogic Platform ライセンスについて
- license.bea ファイルの更新
- 128 ビット暗号の有効化
- WebLogic Platform 製品の 7.0 リリース以前のライセンスのアップグレード

## WebLogic Platform ライセンスについて

WebLogic Platform 7.0 では、license.bea と呼ばれる XML 形式のライセンス ファイルを使用します。BEA ホーム ディレクトリに保存されたこのライセンス ファイルは、対象システムにインストールされたすべての BEA WebLogic Platform 製品に使用され、実行時のチェックにより、WebLogic Platform のどのコンポーネントを使用できるかが判断されます。

WebLogic Platform で購入可能なライセンスについては、次の URL の e-docs Web サイトにある「ライセンス」ページを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/interm/license.html>

## 評価ライセンス

BEA WebLogic 製品をはじめてインストールしたときは、`license.bea` ファイルが BEA ホーム ディレクトリにインストールされます。そのファイルに 90 日間有効な評価ライセンスが入力されるので、すぐに製品を使い始めることができます。その後、`license.bea` ファイルが配布ファイルの一部となっている BEA 製品を追加インストールしたときは、新規の製品評価ライセンスが自動的に `license.bea` ファイルに追加されますが、評価期間は延長されません。

WebLogic Platform の評価ライセンスは完全なライセンスであり、WebLogic Platform のすべてのコンポーネント機能が使用可能になります。ライセンスご購入の詳細については、BEA Sales (<http://www.beasys.co.jp/index.html>) にご連絡ください。

WebLogic Platform 評価製品はすべて 1 台のサーバマシンで使用するライセンスになっており、サーバに最大で 20 台のクライアントを接続できます。

## 開発者ライセンス、製品ライセンス

ライセンスは、WebLogic Platform 製品全体に対して購入することも、個別のコンポーネントに対して購入することもできます。WebLogic Platform で購入可能なライセンスについては、次の URL の e-docs Web サイトにある「ライセンス」ページを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/interm/license.html>

WebLogic Platform を CD-ROM でご購入された場合は、ライセンスされたコンポーネントに対する開発者ライセンスまたは製品ライセンスが、注文書に記載されたアカウントに電子メールで送付されます。WebLogic Platform ソフトウェアをインストールし、製品ライセンスを受け取ったら、そのライセンスを使用して既存の `license.bea` ファイルを更新する必要があります。詳細については、5-2 ページの「`license.bea` ファイルの更新」を参照してください。

## license.bea ファイルの更新

次の条件が 1 つでも当てはまる場合は、`license.bea` ファイルを更新する必要があります。

- WebLogic Platform の 90 日間の評価期間の延長を申し込み、延長が承認された場合。

- BEA WebLogic ソフトウェアを追加購入した場合。
- 新規製品を含む新規配布キットを取得した場合。
- WebLogic Platform コンポーネント製品の以前のリリース用の無期限有効なライセンスを所有しており、WebLogic Platform 7.0 を BEA Web サイトからダウンロードした後で、WebLogic Platform 7.0 ライセンスにアップグレードする場合。ライセンスは、WebLogic Platform 7.0 ライセンスに変換する必要があります。この方法については、5-6 ページの「WebLogic Platform 製品の 7.0 リリース以前のライセンスのアップグレード」を参照してください。
- 6.0 バージョン以前 (5.1 またはそれ以前) の WebLogic Server で使用されていたライセンスファイルである、WebLogicLicense.XML ファイルまたは WebLogicLicense.class ファイルを所有している場合。これらのライセンスファイルは、license.bea ファイルに変換する必要があります。これらのライセンスファイルを変換する方法は、次の URL にある『BEA WebLogic Server 7.0 へのアップグレード』で説明されています。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/upgrade/index.html>

いずれの場合も、電子メールの添付ファイルでライセンス更新ファイルを受信できます。そして、次のプロシージャを実行することで、license.bea ファイルを更新します。

**注意：** 128 ビット暗号を使用可能にするには、WebLogic Platform ソフトウェアをインストールする *前に*、license.bea ファイルに 128 ビット暗号ライセンスが存在する必要があります。詳細については、5-4 ページの「128 ビット暗号の有効化」を参照してください。

1. 電子メールで受信したライセンス更新ファイルを license.bea 以外の名前で、対象の BEA ホーム ディレクトリに保存します。たとえば、ファイルを platform\_license.bea という名前で保存します。このファイルは、このプロシージャの手順 4 で license\_update\_file として使用します。

**警告：** 既存の license.bea ファイルを上書きしたり、そのファイルの名前を変更しないでください。

2. ご使用のプラットフォームに適した手順を実行します。
  - Windows システムでは、MS-DOS セッションを開いて対象の BEA ホーム ディレクトリに移動する。
  - UNIX システムでは、対象の BEA ホーム ディレクトリに移動する。
3. まだ含まれていない場合は、次のコマンドを入力して、PATH 変数に JDK を追加します。

- Windows システムの場合

```
set PATH=BEA_HOME\SDK\bin;%PATH%
```

- UNIX システムの場合

```
PATH=BEA_HOME/SDK/bin:$PATH
export PATH
```

これらのコマンドでは、*SDK* は *jdk131\_06* または *jrockit70sp2\_131* などのインストールに使用される **Java 2 SDK** のディレクトリ名です。

4. 次のコマンドのいずれかを入力することで、ライセンス更新ファイルを既存のライセンスにマージします。

- Windows システムの場合

```
UpdateLicense license_update_file
```

- UNIX システムの場合

```
sh UpdateLicense.sh license_update_file
```

*license\_update\_file* は、手順 1 でライセンス更新ファイルを保存するときの名前です。

5. アップデートした *license.bea* ファイルのコピーを、**WebLogic Integration** およびアプリケーション インストール ディレクトリ以外の安全な場所に保存します。

ライセンス ファイルを他人が使用することはできませんが、このファイルを悪意ある改ざん、または偶然による改ざんから保護された場所に保存する必要があります。

## 128 ビット 暗号の有効化

WebLogic Platform では、56 ビットおよび 128 ビットの 2 レベルのセキュア ソケット レイヤ (secure sockets layer: SSL) 暗号が利用できます。評価ライセンスでは、56 ビット暗号だけが利用できますが、開発者ライセンスまたは製品ライセンスを購入すれば、56 ビット暗号または 128 ビット暗号が有効になります。

WebLogic Platform のインストールで 128 ビット暗号を有効にするには、128 ビット暗号ライセンスが *license.bea* ファイルの中に存在する必要があります。インストール プログラムが *license.bea* ファイルの中で WebLogic Platform の 128 ビット暗号ライセンスを検出できなかった場合、または 56 ビット暗号ライセンスだけを検出した場合は、インストーラは WebLogic Platform のインストールに 56 ビット SSL プラグインを組み込みます。

インストールプログラム `license.bea` ファイルの中で **WebLogic Platform** の 128 ビット暗号ライセンスを検出した場合は、インストーラは、**WebLogic Platform** のインストールに 56 ビットおよび 128 ビットの両方の **SSL プラグイン** を組み込みます。

**注意：** 米国の輸出規制法により、インストール *前* に 128 ビットライセンスを入手しておく必要があります。米国法では、128 ビット対応のコードを適切なライセンスがないマシンにインストールすることが禁じられています。128 ビット暗号ライセンスなしでインストールした **WebLogic Platform** で 128 ビット暗号を使用する場合は、**WebLogic Platform** をアンインストールし、**BEA ホーム ディレクトリ** に **WebLogic Platform** の 128 ビット暗号ライセンスを格納してから **WebLogic Platform** を再インストールします。

128 ビット暗号用の **WebLogic Platform** インストールの新規 **BEA ホーム ディレクトリ** を作成する場合は、次の手順を実行します。

1. **WebLogic Platform** の 128 ビット暗号ライセンスを取得します。

詳細については、**BEA Sales** (<http://www.beasys.co.jp/index.html>) にご連絡ください。

2. **BEA ホーム ディレクトリ** として使用する新規ディレクトリを作成し、128 ビット暗号ライセンスを新しいディレクトリに配置します。ライセンスファイルの名前は、`license.bea` とする必要があります。

3. **WebLogic Platform** ソフトウェアをインストールします。

詳細については、次のインストール手順のいずれかを参照してください。

- 第 2 章「グラフィカル モード インストールを使用した **WebLogic Platform** のインストール」
- 第 3 章「コンソール モード インストールを使用した **WebLogic Platform** のインストール」
- 第 4 章「サイレント モード インストールを使用した **WebLogic Platform** のインストール」

# WebLogic Platform 製品の 7.0 リリース以前の ライセンスのアップグレード

license.bea ファイルのフォーマットは、WebLogic Platform 7.0 で変更されています。WebLogic Platform コンポーネント製品の以前のリリースの license.bea ファイルから WebLogic Platform 7.0 の license.bea ファイルに変換するには、次の手順を実行します。以前のリリースの license.bea ライセンス ファイルが、この手順を実行するマシンで使用可能であることが必要です。

1. 次の URL にある BEA カスタマ サポート Web サイトにログインします。

<http://support.bea.com>

**注意：** この Web サイトにアクセスするには、BEA eSupport アカウントが必要です。

2. [Product Update and License Key Forms] セクションに移動します。
3. 既存のライセンスを WebLogic Platform 7.0 のライセンスに更新するリンクをクリックします。
4. 変換するライセンス ファイルがあるディレクトリのパス名を参照および選択するか、表示されるボックスにパス名を入力します。次に、[I Accept] をクリックします。
5. 変換されたライセンス ファイルが電子メールで返信されます。ご使用のシステムで license.bea ファイルを更新する方法については、5-2 ページの「license.bea ファイルの更新」を参照してください。

# インストール後の作業実行

以下の節では、**WebLogic Platform** ソフトウェアをインストールし、ライセンスを取得した後で実行するタスクについて説明します。

- **QuickStart** の使用
- サンプルの実行
- 他のデータベースへの切り替え
- 使用している **SDK** のバージョンの確認
- **WebLogic Platform** の **Windows** ショートカットについて
- **WebLogic Platform** 製品ディレクトリ構造について

## QuickStart の使用

一般的なインストールを使用して **WebLogic Platform** をインストールした場合、またはカスタム インストールを使用してすべてのコンポーネントおよびサンプルをインストールした場合は、**WebLogic Server** と共にインストールされたデータベースである **PointBase** データベースを使用して実行されるように、サンプルドメインが自動的にコンフィグレーションされます。インストールが完了したときは、**QuickStart** アプリケーションが表示されます。**QuickStart** は、初めて使う人が **WebLogic Platform** を評価、学習、および使用するとき

## インストール後の作業実行

に役立つように設計されています。QuickStart からは、WebLogic Platform ツアーなどのサンプル、特定の開発タスクを実行するために有用なツール、およびオンラインドキュメントにすばやくアクセスできます。

インストールした後で、QuickStart は次の手順で起動できます。

- Window システムでは、[スタート | プログラム | BEA WebLogic Platform 7.0 | QuickStart] を選択する。
- UNIX システムでは、次の手順を実行する。
  - a. 対象の UNIX システムにログインします。
  - b. コマンドライン シェルを開きます。
  - c. WebLogic Platform インストールの /common/bin サブディレクトリに移動します。  
例：
  - d. 次のコマンドを入力します。

```
cd /home/bean/weblogic700/common/bin
```

```
sh quickstart.sh
```

## サンプルの実行

WebLogic Platform ソフトウェアを使用する前に、各コンポーネントに付属しているサンプルアプリケーションを実行することをお勧めします。これらのサンプルには、さまざまな利点があります。これらのサンプルで、ソフトウェアが正しくインストールされていることが確認できます。またサンプル コードが提供され、実装技術が示されます。

WebLogic Platform コンポーネントのサンプルに関する詳細については、次の表を参照してください。

表 6-1 サンプルの解説

製品	サンプルの解説
WebLogic Platform	<a href="http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/interm/samples.html">http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/interm/samples.html</a>
WebLogic Server	<a href="http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/samples.html">http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/samples.html</a>

表 6-1 サンプルの解説

製品	サンプルの解説
WebLogic Integration	<a href="http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/interm/samples.htm">http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/interm/samples.htm</a>
WebLogic Portal	<a href="http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wlp/docs70/interm/samples.htm">http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wlp/docs70/interm/samples.htm</a>
WebLogic Workshop	<a href="http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/workshop/docs70/help/index.html#guide/tutorial/tutFirstWebServiceIntro.html">http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/workshop/docs70/help/index.html#guide/tutorial/tutFirstWebServiceIntro.html</a>

## 他のデータベースへの切り替え

WebLogic Platform をインストールしたときは、すべてのドメインは、PointBase データベースを使用するようにコンフィグレーション済みです。しかし、Oracle や Microsoft SQL Server などの、動作確認されている別のデータベースに切り替える必要が生じることもあります。PointBase 以外のデータベースを使用してサンプルを実行するには、新しいデータベースをコンフィグレーションおよび初期化する必要があります。データベースの切り替え、またはコンフィグレーションの詳細については、次の項目を参照してください。

- WebLogic Platform のドメインについては、次の URL にある『*BEA WebLogic Platform リリース ノート*』の「データベースのドメインをカスタマイズする」で説明されている手順を実行する。

[edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/relnotes/relnotes.html](http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/relnotes/relnotes.html)

- WebLogic Portal ドメインについては、次の URL にある『*BEA WebLogic Portal 管理者ガイド*』の中の「システム管理」「データベース管理」で説明されている手順を実行する。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wlp/docs70/admin/sysadmin.htm>

- WebLogic Integration ドメインについては、Integration Database Wizard を使用するか、wliconfig コマンドを使用する。これは、次の URL にある『*BEA WebLogic Integration の起動、停止、およびカスタマイズ*』の中の「WebLogic Integration のカスタマイズ」で説明されています。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/config/custom.htm>

## 使用している SDK のバージョンの確認

使用している SDK のバージョンは、コマンドラインを使用するか、サーバ用に作成されたログファイルの内容を調べることにより、確認できます。これらの方法については、6-4 ページの表 6-2 「SDK バージョンの確認」を参照してください。

表 6-2 SDK バージョンの確認

SDK の確認方法	手順
コマンドラインを使用	<ol style="list-style-type: none"><li>1. コマンドプロンプトウィンドウを開き、次のディレクトリに移動する。 <code>WL_HOME\server\bin</code> (Windows の場合) <code>WL_HOME/server/bin</code> (UNIX の場合) これらのパス名の <code>WL_HOME</code> は、WebLogic Platform をインストールしたディレクトリを表す。</li><li>2. 次のコマンドをプロンプトに入力し、環境が設定されていることを確認する。 <code>setWLSenv.cmd</code> (Windows の場合) <code>setWLSenv.sh</code> (UNIX の場合)</li><li>3. 次のコマンドをプロンプトに入力する。 <code>java -version</code></li></ol> <p>WebLogic JRockit を使用している場合は、出力に BEA WebLogic JRockit(R) Virtual Machine と表示される。</p>

表 6-2 SDK バージョンの確認

SDK の確認方法	手順
サーバ ログ ファイルを使用	<p>1. テキスト エディタで、ドメインのサーバ ログ ファイルを開く。</p> <p>サーバ ログ ファイルのロケーションは場合によって異なる。一部のドメインについては、ログ ファイルは <code>weblogic.log</code> という名前で <code>domain_name\logs</code> ディレクトリにある。ここで、<code>domain_name</code> は、[ コンフィグレーション ] ウィザードを使用してドメインを作成したときに指定したドメイン名、またはサンプル ドメイン名のどちらかである。</p> <p>たとえば、  <code>C:\bea\user_projects\mydomain\logs\weblogic.log</code> のようになる。サーバ ログ ファイルの詳細については、次の URL にある『<i>BEA WebLogic Server 管理者ガイド</i>』の「ログ メッセージを使用した WebLogic Server の管理」を参照。  <a href="http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/admininguide/logging.html">http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/admininguide/logging.html</a></p> <p><b>注意：</b> サーバ ログ ファイルはサーバの初回起動時に作成されます。</p> <p>2. ログ ファイルで次の値を検索する。</p> <pre>java.vm.version java.vm.vendor</pre> <p>ログ ファイルのこれらのエントリでは、JVM および JVM ベンダ (Sun Microsystems Inc. や BEA Systems, Inc. など) のビルド バージョンを指定している。</p>

## WebLogic Platform の Windows ショートカットについて

WebLogic Platform を Windows システムにインストールしたときは、BEA WebLogic Platform が自動的にインストールの親フォルダとして使用されます。追加の BEA ホーム ディレクトリがシステムに追加されたときは、次の図で示されている規則を使用して、新規の BEA 製品フォルダが作成されていきます。

図 6-1 同じシステムにある複数の BEA ホーム ディレクトリのトラッキング

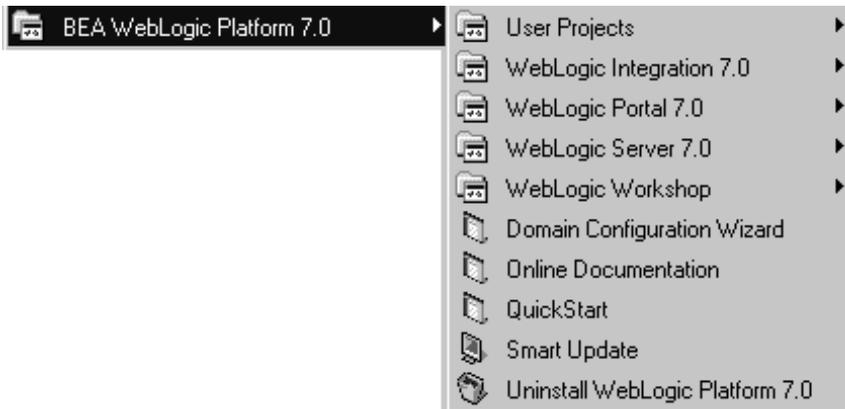


それぞれの BEA ホーム ディレクトリには、関連付けられた BEA 製品フォルダがあります。別々の BEA ホーム ディレクトリにある製品を区別するために、**BEAHOME $n$**  がフォルダ名に追加されます。**BEAHOME** に関連付けられている数字は、2 から開始します。Windows システムで作成されている BEA ホーム ディレクトリが 1 つだけの場合は、数字は付きません。

## WebLogic Platform のスタート メニュー

WebLogic Platform 7.0 のフォルダ ([ スタート | プログラム | BEA WebLogic Platform ]) には、次の図で示されているショートカット ファイルがあります。

図 6-2 WebLogic Platform 7.0 のスタート メニュー



- *User Projects* — [ コンフィグレーション ] ウィザードを使用して作成した各ドメインのフォルダがあります。ドメインの作成時にスタート メニューオプションを作成することを選択した場合は、ドメイン フォルダにはサーバを起動するためのショートカットが格納されています。WebLogic Integration のドメインをコンフィグレーションしている場合は、Integration Database Wizard のショートカットがインストールされます。

## WebLogic Platform の Windows ショートカットについて

[ コンフィグレーション ] ウィザードを使用してドメインを作成する方法の詳細については、『[コンフィグレーション ウィザードの使い方](#)』を参照してください。

- **WebLogic Integration 7.0** — WebLogic Integration Tools およびサンプルを起動するショートカットがあります。WebLogic Integration の使用方法の詳細については、次の URL にある WebLogic Integration のドキュメントを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/index.htm>

- **WebLogic Portal 7.0** — WebLogic Portal のツールおよびサンプルを起動するショートカットがあります。WebLogic Portal の使用方法の詳細については、次の URL にある WebLogic Portal のドキュメントを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wlp/docs70/index.htm>

- **WebLogic Server 7.0** — サンプル サーバおよび Pet Store サーバ、WebLogic Builder、WebLogic Server の概要が記載されているページを起動または開くショートカットがあります。WebLogic Server の使用方法の詳細については、次の URL にある WebLogic Server のドキュメントを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/index.html>

- **WebLogic Workshop** — WebLogic Workshop およびサンプルを起動するショートカットがあります。WebLogic Workshop の使用方法の詳細については、次の URL にある WebLogic Workshop のドキュメントを参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/workshop/docs70/index.html>

- **Domain Configuration Wizard** — ユーザドメインの作成に役立つ [ コンフィグレーション ] ウィザードを起動します。[ コンフィグレーション ] ウィザードの詳細については、次の URL にある『[コンフィグレーション ウィザードの使い方](#)』を参照してください。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/configwiz/index.html>

- **Online Documentation** — e-docs Web サイトにある WebLogic Platform のオンラインドキュメントへのリンクがあります。
- **QuickStart** — 初めて使用する人が WebLogic Platform を評価、理解、使用するときに役立つように設計されている WebLogic Platform QuickStart アプリケーションを起動できます。
- **Smart Update** — インストールされている BEA 製品に対して取得可能なアップデートをチェックし、必要に応じてアップデートをインストールする Smart Update を起動できます。

- *Uninstall WebLogic Platform 7.0* — WebLogic Platform 7.0 のアンインストールプログラムを起動します。詳細については、第 8 章「WebLogic Platform のアンインストール」を参照してください。

# WebLogic Platform 製品ディレクトリ構造について

WebLogic Platform のインストールでは、BEA ホーム ディレクトリおよび製品インストールディレクトリを選択するように求められます。BEA ホーム ディレクトリの詳細については、1-19 ページの「BEA ホーム ディレクトリの選択」を参照してください。標準インストールでは、WebLogic Platform ソフトウェアのディレクトリ構造が次のように作成されます。このディレクトリ構造は、BEA ホーム ディレクトリの内部または外部に置くことができます。表 6-3 で、各ディレクトリの内容を説明します。

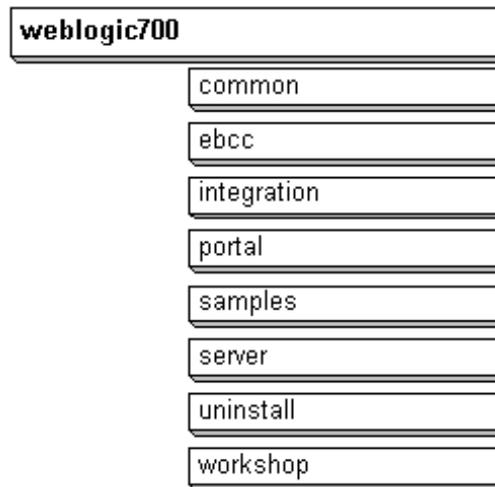


表 6-3 製品インストール ディレクトリの構造

ディレクトリ	内容
weblogic700	WebLogic Platform の全コンポーネントが共有するファイルのフォルダ。また、インストールされた WebLogic Platform の各コンポーネントのための個別のフォルダ。WebLogic Platform コンポーネントには、WebLogic Server、WebLogic Integration、WebLogic Portal、および WebLogic Workshop がある。
common	WebLogic Platform コンポーネントが共有するファイル。ドメインを作成するときに [ コンフィグレーション ] ウィザードが使用する jar ファイルがあるテンプレート ディレクトリを含む。[ コンフィグレーション ] ウィザードによって、このフォルダの内容が読み込まれ、ディレクトリの中にある jar ファイルに基づいてテンプレート オプションが表示される。[ コンフィグレーション ] ウィザードの詳細については、『コンフィグレーション ウィザードの使い方』を参照。
ebcc	E-Business Control Center のプログラム ファイル。
integration	WebLogic Integration のプログラム ファイル。
portal	WebLogic Portal のプログラム ファイル。

表 6-3 製品インストール ディレクトリの構造

ディレクトリ	内容
samples	WebLogic Platform ソフトウェアを使用して独自のアプリケーションを開発する方法の理解を助けるために設計されたサンプルコード、リソース、およびコンフィグレーション済みのサンプルドメイン。サンプルは、システムにインストールされているコンポーネント別に整理されている。たとえば、このディレクトリにある platform フォルダには、WebLogic Platform ツアーを実行するための e2eDomain のソースコードがある。同様に、server フォルダには、examples ドメインおよび petstore ドメイン、サンプルおよび Pet Store サンプルアプリケーションのソースコード、および server/eval フォルダにある PointBase 評価ソフトウェアがある。
server	WebLogic Server のプログラム ファイル。
uninstall	WebLogic Platform ソフトウェアをアンインストールするために必要なコード。
workshop	WebLogic Workshop アプリケーションおよびドキュメント ファイル。

# サービス パックとローリング パッチのインストール

Smart Update (推奨) またはダウンロード可能なアップグレード インストーラのいずれかを使用して、WebLogic Platform 7.0 インストールをアップグレードすることができます。次の節では、このどちらかの方法でソフトウェアをアップグレードする方法について説明します。

- サービス パックとローリング パッチの概要
- Smart Update を使用したサービス パックとローリング パッチのインストール
- ダウンロード可能なアップグレード インストーラを使用したサービス パックとローリング パッチのインストール
- Smart Update を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストール
- 次に行う作業

**注意：** SDK が付属した Smart Update およびアップグレード インストーラは、Sun Java 2 SDK をシステムにインストールします。WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) リリースをインストールした後で、JRockit Java 2 SDK を使用するようにインストールを変更した場合は、Smart Update やアップグレード インストーラを使用してインストールをアップグレードしないでください。この場合は、プラットフォームに WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) と JRockit パッケージ全体をインストールする必要があります。JRockit と共に動作するカスタムの Service Pack 1 ドメインを作成した場合は、このドメインを Service Pack 2 に移行する必要があります。ドメインの移行の手順については、<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/relnotes/relnotes.html#migration>にある『BEA WebLogic Platform リリース ノート』の「コンフィギュレーション ウィザードを使用して作成されたドメインを移行する」を参照してください。

## サービス パックとローリング パッチの概要

BEA は、定期的に **WebLogic Platform** のサービス パックまたはローリング パッチをリリースします。サービス パックは、既存のリリースに対するアップデートで、既知の問題へのソリューションなどの製品の機能強化を行います。サービス パックは、**WebLogic Platform** インストールの代わりではありません。**Weblogic Platform** インストールに対して変更や追加を行うプログラムのパッケージです。サービス パック更新の間に発行されるローリング パッチは、個別のコンポーネントのバグの修正用です。ローリング パッチは製品の機能強化は行いません。

**注意：** サービス パックとローリング パッチは、登録済みのサポート カスタマだけがパスワードで保護された **Web** サイトからダウンロードできます。これらの製品アップデートをダウンロードするには、**eSupport** ユーザ名とパスワードを使用してログインする必要があります。**eSupport** アカウントを持っていない場合は、次の **URL** にアクセスして取得します。

<http://support.bea.com>

次のいずれかの方法で、サービス パックとローリング パッチをインストールすることができます。

- **Smart Update (推奨)**。これを使用すると、**BEA** サーバからコードおよびメディアアーカイブを取得できます。メディアアーカイブは、対象の **BEA** ホーム ディレクトリに現在インストールされているコンポーネント用にのみ取得できます。
- パッケージアップグレード インストーラ。これは、<http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html> にある **Evaluation Center** からダウンロードできます。その際、**WebLogic Platform** 配布全体をダウンロードする必要はありません。アップグレード インストールプログラムは、グラフィカルモードとコンソールモードのインストールをサポートしています。

**Smart Update** およびパッケージアップグレード インストーラのどちらを使用した場合でも、現在のインストールのメディア状態およびアップグレード中に追加されたファイルの情報が格納されたバックアップ ファイルが作成されます。インストール時にエラーが発生した場合、またはアップグレード インストールをアンインストールしたりロールバックした場合に、このバックアップ ファイルを使ってシステム状態を復元します。**WebLogic Platform** の標準インストール(つまり、**WebLogic Platform** コンポーネント製品すべてをインストールする場合)では、少なくとも **250MB** の空きディスクスペースが必要です。

**注意：** アップグレード インストーラで更新されるのは、WebLogic Platform インストール プログラムによってインストールされたファイルだけです。ユーザが作成したファイルや [ コンフィグレーション ] ウィザードを使用して作成したディレクトリ ( デフォルトでは user\_projects ) は更新されません。

一時パッチはサービス パックには対応していません。一時パッチをインストールしてそのパッチを参照するようにクラスパスを更新した場合は、そのパッチへの参照すべてをクラスパスから削除することが必要になる場合があります。

## WebLogic Server 7.0 GA (7.0.0.0) の更新に関する重要な注意事項

スタンドアロン版の WebLogic Server 7.0 GA (バージョン 7.0.0.0) をインストールしたが、WebLogic Platform 7.0 で使用可能なバージョン (WebLogic Server バージョン 7.0.0.1) にアップグレードしていない場合は、Smart Update を使用してサービス パックをインストールすることはできません。代わりに、<http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html> にある Evaluation Center からダウンロードできるパッケージアップグレード インストーラを使用することができます。詳細については、7-7 ページの「ダウンロード可能なアップグレード インストーラを使用したサービス パックとローリング パッチのインストール」を参照してください。

インストールした WebLogic Server のバージョンを確認するには、テキスト エディタで `BEA_HOME\logs\log.txt` (UNIX の場合は `BEA_HOME/logs/log.txt`) を開き、ログファイルの最後のエントリを参照します。ログ ファイルの各行は、現在の BEA ホームのインストール イベント、つまりインストールまたはアンインストールを表しています。ログ エントリから、インストールされているバージョンが WebLogic Platform 7.0 SP0 以前のものであることが確認できた場合は、Smart Update を使用することはできません。インストールされているバージョンが WebLogic Platform 7.0.0.1 以降のものであることが確認できた場合は、Smart Update を使用して Service Pack 1 (7.0.1.0) および今後リリースされるサービス パックをインストールできます。

# Smart Update を使用したサービス パックとローリング パッチのインストール

Smart Update 機能を使用して、取得可能なソフトウェア アップデートを定期的にチェックできます。Smart Update を起動したときは、インストールされている製品のバージョン番号がチェックされた後、BEA Web サイトに接続して取得可能なサービス パックがチェックされます。[Smart Update] ウィンドウには、次の3つのペインがあります。

- **Installed Products** — [Smart Update] ウィンドウの左側のペイン。対象の BEA ホーム ディレクトリにインストールされている製品とそのリリース情報がツリー表示されます。
- **Upgrade Options** — 右上のペイン。インストールされている製品で使用できるサービス パックおよびローリング パッチのリストが表示されます。
- **Downgrade Options** — 右下のペイン。インストールを以前のバージョンに戻す場合に、戻すことができる製品のバージョンのリストが表示されます。Smart Update を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストールの詳細については、7-16 ページの「Smart Update を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストール」を参照してください。

**注意：** Smart Update を実行すると、現在の BEA ホーム ディレクトリに関連付けられている製品だけがチェックされます。システムに BEA ホーム ディレクトリが複数存在する場合は、使用可能なサービス パックを各ホーム ディレクトリにインストールするために、ホーム ディレクトリごとに Smart Update を実行する必要があります。BEA ホーム ディレクトリの詳細については、1-19 ページの「BEA ホーム ディレクトリの選択」を参照してください。

Smart Update を使用してサービス パックまたはローリング パッチをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サービス パックまたはローリング パッチのホット インストールはサポートされていません。
2. 次の表の説明に従って、Smart Update を起動します。

表 7-1 Smart Update の起動

Smart Update を起動するプラットフォーム	手順
Windows	<p>[スタート] メニューを使用する場合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ [スタート   プログラム   BEA WebLogic Platform 7.0   Smart Update] を選択する。</li> </ul> <p>MS-DOS コマンド プロンプト ウィンドウを使用する場合</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <code>BEA_HOME\utils</code> ディレクトリに移動する。<code>BEA_HOME</code> は、更新する <b>WebLogic Platform</b> インストールが存在するディレクトリ。</li> <li>2. 次のコマンドをプロンプトに入力する。 <code>bsu.cmd</code></li> </ol> <p>[Smart Update] ウィンドウが表示される。</p>
UNIX	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. UNIX システムにログインする。</li> <li>2. コマンド シェルを開いて <code>BEA_HOME/utils</code> ディレクトリに移動する。<code>BEA_HOME</code> は、更新する <b>WebLogic Platform</b> インストールが存在するディレクトリ。</li> <li>3. 次のコマンドを入力する。 <code>bsu.sh</code></li> </ol> <p>[Smart Update] ウィンドウが表示される。</p>

**注意：** Smart Update を UNIX システムで実行するには、ソフトウェアのアップグレードを実行するマシンに付属のコンソールが Java ベースの GUI をサポートしている必要があります。

3. [Smart Update] ウィンドウの [Installed Products] ペインで、更新する製品のリリースを選択します。  
使用できるサービス パックまたはローリング パッチがある場合は、このウィンドウの [Upgrade Options] ペインに表示されます。
4. [Upgrade Options] ペインで、インストールするサービス パックまたはローリング パッチを選択し、[OK] をクリックします。  
[Enter eSupport Identification] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 有効な eSupport ユーザ名とパスワードを入力し、[Verify] をクリックします。

## サービス パックとローリング パッチのインストール

**注意：** Smart Update を使用してサービス パックまたはローリング パッチをインストールするには、有効な eSupport アカウントを持っている必要があります。持っていない場合は、<http://support.bea.com> で登録してアカウントを取得できます。

[BEA Installation Program Welcome] ウィンドウが表示されます。

6. [Next] ボタンをクリックしてインストールを続行します。[Exit] をクリックすると、いつでもインストールをキャンセルできます。

[Downloading Archive Information] ウィンドウが短時間表示され、その後 [Specify Download Options] ウィンドウが表示されます。

7. ソフトウェアのダウンロードのための設定を次のように指定します。

- ソフトウェア アップグレード ソース ファイルをダウンロードするストレージ ディレクトリを指定する。
- チェック ボックスを選択することで、インストールが完了した後で、ダウンロードしたファイルを削除するかどうかを指定する。このチェック ボックスを選択しない場合は、ダウンロードしたファイルが指定したディレクトリに保存されます。
- チェック ボックスを選択することで、ダウンロードで HTTP プロキシ サーバを使用するかどうかを指定する。HTTP プロキシ サーバを使用するには、次の情報を指定する必要があります。

ホスト — プロキシ サーバの名前または IP アドレス

ポート — プロキシ サーバのポート番号

8. [Next] をクリックします。

[Archive Download] ウィンドウが表示されます。

9. チェック ボックスを選択または選択解除することで、ダウンロードが完了した後で、インストールを自動的に続行するかどうかを指定します。このチェック ボックスは、デフォルトで選択されています。これを選択解除した場合は、ダウンロードが完了してからインストールを続行するときに、[Next] をクリックする必要があります。

なんらかの理由でダウンロードを中断する必要がある場合は、[Pause] をクリックします。クリックした場合は、ダウンロードが中断され、[Pause] ボタンが [Resume] ボタンに変わります。ダウンロードを続行するときは、[Resume] をクリックします。

ダウンロードが完了すると、[Archive Integrity Check] ウィンドウが表示され、ダウンロードしたアップグレード アーカイブ ファイルの整合性が検証されます。

## ダウンロード可能なアップグレード インストーラを使用したサービス パック とローリング パッチのインストール

アーカイブの検証が完了すると、[Confirm Product Directory] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、BEA ホーム ディレクトリのパスおよび WebLogic Platform ソフトウェアの更新が行われる製品ディレクトリのパスが表示されます。

10. [Next] ボタンをクリックしてアップグレードを続行します。

ステータス ウィンドウに、インストールの進行状況が表示されます。インストールが終了すると、[Installation Complete] ウィンドウが表示されます。

11. [Installation Complete] ウィンドウで [Done] をクリックします。

[Smart Update] ウィンドウが表示されます。ウィンドウの [Installed Products] ペインには、アップグレード リリースレベルが表示されます。[File | Exit] を選択して [Smart Update] ウィンドウを閉じます。

# ダウンロード可能なアップグレード イン ストーラを使用したサービス パックとローリ ング パッチのインストール

メンテナンス リリースを使用できる場合は、

<http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html> にある Evaluation Center からパッケ  
ージアップグレード インストーラをダウンロードすることができます。

**注意：** サービス パックとローリング パッチは、登録済みのサポート カスタマだけがパス  
ワードで保護された Web サイトからダウンロードできます。これらの製品アップ  
デートをダウンロードするには、eSupport ユーザ名とパスワードを使用してログイ  
ンする必要があります。eSupport アカウントを持っていない場合は、BEA カスタ  
マサポート Web サイトで登録して取得することができます。

このアップグレード インストーラは、WebLogic Platform コンポーネントすべてのアップ  
デート ファイルで構成されています。ただし、システムにすでにインストールされている  
コンポーネントのみアップグレードされます。たとえば、インストールが WebLogic  
Platform 7.0 の WebLogic Server と WebLogic Integration コンポーネントで構成されてい  
る場合は、アップグレード インストーラでアップグレードされるのは、この 2 つのコンポー  
ネントのみです。アップグレード インストーラを使用して、WebLogic Portal などの別の

## サービスパックとローリングパッチのインストール

コンポーネントをインストールすることはできません。別のコンポーネントをインストールするには、1-8 ページの「WebLogic Platform の配布方法」で説明されているように、ネット インストーラまたはパッケージ インストーラを使用します。

アップグレード インストーラは、UNIX と Windows の両プラットフォームで次のモードで実行できます。

- グラフィカル モード。詳細については、7-8 ページの「グラフィカル モードでのアップグレード インストーラの使用」を参照してください。
- コンソール モード。詳細については、7-11 ページの「コンソール モードでのアップグレード インストーラの使用」を参照してください。

**注意：** グラフィカル モード インストールを実行するには、コンソールで Java ベースの GUI がサポートされている必要があります。インストールプログラムで Java ベースの GUI がサポートされていないと判断された場合は、自動的にコンソールモードでインストールプログラムが起動されます。

アップグレード インストーラでは、サイレント モード インストールはサポートしていません。

WebLogic Platform インストールプログラムの実行には、Java 実行時環境 (Java run-time environment: JRE) が必要です。JRE を備えた Java 2 Software Development Kit (SDK) は、Windows インストールプログラムおよび一部の UNIX インストールプログラム (ファイル名の末尾が .bin のもの) にバンドルされています。その他の UNIX プラットフォームの WebLogic Platform インストールプログラムには、Java 2 SDK はバンドルされていません。これらのインストールプログラムのファイル名の末尾は、.jar です。.jar インストールプログラムを実行するには、適切なバージョンの Java 2 SDK がシステムにインストールされており、PATH 変数の前に SDK の bin ディレクトリが指定されている必要があります。インストールプロセスにより、JAVA\_HOME および関連する変数がこのディレクトリを指すように設定されるため、SDK を使用することが重要です。

## グラフィカル モードでのアップグレード インストーラの使用

アップグレード インストールを UNIX および Windows システム上でグラフィカル モードで実行するには、次の手順を実行します。

## ダウンロード可能なアップグレード インストーラを使用したサービス パック とローリング パッチのインストール

1. <http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html> にある **Evaluation Center** からプラットフォームに適したアップグレード インストーラをダウンロードします。

**注意：** アップデートをダウンロードするには、**eSupport** ユーザ名とパスワードを使ってログインする必要があります。**eSupport** アカウントを持っていない場合は、**BEA カスタマ サポート Web** サイトで登録して取得することができます。

2. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サービス パックまたはローリング パッチのホット インストールはサポートされていません。
3. 次の表の説明に従って、アップグレード インストーラを起動します。

**表 7-2 グラフィカル モードでのアップグレード インストーラの起動**

アップグレード インストーラを 起動するプラット フォーム	手順
Windows	<ol style="list-style-type: none"><li>1. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動し、<i>filename.exe</i> をダブルクリックする。<i>filename.exe</i> は、<b>Evaluation Center</b> からダウンロードしたインストールファイルの名前で、たとえば、<i>platformXXX_upgrade_win32.exe</i> のようになる。このファイル名の <b>XXX</b> はインストールしているソフトウェアのバージョン番号。 インストールプログラムが起動し、アップグレードがインストールされる。</li><li>2. 手順 3 に進む。</li></ol>

表 7-2 グラフィカル モードでのアップグレード インストーラの起動

アップグレード インストーラを 起動するプラッ トフォーム	手順
UNIX	<p data-bbox="326 407 861 431">ファイル名の末尾が <b>.bin</b> のインストーラの場合</p> <ol data-bbox="326 451 1174 797" style="list-style-type: none"><li data-bbox="326 451 1174 727">1. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力することでインストールプロシージャを呼び出す。 <pre data-bbox="364 521 669 578">chmod a+x filename.bin ./filename.bin</pre><p data-bbox="364 594 1174 727"><i>filename.bin</i> は BEA カスタマ サポート Web サイトからダウンロードしたアップグレード インストールプログラムの名前、たとえば、<i>platformXXX_upgrade_solaris.bin</i> のようになる。このファイル名の <i>XXX</i> はインストールしているソフトウェアのバージョン番号。 インストールプログラムが起動し、アップグレードがインストールされる。</p></li><li data-bbox="326 773 521 797">2. 手順 3 に進む。</li></ol>
	<p data-bbox="326 829 861 854">ファイル名の末尾が <b>.jar</b> のインストーラの場合</p> <ol data-bbox="326 873 1174 1393" style="list-style-type: none"><li data-bbox="326 873 1174 1027">1. 対象のシステムの PATH 変数定義の最初に、適切な Java 2 SDK の bin ディレクトリを指定する必要がある。 例： <pre data-bbox="364 979 700 1027">PATH=JAVA_HOME/bin:\$PATH export PATH</pre><p data-bbox="364 1044 942 1068"><i>JAVA_HOME</i> は、Java 2 SDK ディレクトリの絶対パス。</p></li><li data-bbox="326 1084 1174 1352">2. インストールファイルをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力することでインストールプロシージャを呼び出す。 <pre data-bbox="364 1149 669 1174">java -jar filename.jar</pre><p data-bbox="364 1190 1174 1320"><i>filename.jar</i> は BEA カスタマ サポート Web サイトからダウンロードしたアップグレード インストールプログラムの名前、たとえば、<i>pj_platformXXX_upgrade_generic.jar</i> のようになる。このファイル名の <i>XXX</i> はインストールしているソフトウェアのバージョン番号。 インストールプログラムが起動し、アップグレードがインストールされる。</p></li><li data-bbox="326 1369 521 1393">3. 手順 3 に進む。</li></ol>

4. [ ようこそ ] ウィンドウでテキストを確認し、[Next] をクリックします。

## ダウンロード可能なアップグレード インストーラを使用したサービス パック とローリング パッチのインストール

[BEA ホーム ディレクトリの選択] ウィンドウが表示されます。

5. 更新する **WebLogic Platform** のリリースが存在する **BEA** ホーム ディレクトリを選択し、[Next] をクリックします。

[製品ディレクトリを確認] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、**BEA** ホーム ディレクトリのパスおよび **WebLogic Platform** ソフトウェアの更新が行われる製品ディレクトリのパスが表示されています。

6. [次へ] をクリックします。

アップグレード インストール中に、進行状況ウィンドウが表示されます。インストールが終了すると、[Installation Complete] ウィンドウが表示されます。

7. [Installation Complete] ウィンドウで [Done] をクリックし、インストールプログラムを終了します。

## コンソール モードでのアップグレード インストーラの使用

アップグレード インストールを **UNIX** および **Windows** システム上でコンソール モードで実行するには、次の手順を実行します。

**注意：** この節では、`/home1/bea/weblogic700` のように、**UNIX** 区切り文字であるスラッシュ (/) をパス名に使用します。**Windows** システムでパス名を入力する場合は、スラッシュを **Windows** のパス名の区切り文字であるバックスラッシュ (\) に置き換えます。したがって、`/home1/bea/weblogic700` の代わりに、**Windows** システムでは `C:\bea\weblogic700` と入力します。

1. <http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html> にある **Evaluation Center** からプラットフォームに適したアップグレード インストーラをダウンロードします。

**注意：** アップデートをダウンロードするには、**eSupport** ユーザ名とパスワードを使ってログインする必要があります。**eSupport** アカウントを持っていない場合は、**BEA** カスタマ サポート **Web** サイトで登録して取得することができます。

2. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サービス パックまたはローリング パッチのホット インストールはサポートされていません。
3. 次の表の説明に従って、アップグレード インストーラを起動します。

表 7-3 コンソール モードでのアップグレード インストーラの起動

アップグレード イン ストーラを起動する プラットフォーム	手順
Windows	<ol style="list-style-type: none"><li>1. MS-DOS コマンド プロンプト ウィンドウを開く。</li><li>2. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力することでインストール プロシージャを呼び出す。 <code>filename.exe -mode=console</code> <code>filename.exe</code> は、BEA カスタマ サポート Web サイトからダウンロードしたアップグレード インストーラの名前で、たとえば、<code>platformXXX_upgrade_win32.exe</code> のようになる。このファイル名の <code>XXX</code> はインストールしているソフトウェアのバージョン番号。 アップグレード インストーラが <b>WebLogic Platform</b> メンテナンス リリースのインストールを開始する。</li><li>3. 手順 3 に進む。</li></ol>

表 7-3 コンソール モードでのアップグレード インストーラの起動

アップグレード イン ストーラを起動する プラットフォーム	手順
UNIX	<p>ファイル名の末尾が <b>.bin</b> のインストーラの場合</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. インストールプログラムをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力することでインストール プロシージャを呼び出す。 <pre>chmod a+x filename.bin</pre><pre>./filename.bin -mode=console</pre><i>filename.bin</i> は BEA カスタマ サポート Web サイトからダウンロードしたアップグレード インストーラの名前で、たとえば、<i>platformXXX_upgrade_solaris.bin</i> のようになる。このファイル名の <i>XXX</i> はインストールしているソフトウェアのバージョン番号。 インストールプログラムが起動し、アップグレードがインストールされる。</li><li>2. 手順 3 に進む。</li></ol>
	<p>ファイル名の末尾が <b>.jar</b> のインストーラの場合</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 対象のシステムの PATH 変数定義の最初に、適切な Java 2 SDK の bin ディレクトリを指定する必要がある。 例： <pre>PATH=JAVA_HOME/bin:\$PATH</pre><pre>export PATH</pre><i>JAVA_HOME</i> は、Java 2 SDK ディレクトリの絶対パス。</li><li>2. インストールファイルをダウンロードしたディレクトリに移動して、次のコマンドを入力することでインストール プロシージャを呼び出す。 <pre>java -jar filename.jar -mode=console</pre><i>filename.jar</i> は BEA カスタマ サポート Web サイトからダウンロードしたアップグレード インストーラの名前で、たとえば、<i>pj_platformXXX_upgrade_generic.jar</i> のようになる。このファイル名の <i>XXX</i> はインストールしているソフトウェアのバージョン番号。 インストールプログラムが起動し、アップグレードがインストールされる。</li><li>3. 手順 3 に進む。</li></ol>

**注意：** インストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを使用してパス名を指定します。

## サービスパックとローリングパッチのインストール

例：

```
platformXXX_upgrade_solaris.bin -mode=console
-log=/home/bea/logs/platform_install.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するときに存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログファイルは作成されません。この例では、ファイル名の xxx は、インストールしているソフトウェアのバージョン番号です。

4. [ようこそ]プロンプトで next を入力するか、[Enter] を押してインストールプロセスを続行します。

[BEA ホーム ディレクトリの選択]プロンプトが表示されます。

5. 更新する **WebLogic Platform** インストールに関連付けられた **BEA ホーム ディレクトリ** を選択します。現在のマシンに **WebLogic Platform** インストールが 1 つしかない場合は、**BEA ホーム ディレクトリ** が 1 つだけリストに表示されます。**BEA ホーム ディレクトリ**の詳細については、1-19 ページの「**BEA ホーム ディレクトリの選択**」を参照してください。

インストールプログラムには次のプロンプトが表示されます。

BEA ホーム ディレクトリの選択：

```
->1| /home/bea
 2| /home1/beahome2
```

選択するインデックス番号を入力してください OR [Exit][Previous][Next] >

[Enter] を押して選択されている **BEA ホーム ディレクトリ**を使用するか、選択する **BEA ホーム ディレクトリ**の番号を入力します。

選択されている **BEA ホーム ディレクトリ**を使用する場合でも、別の **BEA ホーム ディレクトリ**を指定する場合でも、次のサンプルで示すように、選択を確認するよう促すプロンプトが表示されます。

BEA ホーム ディレクトリの選択：

```
->1| はい、この BEA ディレクトリを使用します [/home/bea]
 2| いいえ、BEA ホーム ディレクトリの選択に戻ります
```

選択するインデックス番号を入力してください OR [Exit][Previous][Next]>

## ダウンロード可能なアップグレード インストーラを使用したサービス パックとロー

選択を確認するには、1 を入力するか [Enter] を押します。また、入力を変更するために、[BEA ホーム ディレクトリの選択] パネルに戻るには、2 を入力します。

適切な BEA ホーム ディレクトリを選択してその選択を確認すると、[製品ディレクトリを確認] パネルが表示されます。

6. [製品ディレクトリを確認] パネルに、WebLogic Platform ソフトウェアの更新が行われるフォルダが示されます。

例：

製品ディレクトリを確認：

製品インストール ディレクトリを確認：[home/bea/weblogic700]

/home/bea/weblogic700 内のファイルが 7.0.2.0 メンテナンス レベルにアップグレードされます。

入力 [Exit][Previous][Next]>

[Enter] を押すか、next と入力して続行します。次のテキストが表示されます。

7. 製品ディレクトリを確認した後、特定のファイルのバックアップ コピーが以前のインストールから作成され、その後これらのファイルの新バージョンがインストールされます。

インストールが完了すると、次のプロンプトが表示されます。

Install Complete

WebLogic Platform 7.0.2.0 の  
/home/bea/weblogic700 への  
インストールが正常に完了しました。

続行するには、どれかキーを押して下さい。または [Exit] >

8. 任意のキーを押してインストールプログラムを終了します。

## Smart Update を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストール

メンテナンス アップグレードのアンインストールが必要な場合があります。Smart Update を使用すると、以下の方法で、システム インストールを以前のリリース バージョンに戻すことができます。

- システムで以前のサービス パック インストールに戻す。たとえば、最初に WebLogic Platform 7.0 をインストールしてから Service Pack 1 (SP1) をインストールした場合は、後で WebLogic Platform 7.0 に戻すことができます。同様に、システムに WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) をインストールしており、WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) にアップグレードした場合は、WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) に戻すことはできませんが、WebLogic Platform 7.0 に戻すことはできません。
- ローリング パッチの基盤になっている以前のサービス パックに、ローリング パッチ アップグレードを戻す (ローリング パッチは累加的なものであり、ローリング パッチをインストールするたびに、特定のサービス パックに対する以前のすべてのローリング パッチが置き換えられます)。たとえば、最初に WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) をインストールしてからローリング パッチ 1 および 2 (RP1 および RP2) をインストールした場合は、後で WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) に戻すことができます。ただし、以前のローリング パッチに戻すことはできません。

**注意：** WebLogic Platform コンポーネントをインストールまたはアンインストールしてアップグレードしたインストールを変更する場合、その製品の以前のバージョンにはロールバックできません。

標準のアンインストール処理を使用して、サービス パックまたはローリング パッチをアンインストールすることもできます。詳細については、第 8 章「WebLogic Platform のアンインストール」を参照してください。

Smart Update を使用してサービス パックまたはローリング パッチをアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. 7-5 ページの表 7-1 「Smart Update の起動」の説明に従って、Smart Updates を起動します。
2. 左側のペインで、ロールバックする製品のリリースを選択します。

アンインストール (ロールバック) できるサービスパックとローリングパッチがウィンドウの [Downgrade Options] ペインに表示されます。

3. [Downgrade Options] ペインで、アンインストールするサービスパックまたはローリングパッチを選択し、[OK] をクリックします。

BEA アンインストールプログラムが開き、[Welcome] ウィンドウが表示されます。

4. [Next] をクリックして続行します。

ステータスウィンドウに、アンインストール処理の進行状況が表示されます。ロールバックまたはアンインストールが完了すると、メッセージが表示されます。

5. ステータスウィンドウで [Done] をクリックします。

[Smart Update] ウィンドウが表示されます。[File | Exit] を選択して [Smart Update] ウィンドウを閉じます。

## 次に行う作業

WebLogic Platform 7.0 インストールのアップグレード後、ユーザドメインをアップグレードする必要がある場合があります。[コンフィグレーション] ウィザードと WebLogic Platform 7.0 GA または WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) ソフトウェアで使用できるテンプレートを使用してユーザドメインを作成した場合は、次の URL にある『BEA WebLogic Platform リリースノート』の「コンフィグレーション ウィザードを使用して作成されたドメインを移行する」に記載されているリリース 7.0 (Service Pack 2) のアップグレード プロシージャを使用してドメインを更新する必要があります。

<http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/relnotes/relnotes.html#migration>

## サービス パックとローリング パッチのインストール

# WebLogic Platform のアンインストール

以下の節では、プラットフォーム別に **WebLogic Platform** をアンインストールする手順を説明します。

- アンインストールプログラムについて
- グラフィカルモードでの **WebLogic Platform** のアンインストール
- コンソールモードでの **WebLogic Platform** のアンインストール
- サイレントモードでの **WebLogic Platform** のアンインストール
- **WebLogic Platform** の再インストール

## アンインストールプログラムについて

以下の節では、**Windows** および **Unix** システムで **WebLogic Platform** をアンインストールする手順を説明します。**WebLogic Platform** は、グラフィカルモード、コンソールモード、またはサイレントモードを使用してアンインストールできます。グラフィカルモードでアンインストールプログラムを実行するには、コンソールで **Java** ベースの **GUI** がサポートされている必要があります。アンインストールプログラムで **Java** ベースの **GUI** がサポートされていないと判断された場合は、自動的にコンソールモードでアンインストールプログラムが起動されます。

WebLogic Platform の個別のコンポーネントをアンインストールすることも、インストールしたプログラム全体をアンインストールすることもできます。WebLogic Platform をアンインストールしても、インストールに関連付けられた BEA ホーム ディレクトリ、JVM、またはユーザが作成したドメインは削除されません。インストールプログラムでインストールしたコンポーネントだけが削除できます。WebLogic Platform インストール全体をアンインストールする場合は、インストールに関連付けられた WebLogic Platform 製品ディレクトリも削除されます。ただし、次のいずれかが当てはまる場合を除きます。

- 製品ディレクトリに顧客が作成したコンフィグレーション ファイルまたはアプリケーション ファイルが存在する場合。顧客が作成したコンフィグレーション ファイル、アプリケーション ファイル、またはドメインは削除されません。
- インストール全体をアンインストールしなかった場合。個別のコンポーネントをアンインストールした場合は、そのコンポーネントのインストール ディレクトリだけが削除されます。その他のコンポーネントのインストール ディレクトリはそのまま残ります。
- アンインストールプログラムが、製品ディレクトリ構造の中から呼び出された場合。特に `uninstaller` ディレクトリから呼び出された場合。

## サービス パックとローリング パッチのアンインストール

サービス パックまたはローリング パッチをインストールした場合は、次の方法で、システム インストールを以前のリリース バージョンに戻すことができます。

- システムで以前のサービス パック インストールに戻す。たとえば、最初に WebLogic Platform 7.0 をインストールしてから Service Pack 1 (SP1) をインストールした場合は、後で WebLogic Platform 7.0 に戻すことができます。同様に、システムに WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) をインストールしており、WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) にアップグレードした場合は、WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 1) に戻すことはできますが、WebLogic Platform 7.0 に戻すことはできません。
- ローリング パッチの基盤になっている以前のサービス パックに、ローリング パッチ アップグレードを戻す (ローリング パッチは累加的なものであり、ローリング パッチをインストールするたびに、特定のサービス パックに対する以前のすべてのローリング パッチが置き換えられます)。たとえば、最初に WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) をインストールしてからローリング パッチ 1 および 2 (RP1 および RP2) をイ

インストールした場合は、後で WebLogic Platform 7.0 (Service Pack 2) に戻すことができます。ただし、以前のローリング パッチに戻すことはできません。

**注意：** サービス パックまたはローリング パッチをインストールした後で、WebLogic Platform の追加のコンポーネントをインストールした場合は、この製品を以前のバージョンにロールバックすることはできません。

WebLogic Platform を以前インストールされていたバージョンに戻すには、アンインストールプログラムまたは Smart Update を使用できます。Smart Update を使用して以前のインストールにロールバックする方法については、7-16 ページの「Smart Update を使用したメンテナンス アップグレードのアンインストール」を参照してください。

# グラフィカル モードでの WebLogic Platform のアンインストール

次の手順を実行して、WebLogic Platform または個別のコンポーネントをグラフィカル モードでアンインストールします。

1. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サーバを Windows サービスにコンフィグレーションしている場合は、そのソフトウェアをアンインストールする前に、サービスを停止する必要があります。
2. 表 8-1 の説明に従って、アンインストールプログラムを起動します。

表 8-1 グラフィカル モードでのアンインストール プログラムの起動

アンインストール プログラムを起動する プラットフォーム	手順
Windows	<ol style="list-style-type: none"><li>1. Windows の [ スタート ] メニューから [ スタート   プログラム   BEA WebLogic Platform 7.0   Uninstall WebLogic Platform 7.0 ] を選択する。  WebLogic Platform アンインストーラの [ ようこそ ] ウィンドウが表示される。</li><li>2. 手順 3 に進む。</li></ol>
UNIX	<ol style="list-style-type: none"><li>1. コマンド シェルを開いて、次のディレクトリに移動する。 <code>WL_HOME/uninstall</code> <code>WL_HOME</code> は、WebLogic Platform をインストールしたディレクトリ。</li><li>2. プロンプトに <code>uninstall.sh</code> を入力する。  WebLogic Platform アンインストーラの [ ようこそ ] ウィンドウが表示される。  <b>注意：</b> システムでグラフィカルユーザ インタフェースがサポートされている場合は、アンインストールプログラムがグラフィカルモードで起動します。システムでグラフィカルユーザ インタフェースがサポートされていない場合は、アンインストールプログラムはコンソールモードで起動します。コンソールモードが起動した場合の詳細については、8-5 ページの「コンソール モードでの WebLogic Platform のアンインストール」を参照してください。</li></ol>

3. [ 次へ ] をクリックしてアンインストール プログラムを起動します。

次のウィンドウのいずれかが表示されます。

- [ コンポーネントを選択 ] ウィンドウ — 手順 4 に進みます。
- [Select Uninstall Type] ウィンドウ — サービス パックまたはローリング パッチをインストールした場合は、システム インストールを以前のサービス パックにロールバックすることができます。WebLogic Platform をアンインストールするには、[Uninstall WebLogic Platform] を選択し、次のステップに進みます。サービス パッ

クまたはローリング パッチをアンインストールするには、「グラフィカル モードでのサービス パックまたはローリング パッチのアンインストール」を参照してください。

4. 該当するチェック ボックスをチェックするか、またはチェックをはずし、アンインストールするコンポーネントを選択します。次に [次へ] をクリックします。デフォルトでは、インストールされたコンポーネントがすべて選択されており、それらが削除されることを示しています。
5. [WebLogic Platform 7.0 をアンインストールしています] ウィンドウで [完了] をクリックして、アンインストールプログラムを終了します。

## コンソール モードでの WebLogic Platform のアンインストール

次の手順に従い、コマンドライン インタフェースを使用して WebLogic Platform または個別のコンポーネントをアンインストールします。

1. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サーバを Windows サービスにコンフィグレーションしている場合は、そのソフトウェアをアンインストールする前に、サービスを停止する必要があります。
2. 表 8-2 の説明に従って、アンインストールプログラムを起動します。

表 8-2 コンソール モードでのアンインストール プログラムの起動

アンインストール プログラムを起動する プラットフォーム	手順
Windows	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. MS-DOS コマンド プロンプト ウィンドウを開いて次のディレクトリに移動する。 <code>WL_HOME\uninstall</code> ここで、<code>WL_HOME</code> は、<b>WebLogic Platform</b> をインストールしたディレクトリを表す。これは一般的に <code>C:\bea\weblogic700</code> である。</li> <li>2. 次のコマンドをプロンプトに入力する。 <code>uninstall -mode=console</code> ウェルカム テキストが表示される。</li> </ol>
UNIX	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. コマンド シェルを開いて、次のディレクトリに移動する。 <code>WL_HOME/uninstall</code> <code>WL_HOME</code> は、<b>WebLogic Platform</b> をインストールしたディレクトリ。</li> <li>2. プロンプトに次のコマンドを入力する。 <code>sh uninstall.sh -mode=console</code> ウェルカム テキストが表示される。</li> </ol>

3. [Enter] を押すか `next` と入力し、アンインストールプログラムの次のパネルに進みます。次のパネルのいずれかが表示されます。

- [コンポーネントを選択] パネル — 手順 4 に進みます。
- [Uninstall Options] パネル — サービス パックまたはローリング パッチをインストールした場合は、システム インストールを以前のサービス パックにロールバックすることができます。**WebLogic Platform** をアンインストールするには、プロンプトに `1` と入力して [Enter] を押し、次のステップに進みます。サービス パックまたはローリング パッチをアンインストールするには、8-11 ページの「コンソールモードでのサービス パックまたはローリング パッチのアンインストール」を参照してください。

4. アンインストールするコンポーネントを選択します。削除できるコンポーネントが次のように表示されます。

## コンソール モードでの WebLogic Platform のアンインストール

コンポーネントを選択 :

```
Release 7.0.X.0
|----WebLogic Server [0] v
| +----Server [0.0] v
| +----Workshop [0.1] v
| +----Server Examples [0.2] v
|----WebLogic Integration [1] v
| +----Integration Server [1.0] v
| +----Integration Examples [1.1] v
| +----Client only [1.2] v
|----WebLogic Portal [2] v
| +----Portal Server [2.0] v
| +----Portal Examples [2.1] v
| +----EBCC [2.2] v
|----Platform Samples and Utilities [3] v
| +-----QuickStart [3.0] v
| +-----Platform Tour [3.1] v
```

選択内容を切り替えるには、括弧内に表示される数字を正確に入力してください  
OR [Exit][Previous][Next]>

デフォルトでは、インストールされたコンポーネントがすべて選択されており、それらが削除されることを示しています。

コンポーネントをシステムにインストールしたままにする場合は、括弧内に表示されているとおりに正確に、コマンドラインにコンポーネントの数値コードを入力します。依存関係チェックが実行され、他のコンポーネントに必要なコンポーネンがアンインストールされないようにします。たとえば、**WebLogic Server** と **WebLogic Workshop** をシステムにインストールしておくには、コマンドラインに 0 と入力します。

**WebLogic Server**、**Server**、**Workshop**、および **Server Examples** の各エントリの横のチェックマーク (Windows の場合) または x (UNIX システムの場合) が消去され、これらのコンポーネントがアンインストールされないことがわかります。残りのコンポーネントである **WebLogic Integration** および **WebLogic Portal** は選択されており、アンインストールされることを示します。

### 5. [Enter] を押すか next と入力します。

次のテキストで示されているように、選択を確認するように促すプロンプトが表示されます。

コンポーネントを選択 :

- >1- はい、これらの選択したコンポーネントを使用します
- 2- いいえ、コンポーネントの選択に戻ります

選択するインデックス番号を入力してください OR [Exit][Previous][Next]>

6. [Enter] を押すか next と入力して、アンインストール処理を続行します。
7. アンインストール処理が完了したら、[Enter] を押すか done と入力して、アンインストールを完了し、アンインストールプログラムを終了します。

# サイレント モードでの WebLogic Platform のアンインストール

WebLogic Platform をサイレント モードでアンインストールする場合は、インストールされている WebLogic Platform 全体がアンインストールされます。サイレント モード アンインストールを使用して、以前のサービス パックにロールバックしたり、WebLogic Platform のコンポーネントを個別にアンインストールすることはできません。

サイレント モードでアンインストールプログラムを実行する場合は、グラフィカル モードやコンソール モードでアンインストールプログラムを実行する場合と同じ次のファイルおよびディレクトリが残ります。

- BEA ホーム ディレクトリ。これには、logs および utils サブディレクトリがあります。
- Java 2 SDK。WebLogic Platform と共にインストールした場合。
- ドメイン ディレクトリ。user\_projects にあるドメイン ディレクトリも含まれます。
- WebLogic Platform のインストール後に作成および更新されたその他のファイル。

これらのファイルは、手動で削除することができます。

サイレント モード アンインストールを使用して手動で WebLogic Platform をアンインストールすることはできますが、サイレント モード アンインストールはスクリプトでの使用を意図しています。スクリプトで使用するには、表 8-3 の手順を使用できます。

次の手順を実行し、コマンド ライン インタフェースを使用して WebLogic Platform をアンインストールします。

1. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サーバを Windows サービスにコンフィグレーションした場合は、そのソフトウェアをアンインストールする前に、サービスを停止する必要があります。

2. 表 8-3 の説明に従って、アンインストールプログラムを起動します。

**表 8-3 サイレント モードでのアンインストールプログラムの起動**

アンインストール プログラムを起動する プラットフォーム	手順
Windows	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. MS-DOS コマンド プロンプト ウィンドウを開いて次のディレクトリに移動する。  <code>WL_HOME\uninstall</code>                      ここで、<i>WL_HOME</i> は、WebLogic Platform をインストールしたディレクトリを表す。これは一般的に <code>C:\bea\weblogic700</code> である。</li> <li>2. 次のコマンドをプロンプトに入力する。  <code>uninstall -mode=silent</code></li> </ol>
UNIX	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. コマンド シェルを開いて、次のディレクトリに移動する。  <code>WL_HOME/uninstall</code>  <i>WL_HOME</i> は、WebLogic Platform をインストールしたディレクトリ。</li> <li>2. プロンプトに次のコマンドを入力する。  <code>sh uninstall.sh -mode=silent</code></li> </ol>

**注意：** サイレント モードでアンインストール プログラムを実行する場合は、エラーが発生した場合でも、アンインストールが進行中であることや、正しく完了したことを示すメッセージは表示されません。

サイレント アンインストールで冗長ログ ファイルを作成するには、コマンド ラインで `-log=full_path_to_log_file` オプションを指定します。

例：

```
uninstall -mode=silent -log=D:\logs\weblogic_uninstall.log
```

このパスで、ファイルを指定する必要があります。パス名に名前を入れるだけでは、フォルダを作成することはできません。パスでは、既存のフォルダだけを指定します。コマンドを実行するときに存在しないフォルダがパスに含まれている場合は、ログ ファイルは作成されません。

# グラフィカルモードでのサービスパックまたはローリングパッチのアンインストール

次の手順を実行して WebLogic Platform サービスパックまたはローリングパッチをアンインストールします。Smart Update を使用してサービスパックまたはローリングパッチをアンインストールすることもできます。7-16 ページの「Smart Update を使用したメンテナンスアップグレードのアンインストール」を参照してください。

1. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サーバを Windows サービスにコンフィグレーションしている場合は、そのソフトウェアをアンインストールする前に、サービスを停止する必要があります。
2. 表 8-1 「グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの起動」 on page -4 の説明に従って、アンインストールプログラムを起動します。

WebLogic Platform アンインストーラの [ようこそ] ウィンドウが表示されます。

3. [次へ] をクリックしてアンインストールプログラムを起動します。

[Select Uninstall Type] ウィンドウが表示されます。

4. システム インストールをロールバックするサービスパックを選択し、[次へ] をクリックします。

ステータス ウィンドウに、アンインストールの進行状況が表示されます。ロールバックが完了すると、メッセージが表示されます。

5. ステータス ウィンドウで [完了] をクリックします。

## コンソールモードでのサービスパックまたはローリングパッチのアンインストール

次の手順を実行して WebLogic Platform サービスパックまたはローリングパッチをアンインストールします。Smart Update を使用してサービスパックまたはローリングパッチをアンインストールすることもできます。7-16 ページの「Smart Update を使用したメンテナンスアップグレードのアンインストール」を参照してください。

1. 実行中のサーバがある場合は、シャットダウンします。サーバを Windows サービスにコンフィグレーションしている場合は、そのソフトウェアをアンインストールする前に、サービスを停止する必要があります。
2. 表 8-2 「コンソールモードでのアンインストールプログラムの起動」 on page -6 の説明に従って、アンインストールプログラムを起動します。  
ウェルカムテキストが表示されます。
3. [Enter] を押すか next と入力し、アンインストールプログラムの次のパネルに進みませぬ。  
[Uninstall Options] パネルが表示されます。
4. プロンプトに、システムインストールをロールバックするサービスパックのオプション番号を入力し、[Enter] を押します。  
アンインストールの進行状況を示すテキストメッセージが表示されます。

## WebLogic Platform の再インストール

同じ BEA ホームディレクトリまたは同じファイルロケーションにある同じコンポーネントの前の WebLogic Platform インストールの上に、同じバージョンの WebLogic Platform またはそのコンポーネントのいずれかを再インストールすることはできません。しかし、既存のインストールにコンポーネントを追加することはできます。たとえば、1 回のインストールで WebLogic Server をインストールして、別のインストールで WebLogic Integration または WebLogic Portal をインストールできます。

## WebLogic Platform のアンインストール

同じバージョンの 1 つの製品コンポーネントまたは **WebLogic Platform** の配布キット全体を、同じロケーションに再インストールするには、以前のインストールをまずアンインストールする必要があります。

**WebLogic Platform 7.0** を前に **WebLogic Platform 7.0** をインストールしたのと同じ **BEA** ホーム ディレクトリにインストールする場合は、インストールプログラムによって次のメッセージが表示されます。

```
A complete installation of WebLogic Platform 7.0 exists in this BEA Home. Please select another BEA Home or uninstall the product.
```

[OK] をクリックするか、ok と入力して、[BEA ホーム ディレクトリの選択] プロンプトに戻ります。

次のいずれかのオプションを選択します。

- 別の **BEA** ホーム ディレクトリを使用してソフトウェアのインストールを続行するには、**WebLogic Platform** のインストールが存在しない既存の **BEA** ホーム ディレクトリを選択するか、新規の **BEA** ホーム ディレクトリを作成する。
- インストールプログラムを終了する。**WebLogic Platform 7.0** を同じ **BEA Home** に再インストールする場合は、以前のインストールをアンインストールする必要があります。次の節のいずれかで説明されているように、ご使用のプラットフォームに適したアンインストールプログラムを起動します。

- 8-3 ページの「グラフィカル モードでの **WebLogic Platform** のアンインストール」
- 8-5 ページの「コンソール モードでの **WebLogic Platform** のアンインストール」

そして、次の節のいずれかで説明されているように、ソフトウェアを再インストールします。

- 第 2 章「グラフィカル モード インストールを使用した **WebLogic Platform** のインストール」
- 第 3 章「コンソール モード インストールを使用した **WebLogic Platform** のインストール」
- 第 4 章「サイレント モード インストールを使用した **WebLogic Platform** のインストール」

# BEA EDI Connect for WebLogic Integration のインストール

BEA では、BEA WebLogic Adapter for Power.Enterprise! 3.1 (BEA WebLogic Platform に付属) および BEA EDI Connect for WebLogic Integration (Power.Enterprise! として別売) という 2 つのコンポーネントでオプションの EDI サポートを実施しています。BEA WebLogic Adapter for Power.Enterprise! は、WebLogic Platform の標準インストールの一部としてインストールされます。この節では、BEA EDI Connect for WebLogic Integration に付属している Power.Enterprise! のサーバ (Power.Server!) およびクライアント (Power.Map! および Power.Manager!) をインストールするための要件および方法を説明します。

この節では、以下のトピックについて説明します。

- Power.Server! の要件
- Power.Enterprise! Server、Power.Server! のインストール
- Power.Enterprise! のクライアントである Power.Map! と Power.Manager! のインストール
- WebLogic Integration のライセンスのための BEA EDI Connect のインストール

## Power.Server! の要件

以下の節では、Power.Enterprise! サーバのデータベース、セキュリティ、およびシステムの要件を説明します。

### データベースの要件

サーバのデータベースが次の要件を満たしているか確認します。

- Oracle 8i、SQL Server 2000、または DB2 7.2
- マップ リポジトリ サイズ = 50MB
- 1000 の取引先 = 50MB
- データ バンクなしの 250K のセッション = 400MB
- データ バンク付きの 250K のセッション = 900MB

### セキュリティ要件

セキュリティ上の理由から、EDI Connect for WebLogic Integration はファイアウォールの後ろでデプロイします。外部のユーザが HTTP アクセスをできるようにするには、ファイアウォールを使用した直接アクセスを許可するか、プロキシサーバをセットアップします。

### システム要件

サーバが次のシステム要件を満たしているか確認します。

- Sun Solaris 7、HP-UX 11、Windows NT 4.0、Windows 2000、または AIX 4.3.3
- 最少で 512MB のメモリ。1GB を推奨。
- 100MB のディスク スペース

**注意：** UNIX オペレーティング システムの場合は、Java JRE バージョン 1.3 をサポートするために、すべての必要なパッチがインストールされている必要があります。

# Power.Enterprise! Server、 Power.Server! のインストール

Power.Server! のインストールでは、次の情報を指定する必要があります。

- サーバ名
- サーバ制御ポート
- 要求 API ポート
- HTTP ポート
- セキュア HTTP ポート
- ライセンス キー
- データベース サーバ名 (Oracle インスタンス名)
- データベース ポート
- データベース ユーザ ID
- データベース パスワード
- データベース ホスト名 — クライアント マシンでも使用されるため、完全修飾名であることが必要です。

Power.Server! をインストールするには

1. BEA EDI Connect for WebLogic Integration の CD-ROM をシステムの CD-ROM ドライブに挿入します。
2. 次のいずれかを実行します。
  - Windows プラットフォームでは、スクリーンに表示される指示に従う。
  - UNIX プラットフォームでは、CD-ROM から `setup.sh` を実行する。

# Power.Enterprise! のクライアント である Power.Map! と Power.Manager! のインストール

次の節には、Power.Enterprise! クライアントのマシン要件が記載されており、それに続いてインストール方法が書かれています。

## システム要件

Power.Enterprise! クライアント マシンは、次の最低基準を満たしている必要があります。

- Windows 2000 または Windows NT 4.0
- 50MB の空きディスク スペース
- Internet Explorer 5.0
- 266MHz の Pentium 系プロセッサと 128MB のメモリ
- 400MHz の Pentium III または同等品と 256MB のメモリを推奨

## インストール方法

Power.Map! および Power.Manager! をクライアント マシンにインストールするには

1. BEA EDI Connect for WebLogic Integration CD をクライアントの CD-ROM ドライブに挿入します。
2. 画面に表示される指示に従います。

EDI 統合の詳細については、「*WebLogic Integration との EDI の使用*」を参照してください。

# WebLogic Integration のライセンスのための の BEA EDI Connect のインストール

EDI Connect for WebLogic Integration ソフトウェア (別売) をダウンロードする場合にも、CD-ROM からインストールする場合にも、次の URL にある BEA Web サイトから Power.Enterprise! 評価ライセンスを取得する必要があります。

<http://www.beasys.co.jp/evaluation/index.html>

サーバである Power.Server! 用と、クライアントである Power.Manager! および Power.Map! 用の 2 つのライセンス キーが必要です。評価目的では、BEA Web サイトからダウンロードした同じライセンス キーを、クライアント ソフトウェアとサーバ ソフトウェアの両方に使用できます。

クライアント ソフトウェアおよびサーバ ソフトウェアのインストールでは、ライセンス キーを入力するよう求められます。評価ライセンス キーは、生成されてから 30 日後に期限切れになることに注意してください (これは、ソフトウェアをインストールしてから 90 日後に期限切れになる BEA WebLogic Platform の評価ライセンスと異なります)。

Power.Enterprise! のサーバ コンポーネントおよびクライアント コンポーネントの製品ライセンスは、EDI Connect for WebLogic Integration ソフトウェアを購入したときに取得できます。詳細については、BEA の販売代理店にお尋ねください。

評価ライセンスから永続的なライセンスにアップグレードするには、次の手順のいずれかを実行します。

- Windows プラットフォームでは、[License Activator (client)] または [License Activator (server)] を [PowerIt] プログラム グループから起動する。ダイアログ ボックスが表示されます。新規のライセンス キーを正しいフィールドに入力します。
- UNIX プラットフォームでは、`Power.Enterprise!_installation_directory/bin` ディレクトリに移動して、`license_key_activator.sh` スクリプトを実行する。X Window ベースのユーザ インタフェースが起動されて、ライセンス キーを更新できます。



# 索引

## B

BEA ホーム ディレクトリ

概要 1-19

コンポーネントの解説 1-20

サンプル構造 1-19

## C

Contivo Analyst 1-8

インストールの注意 1-8

## E

EBCC 1-7

EDI Connect for WebLogic Integration

インストール A-1

ライセンス インストール A-5

EDI 統合 1-6

## J

JRockit

概要 1-11

変更、Sun SDK 1-12

## L

license.bea

概要 1-21

更新 5-2

## Q

QuickStart、使用 6-1

## R

registry.xml

概要 1-22

## S

sdk ディレクトリ

概要 1-20

silent.xml 4-4, 4-15

データ値 4-6

変更 4-5

Smart Update

アンインストール、メンテナンス 7-16

概要 1-25

使用 7-4

## U

UNIX インストール

グラフィカル モード

.bin インストーラ 2-4

.jar インストーラ 2-6

コンソール モード

.bin インストーラ 3-5

.jar インストーラ 3-6

サイレント モード

.bin インストーラ 4-13

.jar インストーラ 4-14

UpdateLicense ツール

概要 1-22

## W

WebLogic

Express、インストール 1-2  
Server 1-4  
Workshop 1-4  
WebLogic Platform の再インストール 8-11  
Windows スタート メニュー 6-6

## あ

アップグレード 1-24  
    アップグレード インストーラの使用  
        7-7  
    使用、Smart Update 7-4  
アップグレード インストーラ 7-7  
    グラフィカル モードでの使用 7-8  
    コンソール モードでの使用 7-11  
アンインストール  
    概要 8-1  
    グラフィカル モード 8-3  
    コンソール モード 8-5  
    サービス パック 7-16  
    サイレント モード 8-8  
暗号、128 ビット  
    概要 1-17  
    有効化 5-4

## い

移行 1-24  
印刷、製品マニュアル xi  
インストール  
    グラフィカル モード  
        UNIX システムの起動 2-4  
        Windows システムの起動 2-2  
    コンソール モード 3-4  
    サイレント モード 4-1, 4-2  
インストールプログラム  
    概要 1-2  
    グラフィカル モード ウィンドウの解説  
        2-7  
    コンソール モードの解説 3-8  
インストール方法 1-3

## う

ウィンドウの解説  
    BEA ホーム ディレクトリを選択 2-7  
    アーカイブ整合性チェック 2-10  
    インストールの種類を選択 2-8  
    コンフィグレーション ウィザードを実  
        行 2-11  
    コンポーネントの選択 2-9  
    製品ディレクトリを選択 2-11  
    ダウンロード オプションを指定 2-10  
    ダウンロードのステータス 2-10  
    ようこそ 2-7  
    ライセンス契約 2-7

## か

開発者ライセンス 5-2  
カスタマ サポート情報 xi

## く

グラフィカル モード インストール  
    UNIX システム 2-4  
        .bin インストーラ 2-4  
        .jar インストーラ 2-6  
    Windows システム 2-2

## こ

コンソール モード インストール  
    UNIX システム 3-4  
        .bin インストーラ 3-5  
        .jar インストーラ 3-6  
    Windows システム 3-2  
コンフィグレーション ウィザード 2-12  
    オプション 2-13  
    サイレント モードでの実行 4-6

## さ

サービス パック 7-2  
サイレント モード アンインストール 8-10

サイレント モード インストール

UNIX システム 4-12

.bin インストーラ 4-13

.jar インストーラ 4-14

Windows システム 4-11

オプション 4-6

概要 4-1

サンプル テンプレート 4-15

処理 4-2

テンプレート ファイルの作成 4-4

サポート

テクニカル xii

サンプル 6-2

## し

システム パスワード

サイレント モード インストールの設定  
4-7

システム要件 1-13

ショートカット、Windows 6-5

## す

スタート メニュー 6-6

## せ

製品ライセンス 5-2

## そ

ソフトウェア コンポーネント 1-4

WebLogic Integration 1-5

WebLogic Portal 1-7

WebLogic Server 1-4

WebLogic Workshop 1-4

## た

ダウンロード方法 1-9

## て

テンプレート

サイレント モード インストール 4-15

サイレント モード インストールの作成  
4-4

ディレクトリ構造 6-8

データベース、切り替え、デフォルト 6-3

## ね

ネット インストーラ 1-9

## は

配布

CD-ROM 1-10

Web ダウンロード 1-9

配布方法 1-8

パッケージ インストーラ 1-9

## ひ

評価ライセンス 5-2

## ま

マニュアル、入手先 x

## よ

要件

一時ディスク スペース 1-15

システム 1-13

## ら

ライセンス

EDI Connect for WebLogic Integration の  
インストーラ A-5

開発者 5-2

概要 5-1

更新 5-2

製品 5-2

評価 5-2

## ろ

ローリング パッチ 7-2